歌集があり脫俗的）源實朝（歌調、雄健で武人的風格があつた。）鴨長明等。

總合問題

1 武士道の起源（七高）

① 意義　我國の武士道とは恩を感じて君の爲に身を捧げ、勇武廉恥を尙び、名を重んじて死を輕んずると共に、神佛を敬ひ、禮儀を正しくし、寬容の精神と風雅な情操を有する事である。

② 淵源　かゝる武士道は武士の興隆に伴つて現れたが、大伴氏の一族が「海行かば水漬く屍、山行かば草蒸す屍大君の邊にこそ死なめ顧みはせじ」と勵ましあつた如く、其傾向は古代からの固有精神に存し、忠勇義烈の事蹟は神代の物語（天壇子の子は武の象徵であり、又八岐大蛇からの靈劍集の神話等）を始め建國の大業、朝鮮の經營、熊襲、蝦夷の征伐等に無數に傳へられてゐる。

③ 武士道の發生　平安時代、榮華に耽つた貴族には武士道精神は見えなかつたが、昔乍らに質實剛健の氣風を存した地方の武士は、弓馬の道を勵み、武勇を重んじ、主從は恩誼に基いて事ある時は君の馬前に討死するを第一の名譽とし、卑怯未練を賤しんだ。而してかゝる尙武の氣風は古來蝦夷地に接した東國に著しく、關八州は以て全國に當たるといはれる位だつた。（例―義家の鬪應の座　鎌倉權五郎の眼の矢）彼等は常に生死の境に出入するから、眞面目な宗教的信仰を生じ、敵に對しても禮篤く、降つた者を優遇し戰死者の靈を祭る等の美風を存し、又征戰匆忙の間に於て花を詠じ月に吟ずる優しい雅懷をもつものも少くなかつた。（衣川に於ける義家責任の應答　勿來關に於ける義家の吟詠）

2 武士道の發達（新潟高・長崎高商・三高・彦根高商）

① 鎌倉幕府と武士道　鎌倉幕府は源氏累代恩顧の東國武士を基礎とする故、源氏三代の將軍の恩誼は常に力說されて御家人統制の基礎とされた。故に幕府への忠節は御家人第一の要務であり、ひいて家名の尊重、父祖への孝道となつた。又武勇の好尙と儉素の風習は武士の面目として尊重され、狩獵・騎射が盛に行はれ、賴朝・時賴等は身を以て儉素の模範を示した。

② 武士道と鎌倉時代の文化及び社會への影響（東商大學・彦根高商・海兵・海員）

武士が政治の實權を握り、武士道が全盛を極めた爲、鎌倉時代の文化及び社會狀態はその影響を蒙る事頗る大であつた。

（1）佛教　從來の莊嚴な儀式や深遠な學問を捨て、簡易な形式と切實な信仰を主とする新佛教特に禪宗が起り、武士道の精神と相通じ、武士の歸依者も多かつた。

（2）學問・文學　武士道は文雅の道をも尙ぶ故、之に心をよせるものも現はれ、北條實時・顯時父子は金澤文庫をたて、源實朝は當代に傑出した歌人だつた。殊に和漢混淆文でかゝれた軍記物（保元・平治・平家の諸物語・源平盛衰記等）は廣く士民の間に行はれて武士道精神の鼓吹に與つて力があつた。

（3）美術工藝　武士の好尙は此方面にも著しく顯はれた。

（イ）建築　實用的で質素な武家造住宅が流行し、寺院も簡素雄健な建築になつた。

（ロ）彫刻　雄渾な佛像彫刻が多い。

（ハ）繪畫　戰爭を題材とした繪卷物が多かつた。

（ニ）武器武具の製造は正に全盛時代を現出し、甲冑刀劍などに名工が輩出した。

（4）武士道と婦道　嚴肅な道德的精神が旺盛となり、婦女の間には武士道に對して貞節を重んずる婦道の發達を見るに至つた。

3 武士道の變遷

① 吉野朝時代　建武中興につぐ吉野朝五十餘年間の爭亂の間にも武士道は最もよく發揮され、北畠、楠木、新田、菊池等諸氏の一族には其權化とも稱すべき人が多い。

② 室町時代　此時代も戰國の世になると、武士道本來の面目が漸く失はれる傾向であつたが、倚花も實もある武士道の體現者は少くはなかつた。（信玄の鹽、謙信の陣中の詩賦、秀吉の耳塚等）

③ 江戸時代　關ヶ原や大阪の浪人が召抱へられ、切腹、敵討の風習が一般に行はれる等武士道の美風が存した上、其學問的研究の發達を見た。併し太平久しく、武士の生活が奢侈安逸に流れるにつれて自然武士道の衰微を來したが、幕末維新の志士の間には尙此精神をよく發揮したものが少くない。

④ 現代　淵源の遠い此精神は脈々として現代に及び、明治十五年御下賜の軍人に賜はりたる勅諭は此武士道の結晶であり、其後の日清、日露の征戰及び滿洲・支那事變等に於ける皇軍將士の忠勇義烈と博愛の精神とは武士道の發揮であつて、實に我國民精神の中樞をなすものである。

4 鎌倉時代に新宗派の多く起りしは何故か（靜岡高）

① 現世悲觀の傾向　平安朝末期から保元の亂などで骨肉の爭があり、全盛を極めた平氏も廿年で亡び、源氏になつても義經、範頼、實朝などが非業な最期を遂げ、源氏の重臣も亡ぼされ、承久の亂では三上皇の御遠島など、兵亂と共に浮沈のはげしき現實に直面した當時の人々には、現世を悲觀し、何ものにかたよりたい要求があつた。

② ところが平安朝の佛敎は現世的、形式的でむづかしく、學問の盛でない時代に於ては一般むきでなかつた上に、平安時代末期の僧兵跋扈等で佛敎が墮落した爲に、來世淨土の念願を抱く信仰要求が盛になつた。

③ 新佛敎の特色　この要求に對し、新佛敎は武士や平民にわかり易く、永遠の未來に慰安を求めようとする實際的なものであり、日本化したものがあつた。例へば、念佛をとなへる一向宗（淨土眞宗）御題目をとなへる法華經の如き。又武士の間に行はれた禪宗の如きは精神修養に重きを置き、簡易直截な所が其の氣風に合した。かくの如くして、一面には時代が無常悲觀傾向に對し、其要求に合するやうな新宗派が出たのである。

【靜岡高校敎授講評】　史的考察力の不足　鎌倉時代に多く佛敎の新宗派の起つた理由として、舊佛敎の所說があまりに高尙深遠にして一般民衆の歸向するところとならなかつたとか、宗敎界の墮落腐敗は世の信望を繫ぐにたらなかつたといふが如き、內的事情に對しては相當の考察を加へたもののもあつたが、更に一步を進めて、戰亂うち續き、榮枯盛衰甚だしい時代であつたから、知らず識らずの間に世人の宗敎心を喚起した爲であるとか、或は新興の武士階級に高尙な敎理や形式に捉はれた宗敎よりも、簡易で深刻な宗敎を要求してやまなかつたといふが如き、時代の大勢、社會の風尙等の外的事情にまで思ひを致したものは極めて少かつた。（文部時報三九四號による）

5 武士道關係類題の展望——各高校の講評

（1） 武士道と儒敎佛敎との關係（五高）

（2） 鎌倉時代の武士の道德・風俗・信仰について（六高）

（3） 武士道の發達（三高）

（4） 武士道の精神は現代にも適用せらるべきや否や所見を開陳せよ（二高）

（5） 氏族制度時代並に鎌倉武家時代に於ける國民生活の美點を述べ、其れが現代生活に對して有つ意義を明かにせよ（高知高）

何れも武士道及びそれに關係した問題で、しかも五高以外は最近同一年度に出た問題である。時代的出題傾向を物語つてゐる事がわかる。今此全部についての講評や答案はのせられないので、拔萃によつて參考に供したい。

①【五高教授講評】（1）關係の有無を全般的に決定せんとする摂あり、例へば儒教の德目の全部が關係なければ武士道と儒教とは關係なしといふ如し。（2）武士道の德目の内如何なる點に於て儒教と關係を有し、又佛教と關係あるかを解かざるべからざるに、唯演繹的に武士は儒教を學び佛教を信仰せるが故に武士道に深き關係ありと說きしもの大部分なり。（文部時報五三七號による）

②【六高教授講評】鎌倉時代の新佛教に就ては極めて詳細に記述しながら問題の「武士の信仰」には少しも觸れてゐないもの、或は問題は「鎌倉時代」と時代に限定があるにも拘らず、室町時代の武士の生活を混同したものが多くあつた。（文部時報五九四號ノ二による）

③【三高教授講評】武士道そのものゝ内容を表はすに節義とか節儉とか主從關係とかいふ文字を用ひてゐる事は致し方がないとして、其武士道養成方法として、尙武であつたとか、犬追物笠懸をやつたと書いて、それ等の武張つた武術の修練が、何故に其人の精神力の養成に役立つものであるかといふ事には少しも言觸れて居ないし、又江戸時代の間に武士道なるものが整備されたといふ事については殆ど言及してゐない。（文部時報五九四號ノ二による）

④【二高教授講評】武士道の發達を精叙し、其精神を說かざるものあり、武士道と武家政治とを混同せしもの、武士道と武道とを混同せしものあり（何れも零點）現代に對する認識は其殆ど闕如せりと看做さざるを得ざりき。大多數は抽象的にして史的價値を認むる能はざりき。

優良答案の骨子（1）武士道の精神　通俗的にいへば個人的表現として恩義禮節廉潔節儉尙武堅忍等にして恩義は其の中樞をなす。公人的表現としては愛國心（元寇の際に於けるが如し）尊王忠君の心（建武中興の際に於ける如し）となる。（2）現代の叙述　現代日本の國際狀勢を略說す。（3）武士道の精神を以て現代を助長是正し得るや否やを論ぜざるべからず。（文部時報五九四號ノ二による）

六高本問成績	人
0 點	1
10 未滿	126
10 以上	300
20 以上	30
滿點(25)	2
計	459

⑤【高知高校教授講評】氏族制度精神並に武士道精神なる國民精神の傳統を、肯定し尊重する筆致は、大體に於て一致してゐたが、現在の國民が此傳統を確保してゐるかどうかの點に關しては、喜悲二樣の觀方があつた。又鎌倉武士道精神が、上古氏族制度精神の再生である、といふ兩者の脈絡に筆を及ぼした答案の尠かつたのは遺憾であつた……成績不良の答案は多く機械的暗記の弊を暴露したもので、例へば氏族制度の解說を詳述しても、其精神的特性に及ばなかつたり、鎌倉文化の細部を解說して武士道に全く觸れないといつた極端のものもあつた。（文部時報五九四號ノ二による）

氏族制度時代並に鎌倉武家時代に於ける國民生活の美點を述べ其れが現代生活に對して有つ意義を明かにせよ（高知高）の優良答案

優良答案　氏族制度時代は血族の集りである氏が、社會の單位となつてゐたのである。鎌倉武家時代は何等の血族關係もない者によつてつくられた主從關係であり、氏族制度とは根本に於て異なつてゐるが、此兩者は非常に多くの類似點を有する。

氏族制度時代に於ける美點は、（1）血族が氏の上下によく統一されてゐた事、（2）純良忠誠の心を有した事、（3）祖先を貴び氏神を各氏毎に祭つて祭祀を怠らず敬神崇祖の念を有した事、（4）生活狀態の非常に簡素であつた事、（5）性質の天眞爛漫であつた事などである。

鎌倉幕府時代に於ける美點は頼朝泰時時頼の奬勵によつて大いに琢磨された。（1）武士は主君との間に家の子郎黨の關係を有し、忠誠を主んじ主君の爲に一身を惜しまず、（2）廉恥を重んじ名を惜しみ名譽を尊び、（3）儉約質素であり、（4）武藝にはげみ遊戯も勇武で祖先を尊び、戰亂の間にも氏素

性をのべて後に戦ふ程だつた。

後世になると此士風を武士道と呼び、永く日本精神の根本となつてゐるが、かくて武士は質素倹約質實剛健忠節であり、禮節を重んじ藤原時代及び平家時代とはその國民生活に大きな懸隔があつた。以上に述べた樣に鎌倉武家時代及氏族制度時代はその國民精神は大體に於て似てゐた。今我が國家の現狀を省るに對外的には軍擴時代となり、對内的には經濟的にも行きつまらうとし、思想的には險惡となり人口問題があり、農漁村の疲弊がある等非常に多難を極めてゐる。而して今の日本は將に飛躍の時である。我々は西洋諸國の物質文明利己主義的な思潮に打勝つて古の精神に歸り、氏族制度及び鎌倉時代の人の心となつて、此日本精神によつて世界に貢獻せねばならぬ。考へて見ると此二時代に於ける精神は、唯今の時代に於ても重大なる役割を演ぜしめるべき時である。西洋流の自己中心主義に疑し、祖先を忘れ國家を忘れる如き行爲は、此先人の行爲に照してもゆめ〳〵してはならないのである。

6 平安・鎌倉兩時代に於ける道德觀念の相違

① 精神生活　平安時代の貴族は榮達と權勢慾を人生の目的とし、榮華を極める事が最大の幸福であつた。故に彼等は只管獵官に苦心し、權勢と富の存する所に蝟集する。彼等を結合するものは外的物質的で又一時的であつた。然るに、鎌倉時代の精神生活の中心たる武士道は主從間の思想、情誼、精神的訓練の修養が彼等の結合の大綱だつた。對人關係も平安時代の物質的一時的に反し、精神的永久的である。

② 理想生活　貴族は享樂主義・利己本位、其生活も遊戯的で偏に一身を全うせんとするに反し、武士は主從の相互的關係で、身命を主人に捧げるのを名譽としてゐた。貴族の慾望が現世の榮華にある所、武士は死後の名譽を重んじた。坐して歡樂を享受せんとする貴族に對し、戰場に馳驅して我生活を擴大せんとする武士だつた。

③ 善惡の標準　貴族は容姿端麗、優雅な生活を理想とし、亂暴・腕自者を惡人と稱した。平景清を惡七兵衞、源義平（義朝の弟）を惡源太といふ如きである。

④ 要するに平安時代は道德觀念尙幼稚で貴族生活は一種の頽廢氣分だつたが、鎌倉時代には武士道を發揮して國民道德上の重要な要素となし、堅實剛健であつた。

重要個別問題

1 金澤文庫（小樽高商・東外語・京城大學・山口高・六高・成蹊高・東高師・陸士）

（1）鎌倉時代の北條實時が子顯時と共に武藏國金澤の稱名寺内に建てた文庫で、和漢の文書を集めて僧侶の研究に便利を與へた。（2）後一旦衰へたが、室町時代に上杉憲實が之を再興し、德川時代、家康が此文庫を江戸城の南富士見亭にうつした。（3）此貴重な文庫本は今尙内閣文庫に多く傳はつてゐる。

2 源　空（神皇・國大）法然上人（東高師・廣高師）

（1）淨土宗の開祖で法然房と稱したので世人が法然上人とあがめた。（2）美作の人、叡山で天台宗を學び大いに悟る所あり、高倉天皇の御代に淨土宗を開いた。（3）其說くところ頗る通俗簡易で忽ち上下の信仰を得たが、南都、北嶺に妬まれ、土佐に流され、後に赦されて京都で入寂（死ぬ）。

3 親　鸞（東高師）

（1）淨土眞宗の開祖。初め天台其他の諸宗を學び、後法然の淨土宗に歸依し、師の罪に座して越後に流された。（2）赦免の後東國北國の敎化につとめ、常陸に於て淨土眞宗を開いた。（3）之は一向に彌陀佛の

救濟力を信ずれば久遠の樂土たる淨土に往生出來ると說くものである。（4）やかましい戒行が要らず肉食妻帶を許し、入り易く行ひ易い爲に上下の信仰を得た。

4 日蓮（海兵・陸士・美術・京城法專）

（1）日蓮宗の開祖、安房の人。叡山、高野山等を歷遊し、諸宗を究めて安房の淸澄山に入り、始めて南無妙法蓮華經の題目を唱へて日蓮宗を開いた。（2）次で鎌倉に至り、之をすゝめ常に他宗を罵り、遂に北條時宗に忌まれて伊豆に流され、（3）後許されたがたま〳〵蒙古の來襲するに當り、日蓮の豫言が的中したと稱し、上書して敵國降伏を祈禱しようと請ひ、龍口に斬られようとして僅かに死を許され、佐渡に流され、（4）赦免後は甲斐身延山久遠寺に退いて修行、池上本門寺で入寂。

5 榮西（美術・京城大豫・大阪商大豫）

（1）我國臨濟宗の開祖、備中の人、天台宗を學び、入宋して臨濟派の禪を傳へて歸朝。（2）禪宗を起さうとして叡山の壓迫により去つて鎌倉に至り、政子、頼家の歸依を受けた。壽福寺、建仁寺の開祖となつた。

6 藤原定家（嚴高師・美術）

藤原俊成の子、鎌倉時代の歌人、華麗な用語と幽遠な思想を有ち、含蓄の深い歌風。後鳥羽天皇の知遇を受け、その勅を奉じて時の大家と新古今和歌集を撰んで後又新勅撰和歌集を撰上した。

7 運慶（東外語・美術）

鎌倉初期の有名な彫刻家。平安時代の定朝の子孫である。東大寺再建に方り、多くの佛像を彫刻した。其作風を東大寺南大門の仁王像に見るに、其面貌、骨格、筋肉等の狀勢眞に迫り、雄健豪放を極めてゐる。

第二期　建武中興及吉野朝時代

第六章　建武中興

一、建武中興の由來（東外語・普樂・八高・昭九高等試驗行政科）

❶ 源頼朝が幕府を開いてから政權全く武家に歸し、源氏滅亡後も北條氏之に代つて幕府の全權を握り、兎角專横の振舞が多かつたので、

❷ 後鳥羽上皇承久の變を起させられたが、不幸にも成功されず、却つて武家政治の基礎を固め、爾來北條氏は皇位繼承に干渉し、皇統及攝家を分立せしめ、殊に大覺寺系統を壓迫したので、

❸ 後醍醐天皇は、高時暗愚にして且つ元寇以來の財政困難により、民心を失つたのに乘じて、討幕の軍を起し、隱岐に流され給うたが、勤皇の士の勃興によつて北條氏は滅亡し、茲に政權再び朝廷に還り、建武中興となつた。

二、京都還幸

❶ 六波羅探題が落ちたとの報告が船上山に達すると、後醍醐天皇は行在所から還幸の途に上られ、途中、光嚴院を廢する旨の仰があつた。

❷ 此時、千早城の圍みが解け、正成兵を率ゐて兵庫に天皇を迎へ奉り、時しも鎌倉陷落の報も傳はつて、上下歡喜の裡に、天皇は京都に還幸遊ばされた。時に元弘三年六月。

❸ 護良親王も一時高野山に逃れて後河内に居られたが、赤松則村のお迎へで京都に還られた。

三、建武中興の新政（海軍・美術・廣高師）

政權今や朝廷に回復したので、天皇は舊弊を打破し、大いに綱紀を振肅しようとせられた。年號を建武（紀元一九四九）と改められたので之を建武の中興といふ。天皇は先づ皇子、公卿を配所から召還されると共に、光嚴院には前皇太子だつたので特に太上天皇の尊號を奉られ、攝關や太政大臣を廢して左の如き種々の役所をおかれた。

❶ 中央政治

（1）記錄所（長崎高商）　之は天皇親ら庶政を執り、訴訟を聽かれる所で、寄人（ヨリウド）十一人。（楠木正成、名和長年も各其一人だつた。）

【註】後三條天皇が設置された記錄所は記錄莊園券契所の略稱で、主として莊園の處分をする所だつたが、白河法皇の御代には却つて莊園が多くなり、有名無實。後白河法皇の院政後廢止となつてゐたもので、此の記錄所とは異なる。

（2）雜訴決斷所（松山高商）　斷決所又は決斷所ともいふ。藤原藤房の掌る所、戰亂後の事だから、領地に關する訴訟が多い爲に、之を設けて其訴訟を處決せしめた。

（3）武者所　武士を取締り、軍事を統轄する所、長官を頭人といひ、新田義貞が之に任ぜられた。

（4）征夷大將軍　護良親王が之に任ぜられた。

❷ 地方政治

（1）一般地方―國司、守護　公家を國司に、武士を守護に任じて地方を治めさせた。

（2）重要な地方　奥羽に陸奥守をおき、北畠顯家を之に任じ、義良（ノリナガ）親王を奉じて治めしめた。
關東に相模守、足利直義を之に補し、成良（ナリナガ）親王を奉じて治めしめた。

四、論功行賞

行賞は公家に重く武人に輕く、同じ武人の間でも公平を缺いた。之が中興の業失敗の大きな原因になつた。

重なる武人の行賞は左の如くである。

（1）**足利高氏**　勳功第一と認められ、天皇の御名尊治の一字を賜はり、尊氏と改めさせられた上、武藏・常陸・下總の三國を賜はり、（都に最も遠い地）正三位鎭守府將軍、參議に任ぜられた。
彼は北條氏滅亡の決戰的勝利に力のあつた人、敵軍からの歸順を嘉納せられ、賞を厚くして後憂をなくする思召であつたかと思はれるが、結果は、此行賞の翌年既に叛旗をひるがへしてゐる。

（2）**新田義貞**　從四位上、上野介兼播磨守。上野、播磨、越後三國を賜はる。

（3）**楠木正成**　從五位下、左衞門尉河内守、攝津、河内二ヶ國（都に最も近い地）

（4）**名和長年**　因幡伯耆をたまはる。

（5）**菊池武重**　肥後一國を賜はる。

（6）**赤松則村**　播磨の守護職、後に取上げられ、舊領の佐用の莊一つを安堵された。

五、建武中興の失敗せる原因（東高師・東女高師・海兵・長崎高商・松本高・陸士）

❶ 公武の不和　公家は武士を侮り、武士は公家の傲慢を憤つて兩者の間が一致しなかつた。
武家に政權を奪はれる事百五十年にして朝廷に復權したので、公家は驕慢になり、武士の官位が昇り、所領を與へられ、政治に與らせるのは身分にすぎるといつて武士を輕んずると、武家の方は政權回復の實行者は抑々武士である、公家何するものぞと、兩方とも睨みあつてゐた。

❷ **恩賞の不公平**　中興の業をなし得たのは武士の力であるのに、恩賞は公家に重くして武人に輕かつたし、其上武士の間のそれも公平でなかつたから、武士の中に不平を抱くものが多かつた。

其上北條氏の舊領は思ひの外少く、高時の舊領は内裏の御料所になり、其他の土地も公家、女官、僧侶に與へられて忠義の士に與へられる所は甚だ少かつた。其忠義の士のわけ前も、尊氏が恩賞第一に措かれて厚きに引きかへ、赤松則村の如きは六波羅を陷れながら、播磨の佐用の一莊を得たにすぎなかつた。正成の如き名分に明かな人ばかりはないもので、利慾で動くものは不平をもち、之が後には叛軍に味方する事になる。

❸ **政務の澁滯**　世の混亂の後とて訴訟は山の如く多いのに、公家は久しく政務をはなれてゐたので、初經驗者も多く從つて事務澁滯、裁決不公平で、武家の簡便主義の時代よりも却つて不便になつた。

❹ **財政困難**　朝廷では大内裏造營の爲に重税を全國に課したが、戰後疲弊の甚しい際なので、不足な處は紙幣を發行するなどの事から、民心は漸く新政を厭ふやうになつた。

❺ **大義名分に無知**　武家政治百五十年繼續の爲、其變態なる事、天皇親政が本體である事の大義名分を知る武士が甚少かつた。從つて國民の間に大義名分の輿論が起つて來なかつた。

❻ **護氏の野心**　源氏の系統なる尊氏は夙に幕府再興の野心を抱いてゐた所、狀勢は新政を喜ばぬやうになつたので、不平の武士の心を收攬し、護良親王と義貞とを除いて野望を遂げようとした。

❼ **結び**　結局公武融和して新政に邁進すべき時に、不和であり、恩賞で不平をもち、政務は不完全、仁政は施されず、かくして折角の中興の業も進行せず、民心朝廷を去つて再び武家政治を慕ふやうになつた時、尊氏が此時代の波に着眼して野心遂行の機をとらへ、叛旗を翻したので、天下は再び大亂となつたのである。

六、足利尊氏の叛

❶ **護良親王を讒奏**　野心滿々たる尊氏は、新政に不平な武士に私恩を施して其歡心を買ひ、以て他日に備へてゐた所、早くも之を看破された護良親王は、尊氏を排斥しようと思召され、義貞・正成等と結ばれたが、尊氏は天皇の寵姫で護良親王の御母でない藤原廉子と結んで、親王に異圖があると讒奏した爲に、親王は惜しくも鎌倉に流され、直義に預けられた。

❷ **北條時行の亂**（中先代の亂）　北條高時の遺子時行が信濃に反して鎌倉に向つたので、直義は之を武藏に防いで大敗、淵邊義博をやつて護良親王を害し奉らしめて西に走つた。すると尊氏は勝手に兵を率ゐて關東に下り、時行の軍を破つて鎌倉に入つた。

❸ **尊氏の西上**

（1）時行を破つた尊氏は自ら征夷大將軍關東管領と號し、新田義貞を除くを名として兵を集めた所、幕府再興を望んだ武士は競うて其傘下に集つた。

（2）天皇御怒りになり、義貞に詔して、尊良親王を奉じて陸奥の北畠顯家と呼應し、東西から尊氏を挾みうたしめる計畫をたてられ、次で尊氏・直義の官爵を削られた。

（3）義貞は弟脇屋義助と共に東に進み、三河に高師直を、駿河に足利直義を破り、尊氏と箱根の竹の下で戰つたが、裏切者の爲に官軍敗れて西に走つた。

（4）尊氏兄弟は義貞を追つて京都にはいつたので、天皇は叡山に難をさけられた。播磨の赤松則村、讃岐（サヌキ）の細川定禪も亦叛いて尊氏に應じ、西から京都に迫つて來る。

❹ **尊氏の西走**　程なく北畠顯家、義良親王を奉じて陸奥から西上し、義貞・正成・長年等と協力して尊氏の軍を破り、京都を回復。尊氏直義は兵庫から船で九州に逃がれたので、天皇は叡山から京都に還幸せられた。中興の業成つて三年目の延元元年の事である。

七、尊氏の再擧

❶ 尊氏九州に勢を得　九州に走つた尊氏は、勤皇の將菊池武敏（武時の子）の兵と筑前多々良濱に戰つて之を破つたので、九州の將士は皆尊氏に屬し、賊勢再び振ふ事になつた。

❷ 尊氏の東上、湊川の戰

（1）播磨に反旗をあげた赤松則村を、義貞が白旗城に圍んだので、則村は援を尊氏に乞うた爲に、尊氏は水軍、直義は陸軍を率ゐて東上。

（2）義貞は尊氏の東進をきいて兵庫に退陣し、急を朝廷に奏したので、天皇は正成をして救援に赴かしめたあつたが、其の計が用ひられず。

（3）此の時正成の軍略では、尊氏の兵を京都に入れ、正成が淀川の方面から、義貞は叡山から挾擊するに

（4）櫻井驛に正行とわかれ、義貞と共に湊川に陣し、直義の軍と戰つたが、尊氏は義貞を破り、更に正成の背後から攻めたので、衆寡敵せず、弟正季と自殺した。時に年四十三。

（5）義貞は破れて京都に還つたので、天皇再び神器を奉じて叡山に行幸。尊氏兄弟再び入京。其後六條忠顯、名和長年等相次いで戰死し、官軍は益々ふるはなくなつた。

考察問題

1 建武中興の思想的背景

① 建武中興の理想　我國は神武天皇御創業の初めから天皇親政であり、親ら統治の大權を總攬して居られた所、平安時代の中頃から攝・關の政治が起り、次で上皇・法皇の院政が始まり、更に幕府が出來て武家政治になつたのは何れも正しい道でない。故に此三つのものを停廢して、天皇親政を實現せられたのが即ち建武中興であり、之によつて皇室中心の國體の本義が明かに宣揚されたのである。而して此大理想を育んだ學問は神儒佛の諸敎であつた。

② 學問的背景としての神儒佛

（1）**佛敎**　當時の佛敎には二つの傾向があつた。一は逃避的傾向で、人生を消極的に考へ、山に、佛門に、文學にと隱遁的な考や來世への轉入を希ふやうなもの、二には革新氣分の强いもので、此の修養が局面打開の力を與へた。即ち天台・眞言の如く國家鎭護の信念にたつもの、法華の如き國家意識の鮮明なもの、禪宗の如き强烈な國家精神高揚のものなどである。

（2）**儒敎**　鎌倉時代に傳はつた朱子學は內には尊王賤覇、外には尊王攘夷の念を皷吹し、大義名分を明かにする力があつた。

（3）**神道**　神道は我固有の大道にして天照大神の崇敬を中心とし、國體の本義に立つものである。武家時代になつてから、國民一般の間に神宮崇拜の念が高まり、我國を神國とする思想が遍く行はれ、從つて皇室尊崇の念を養ふ事になつた。

③ 後醍醐天皇の御修養　天皇は、（1）眞言を學ばれ禪宗の修養をつまれ、天台の奧儀に達せられ、（2）朱子學の御進講を聽しめされ、（3）現人神として祭祀を重んぜられた。

④ 勤皇諸臣の修養

（1）公家　藤原俊基、資朝、藤原師賢、何れも朱子學を修め、（2）北畠親房は神儒佛三敎に通じ、（3）正成、義貞、長年、武時等勤皇の諸將は何れも敬神の念に富み、儒佛を學んでゐた。（4）諸國の神官や比叡、高野の僧にも勤皇家が多かつた。

かくの如く、天皇を初め奉り、公家、社家、寺家、武家何れも神儒佛の教を修養して此大業の理想實現に盡くされたのである。

2 建武中興が後世に及ぼせる影響

（1）武家政治が日本帝國の國體に合致しない事を明かにした。

（2）中興の運動により誠忠の精神を發揮させ、日本精神の確立となつた。

（3）江戸幕府時代に尊皇思想研鑽の材料となり刺戟となつた。

（4）明治維新成功の前鑑となつた。

3 建武中興成敗の原因について述べよ（松本高・東高師・海兵・長崎高商・東女高師・大連高商）（一六〇頁②及一七九頁五）

總合問題

4 新田・足利兩氏の關係

（1）新田氏の祖は義家の第三子義國から出て居り、義國の子義重、上野の新田に居て新田氏を名乘る。頼朝と仲惡く、頼朝の擧兵の時も招かれて應じなかつた爲、幕府と疎遠となり、官位低く、武士の間に現れなかつた。

併し義貞が元弘の亂に鎌倉を陷れて北條氏の本據を覆した功は尊氏の六波羅の攻略にも勝る故に、建武中興の元勳として、武者所の頭人となつて武士を率ゐ、越後、上野、播磨を領し、尊氏と競爭の地位にたち、反尊氏の公家方の頭目になつた。

新田足利兩氏系圖

源義家―義國―
- （新田）義重…五代略…朝氏
  - 義貞
    - 義顯
    - 義興
    - 義宗
  - （脇屋）義助―義治
- （足利）義康…五代略…貞氏
  - 尊氏
    - 義詮
    - 基氏
  - 直義

（2）尊氏の祖も義貞と同じく義國から出て、義重の弟義康が下野の足利郡に住んだので足利氏を稱した。

夙に頼朝に屬して平家追討に功あり、子義兼は頼朝の妹を妻とし、子孫も北條氏と代々結婚し、武士の間に信用があつた。

併し、何しろ源氏の本流だから、平氏出の北條氏の下風に立ちたくない。七代も前の先祖から將軍志望があつた位で、尊氏も源氏幕府再興の大望を抱き、建武中興の時には侍所の頭人となり、義貞の所領に近い武・常・總の三國を領し、私恩を以て將士をなつけて義貞を排擊したものである。

（3）中興の業が失敗となり、尊氏叛するや、義貞は恒良尊良兩親王を奉じて越前金ケ崎城に據つたが、足利軍と戰つて、延元三年藤島に戰死し、爾來勢力衰へ、尊氏は其後も官軍を苦しめ、祖先以來の野望たる將軍の地位に上つたけれども、根本觀念が利を以て人を導く點に誤があり、足利幕府の時代は鳴亂に打續いた。

重要個別問題

1 護良親王（遺宮）

（1）後醍醐天皇の第三皇子、初め出家して尊雲法親王と號せられ、天台座主となつて延曆寺の大塔に居られたので大塔宮といふ。後、還俗して護良親王と申す。（2）後醍醐天皇北條氏を滅ぼして政權回復を思召さるゝや、親王亦之により、延曆寺、興福寺の僧徒と結ばれたが、謀洩れ、天皇は笠置に御幸あり、親王は楠木正成の赤坂城をへて吉野に兵をあげる一方、諸國に密使をつかはして令旨を傳へ、勤皇の兵を募られた。

（3）高時、兵をやつて吉野を攻めたので、親王は高野山に入り更に河内に居られたが、六波羅陥落し、天皇

京都に還幸あると共に、親王も赤松則村に迎へられて入洛された。（4）建武中興に方り、征夷大將軍に任ぜられたが、勢力と野心をもつ足利尊氏を除き給ふ御志があり、義貞、正成等と結ばれた所、尊氏の讒奏によつて、鎌倉に流され、直義に預けられた。（5）建武二年北條時行等兵をあげて鎌倉に入るや、直義は淵邊義博をやつて親王を害し奉つた。御年廿八。後此地に鎌倉宮をたてゝ之を祀る。

2 赤松則村

（1）播磨の人、護良親王の令旨を奉じて義兵をあげ、尊氏・忠顯等と六波羅を攻めて京都を回復し、護良親王の御入洛を河内よりお迎へした。（2）建武の中興に播磨の守護職となつたが、間もなくやめられて、僅かに佐用の莊を賜はつたので、大いに不平に思ひ、（3）足利尊氏の叛するや逸早く之に從ひ、尊氏敗れて西走すると、則村は播磨の白旗城に兵をあげ、義貞の攻圍によく防戰した。（4）尊氏兄弟が九州から東上するや、直義に從つて淡川に補木正成と戰ひ之を破つた。（5）かく足利氏の爲につくしたので、子孫は四職の一となつた。（即ち則村は（1）義軍による朝廷貢獻期、（2）行賞不滿時代、（3）叛軍、足利氏への貢獻期の三期になる。當時の武士の功利心、大義名分から見て、正成と好對照である。）

3 雜訴決斷所（陸士・海士）

（1）元弘三年、後醍醐天皇、鎌倉幕府を倒して中興の新政をしき給ふや、雜訴決斷所を置き、所領に關する訴訟を斷決せしめ、公武の俊秀なるものを寄人とされた。（2）然るに當時内奏行はれ、改變はげしく、決斷所で領地が確定せられても、内奏で別人に其の地が給せられるといふ事もあつて、一ヶ所に四五人の持主があるといふ有樣で、斷決の効果はあがらなかつた。

第七章　吉野の朝廷

一、吉野の朝廷

❶ 光明院擁立　入京した尊氏は武力を以て朝廷を抑へ奉り、賊名を避けるために光明院を立てゝ天皇と稱した。

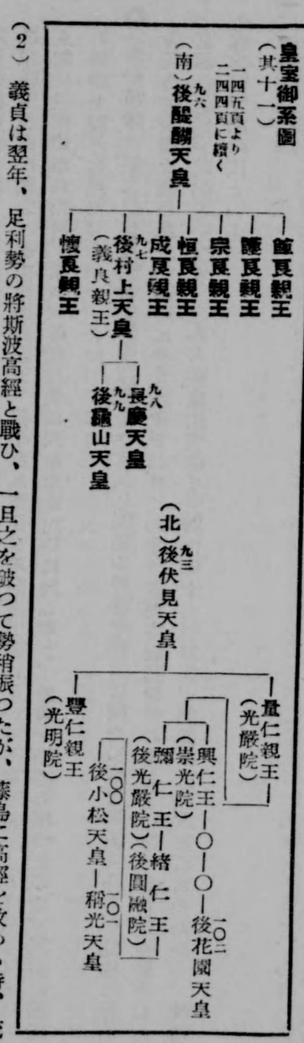
❷ 京都還幸　（1）次いで尊氏は後醍醐天皇を京都に迎へ、神器を光明院へお授けになるやうにと強要した。時に叡山の方も糧食が不足し、外部からの應援來らず、官軍不振の狀態だつたので、天皇も還幸を許し給ひ、新田義貞に勅し、皇太子恒良親王・皇子尊良親王を奉じ、北國に赴いて再擧を圖らしめる事にし給ひ、京都に還幸せられた所、（2）尊氏は急に天皇を花山院に幽し奉り、神器を強要し奉つたので、天皇は僞造の神器を授けられた。

❸ 吉野潛幸　（1）天皇は北畠親房の獻策により、眞正の神器を奉じて潛かに吉野に潛幸あり、此地に行宮を定めて恢復を圖られた。（時に延元元年十二月）（2）吉野の朝廷を世に南朝といひ、足利氏の擁立した京都の朝廷を北朝といつて、之から後龜山天皇まで四代五十七年の間、朝廷は概ね吉野にあつたから、此時代を吉野朝時代といふ。

二、官軍の非運

❶ 義貞の戰死　（1）勅命により、恒良・尊良兩親王を奉じて北國に赴いた義貞は、越前の金ヶ崎城に據つたが、延元二年尊氏の遣はした大軍來攻し、城内の兵糧が乏しい爲に、義貞はひそかに杣山城に赴き、瓜立

保と協力したけれども、其間に金ヶ崎城も陷り、尊良親王は自殺され、義貞の子義顯之に殉じ、皇太子恒良親王は捕へられて京都に送られ、後害せられ給うた。



（2）義貞は翌年、足利勢の將斯波高經と戰ひ、一旦之を破つて勢稍振つたが、藤島に高經を攻める時、流矢に中つて戰死し、以後北國軍は振はなくなつた。

❷ **顯家の戰死**　北畠顯家は尊氏の西走後、義良親王（後村上天皇）を奉じて陸奥に下り、霊山（りやうぜん）に據つたが、天皇吉野行幸の後、京都恢復の命を受け、親王を奉じて結城宗廣と共に大舉西上、鎌倉に尊氏の子義詮を破り、美濃、奈良を經て攝津に入り、阿部野に於て高師直と戰つて敗れ、和泉の石津に敗死した。時に年廿一歳。

❸ **東國の官軍**　延元三年北畠親房は其子顯信と共に義良・宗良兩親王を奉じ、伊勢より海を渡り、東國に赴いたが、途中颶風の爲に船は分散し、義良親王は顯信と共に伊勢に上陸せられて吉野に歸り給ひ、宗良親王は遠江に漂着せられ、親房は常陸に着き、東國の官軍を指揮したが、あまり振はなかつた。

❶ **崩御と即位**　官軍の力と頼む義貞、顯家を始め、勤皇の諸將多くは戰死して勢振はず、天皇痛く御心を惱ませられ、延元四年中興の業成らぬ中、病を以て吉野の行宮に崩ぜられた。かくて義良親王即位せられて後村上天皇と申す。

三、諸國官軍の形勢

❶ **東國の狀勢**

（1）**宗良親王**　東國に赴き颶風の爲遠江に漂着せられた親王は、遠江の井伊谷城に於て東國を經營せられた。

（2）**北畠親房**　常陸で東國の官軍を指揮し、小田、關二城に居り、陣中に於て神皇正統記を著はし、南朝の正統なる所以を明かにしたが、後吉野に歸り、後村上天皇を輔佐し奉つた。

❷ **西國の狀勢**　菊池武光は征西將軍懐良親王を奉じて肥後に居り、正平十四年賊將少貳頼尚と筑後川に戰つて大勝し、一時九州の大半を從へたが、懐良親王が薨ぜられてからは衰へた。

❸ **正行の戰死**　（1）吉野に後村上天皇を輔佐し奉る北畠親房は、九州と奥州の官軍を連絡して京都恢復の計畫をたて、正成の子正行は一族を率ゐて行宮を守護したので、官軍の勢再び振ふに至つた。（2）そこで尊氏は高師直をして大軍を以て吉野の皇居を侵さしめたので、正行は之を四條畷に防ぎ、大いに戰つて遂に戰死した。（正平三年）時に年二十三。天皇は一時賀名生（アナフ）に幸し給ひ、官軍は振はなくなつた。

四、足利氏の内訌

❶ **原因**　尊氏は反する前から、利を以て諸將をなつけたので、諸將の勢力が次第に強大となつた爲に、遂には尊氏も之を制御する事が出來なくなつて、骨肉主從の間に爭を生ずるに至つた。

❷ 直義と高師直の不和　（1）延元三年尊氏は自ら征夷大將軍と稱し、幕府を京都に開いたが、主たる政務は弟直義にまかせてゐた。直義は策略家で、兄と行動を共にし、幕府開設に至るまでの功績により尊氏と並んで勢力があつた。（2）時に高師直は尊氏の執事として勢力があつたので、直義は之を除かうとし、失敗して一時官軍に降つた。其後師直は益々權を專らにしたので、遂に尊氏の爲に殺された。

❸ 尊氏と直義の不和　其後直義は京都に歸つたが、尊氏と不和となり、鎌倉に走つたので、尊氏は一時歸順して直義追討の勅を賜はり、之を鎌倉に於て毒殺した。此間一時的乍ら南北合一し、天皇も京都へ入らうと爲されたが、間もなく尊氏の子義詮が反したので、天皇は賀名生に幸せられた。此後も足利氏の内訌は止まず、其度毎に官軍に降り、叛服をくりかへした。

五、京都朝廷還幸　二〇五二年

かゝる間に、後村上天皇の二皇子、長慶、後龜山兩天皇相ついで御位に卽かれた。かくて元中九年に至つて義詮の子義滿は細川頼之の議により、大内義弘を吉野に遣はして京都還幸を奏請したので、後龜山天皇は民衆が長い間戰亂に苦しんでゐるのを不愍に思召され、その請をゆるして京都に還幸され、神器を光嚴院の御曾孫に當る後小松天皇にお讓りになつた。かくしてこゝに五十七年の戰亂は終をつげたのである。

考察問題

1 吉野朝時代に於ける武士の思想

【狙ひ所】 題意からすぐピンと來るのは吉野朝勤皇の忠臣である。が、「吉野朝廷の武士」ではなくて、吉野朝「時代」の武士の思想とある。誠忠な吉野朝の武士と對立して、足利方の武士がどんな考をもつてゐたか、之を對照的に示さねばならぬ。さうする事によつて、一層吉野朝の武士が光つて來る。

① 吉野朝は延元元年十二月、後醍醐天皇が神器を奉じて吉野に潛幸せられ、行宮を此地に定められてから後龜山天皇の元中九年までの五十七年間であつて、此の時代の武士といへば後醍醐天皇に屬する官軍卽南朝の武士と足利氏に屬する所謂北朝の武士である。

② **足利氏に屬する武士の思想**　北條氏討滅の頃から、武士の一般思想には大義名分よりも利害によつて終始する觀念のものが多く、建武中興の政治が、恩賞公平ならず、不平の徒に對して、足利尊氏が私恩を施して糾合したものであるから、足利方は利害私慾の觀念で行動し、節義もなく只利益の爲に動く有樣であつたので、官軍と對立しつゝ父子・主從・兄弟に爭を惹起するに至つた。

③ **官軍に屬する武士の思想**　足利氏に屬する武士が大義名分にくらく、利害一片によつて行動したのに對し、吉野朝方の武士は概ね誠忠の心厚く、特に楠木・新田・北畠・菊池の諸家の如きは、子々孫々迄一族の存する限り、皇事に盡して成敗を眼中におかず、臣節をつくしたものである。その誠忠の事蹟は楠氏をはじめ、他の忠臣皆日本外史、大日本史、太平記等を通じて感化を後世に及ぼし、國民道德の維持强化に影響する所が多大であつた。

2 楠木正成の偉大なる點

小學兒童でも、正成を典型的な誠忠の人として知らぬものはない。感謝せぬものはない。が、どんな點が偉いのかといふ事になると、考へて見ねばならぬ。勿論、偉大な人物の批判などは、盲人が巨象を判定するやうなもので、勿體なく、又僭越であり、特に大楠公に對する冒瀆とも思はれる。けれども、こゝには其一端を記して參考に供する。諸君は大楠公の事蹟を味はつて、より以上偉大なる點を發見してほしい。

① **純忠**　當時の武士には利を追ふの徒、大義名分にくらき輩が多かつたので、建武中興に於ける恩賞の不公

平は忽ち不平の種となり、利を施す尊氏の傘下に馳せ參ずる大勢であつた。かゝる時勢の力に抗して、偉功はあり乍ら、其世相に影響される事のないだけでも凡人の難事とする所を、正成は、忠誠無二、信ずる所に直往邁進、些かの私心をもたなかつた事は、到底何人も企及する所でない。正成の、後醍醐天皇の勅によつて起つた勇敢精忠の行爲は、勤皇の士を起たしむるに甚だ大きな影響を與へ、この純忠は一族（正季・正行・正時・正儀）に及び、此一族及勤皇の士の吉野朝五十七年の持久力は、足利氏の基礎的勢力を脆弱なるものにした。更に此純忠の精神は、後世の勤皇精神を喚起し、永久に國民精神の中核をなすものといつてもいゝ程の力となつた。

② 膽勇智略　北條氏は高時の時代に於て衰運甚しいとはいへ、百五十年の間積みあげた武家政治、殊には其祖先の施した恩澤によつて、尙ぬくべからざる餘力をもつて居る天下の支配者である。之に敵對する正成は河内の一郷士である。其身分、實力等到底比較にならぬ强敵を向ふにまはし、敢然義兵をあげ、赤坂、千早等で無勢乍ら奇計百出、多勢の敵を惱まし、京都恢復、建武中興の偉業に多大なる貢獻をなした。正成こそは、古今無双の名將である、「千萬人と雖も我ゆかん」の體現者である。

③ 七生報國　尊氏九州に勢力を挽回して東上するに方り、正成の之をむかへうつ獻策は、公家（坊門清忠）の言によつて遂に用ひられなかつた。卓見が、つまらぬ意見で不採用となつた時の人間の心は、其問題についての熱意を失ひ勝である。然るに、正成は之を憤る事なく、櫻井驛で正行に遺訓して後事を托した。君國を思ふ熱情其歿後に及ぶ。更に湊川に破れて弟正季と「七生報國」を相誓うて刺違へた。此の四文字こそは、殉忠の信念凝結の血文字であり、日本國民の守り札である。後世此言に感激し、君國に殉じたものが多い。又大楠公の誠忠は德川光圀を初め明治維新の志士の間にも至大な影響を與へ、現代に於ても楠公精神は國民の胸奥に生きてゐる。

3 **楠木正成一族の勤皇とその後世に及ぼせる影響を述べよ**（海兵・海經）（前問及一八九頁③參照）

總合問題

4 **後醍醐天皇の御事蹟**

【注意】問題としては、國民が誰も知つて居る、又知つて居ねばならぬ事なので、特殊な題とは思はれないしかし、建武中興前から吉野に崩御せられる迄多難な御一生の間、御事蹟の數々を明確に要點だけをとなると、十分な用意が要る。知つてゐるつもりでウツカリする問題である。特に重要なのは、（1）元弘の亂で北條氏を亡ぼす事、（2）建武中興の政治、（3）吉野朝での政權回復の御苦難である。

（1）大覺寺統の後宇多天皇の皇子　天資御英邁、神儒佛に通ぜられ、夙に政權回復の御志あり、記錄所を置いて御親政。

（2）正中の變　正中元年日野俊基、資朝を諸國に遣はし武士の糾合を策せられて露見し、誓書を高時に賜はり、事なきを得た。

（3）笠置から隱岐へ　皇嗣問題から護良親王に南都北嶺の僧徒と結ばしめられた爲に、高時大擧西上、天皇笠置に行幸、高時の圍みによつて吉野へ遁れ給ふ途中捕へられ、六波羅をへて隱岐遷幸。

（4）隱岐より船上山―還幸　笠置行幸の折勤皇の士を集められた所、正成始め諸國の將の義兵をあげて勢盛なるを隱岐で聞召され、伯耆に逃れて名和長年に寄られ、船上山に行幸あり、其中六波羅陷落の報を得て元弘三年六月京都に還幸あらせられた。

（5）中興の新政　記錄所の外雜訴決斷所、武者所等を置き、元弘の亂の諸將に論功行賞を行はれたが、其結果の不公平とか、公武不和、政務澁滯等に乘じて尊氏が反した。

（6）**京都―叡山―吉野**　尊氏反して一旦破れ、九州に走つて再び東上し、正成義貞の軍に勝つて入京するや、天皇叡山に行幸。尊氏の僞り還幸を乞ひ奉るに應ぜられ、僞りの神器を授け給うて、吉野の行宮に潛幸せられた。

（7）**吉野に崩御**　官軍の勢ふるはず、正成、義貞、顯家等の忠臣戰死し乍ら、天皇御志益々堅く、親房等に命じ義良親王を奉じて陸奥に於て勢力恢復を計られたが、親王、親房の一行は途中颶風にあひ、爲に親王は再び吉野に引かへさせられた。天皇官軍の勢不振の裡に病に罹られ、延元四年、行宮に崩御あらせられた。

（8）―附―**醍氏の哀悼**　天皇の恩寵を受け乍ら反して、中興の業を中絶せしめ奉り、且御苦惱をおかけした尊氏が、天皇の崩御と伺つて哀悼に堪へず、七日間廢朝、法會を營み、天龍寺を造營して、天皇の冥福をお祈りした。

5 後醍醐天皇の諸皇子（一八八頁御系圖參照）

（1）**護良親王**　尊雲法親王、大塔宮とも申す。延曆寺の座主となり、元弘の亂に延曆寺興福寺の僧徒と結んで討幕の謀を廻らし、次で吉野に挙兵、賊軍に陷れられ給うた。亂平らいだ後京都に還つて征夷大將軍に任ぜられたが、尊氏の讒奏で捕へられて鎌倉に送られ、足利直義の爲に弑せられ給うた。

（2）**尊良親王・恒良親王**　尊氏反して九州から入京、天皇叡山に逃れ給うた時、義貞、天皇の命により兩親王を奉じて北國經營に當つたが、金崎城に據つて賊軍に敗れ、尊良親王は自殺、恒良親王は捕へられて後、害せられ給うた。

（3）**宗良親王**　初め尊澄法親王と申し、天台座主となつて叡山の僧徒を從へて北條氏討伐に當られ、尊氏反するや遠江に於て吉野朝の再興に努め、各地に轉戰せられた。「君の爲世の爲何か惜しからむ捨てゝ甲斐ある命なりせば」の御歌があり、和歌をよくせられたお方である。

（4）**成良親王**　建武中興後、足利直義を從へて鎌倉に鎭し、後征夷大將軍となり、北條時行の亂により京都に還り給ひ、後醍醐天皇吉野に幸し給ふに及び、京都に幽せられ、後遂に害に遭ひ給ふ。

（5）**義良親王―後村上天皇**（高知）　北畠顯家と共に海路陸奥に赴く時、伊勢に於て颶風の爲再び吉野に還り給ふ。天皇崩御、遺詔を奉じて即位あり、後村上天皇と申す。日夜御遺詔の實現に努力されたが、結果を見ずして崩御、正平二十七年。

（6）**懷良親王**（東商大・四高商・大阪商・大高商）　征西將軍として下向あり、菊池一族等と九州の賊軍征伐に盡くされた。又明の太祖が交通を求め、倭寇禁壓を乞うた時、其書辭の無禮を責めて、我が意氣をお示しになつた。

6 北畠親房の事蹟

（1）村上天皇の皇子具平親王の後裔、建武中興に功績あり、義良親王を奉じ長子顯家と共に陸奥を鎭した

（2）吉野朝に仕へ、顯家の死後、義良親王を奉じ、顯信と共に再び奥羽に勤皇軍を興す爲に發向し、途中颶風に遭つて常陸に漂着した。

（3）常陸の小田、關兩城に據つて賊と戰つて利あらず、再び吉野に歸つて後村上天皇を輔佐し奉つた。

（4）全國の官軍を糾合し、吉野朝の重臣として活躍した。

（5）東國で賊と轉戰中、**神皇正統記**を著はして南朝の正統なる事を說き、又別に**職原鈔**を著して宮中の故實を明かにした。公卿であり、學者であり、武人であつた。

（6）正平九年賀名生（ナヽフ）に薨じた。六十三歲。阿部野神社、靈山（リヤウゼン）神社、北畠神社に祀られてある。

7 吉野朝時代前後に於ける勤皇家の事蹟（神皇）

（1）**楠木正成**　（イ）元弘の亂に詔を奉じ、赤坂千早に北條氏の大軍を惱ました。（ロ）建武中興で河内守

となり、攝津、河内二國を領した。（ハ）尊氏と戰ひ、一度び九州に走らせたが、再び東上する敵と湊川に戰つて戰死。年四十三。湊川神社に祀られた。

（2）**楠木正行**　（イ）父正成の遺志を承け、一族を率ゐて吉野行宮を護り、爲に吉野の官軍の勢稍振ふ。（ロ）正平三年賊軍が大擧吉野を攻めた時、弟正時と共に四條畷に激戰して敗死。年廿三。四條畷神社に祀られた。

（3）**名和長年**　（イ）元弘の亂に後醍醐天皇隱岐から伯耆に逃れられた時、義兵をあげて船上山に天皇を護り奉る。（ロ）建武中興に因幡伯耆を賜はつた。（ハ）尊氏が九州から再擧東上の時、正成と共に戰つて戰死。名和神社に祀られた。

（4）**北畠顯家**—親房は前出　（イ）親房の長子、元弘三年陸奥守となつて義良親王を奉じ東國に下る。（ロ）延元元年正成等と尊氏を破り、再び鎭山城に據る。（ハ）延元二年勅命によつて西上、賊軍と爭ひ、翌年阿部野で大敗し、石津で戰死した。年廿一、父と共に阿部野、靈山、北畠三神社に祀らる。

（5）**新田義興**—義貞の第二子。主として東國で賊軍と戰ふ。後、武藏の矢口の渡で殺された。（義貞の事は一八四頁4）

（6）**菊池武時**（師重）（イ）刀伊の入寇の時之を破つた藤原隆家の子孫で世々肥後に居た。（ロ）元弘三年少貳、大友等と官軍に應じたが、九州探題北條英時を討たうとする時、少貳、大友等が裏切つて英時に附いたので、之等と博多に戰ひ敗死—（之は吉野朝以前）

（7）**菊池武敏**　（イ）武時の第二子、（ロ）延元元年尊氏西走の時、兵を起して尊氏と多々良濱に戰ひ、利あらずして本國に歸つた。（ハ）其後主として九州各地で賊軍と戰つた。菊池神社に祀られた。

（8）**菊池武光**　（イ）武時の子で武敏の弟。西征將軍懐良親王を奉じ、大友・少貳等と戰ふ。正平十四年少貳頼尙の軍を筑後川に破つた。

再び亂世となり、吉野朝五十七年、朝廷方の困苦の中に後醍醐天皇の崩御、正成、義貞其他の勤皇の諸將戰死して遂に足利氏

廣長高・大隅高—各氣・鹿書　一四二

一五、北條氏の對朝廷政策……一四三

一六、鎌倉時代に於ける將軍家系の變遷及實權の

附表六　時代概觀（六）

近古史　第三期　室町安土桃山時代概觀

室町幕府は鎌倉江戸兩幕府の中間に位して一番しまりのないものだつた。何しろ鎌倉幕府は初めての武家政治で賴朝が大分しつかりやつたし、江戸幕府は家康の堅實なやり方、前者は百四十餘年後者は二百六十五年續いたが室町の方は義滿から百八十年、長さでは相當だが應仁亂前八十年だけであと百年は混沌たるものだつた。尊氏の太つ腹と人心收攬策は臣下を徒らに太らせてしまつたので、室町の諸將軍は臣下諸侯のえら者に閉口し山名大內關東管領等を抑へる必要があつた。通じて戰爭ばかりで善政がなく外部は戰亂、內部では義滿義政などの時局を超越した趣味生活に終止した。義滿の奢侈は我國の體面を汚し、義政の榮華は民心を惡化させた。併し應仁の亂以後は幕府の權威全く地におち、皇室は式微し公家は放浪、弱肉强食の暗黑時代となつた。此間に貴族文化と平民文化と外國文化とが交錯したがこの近世文化の醞化が多大に來る。室町時代日支關係の發展

豐臣秀吉　**綜合考察**

問題集　第六（室町時代　安土桃山時代）

一、鎌倉幕府と室町幕府との職制及び實力を比較考察せよ（高岡高商・佐賀師二・水戸高）……一〇〇

二、室町時代に守護が勢力强大なりし理由……一〇一

三、吉野朝廷が室町幕府に與へたる影響……一〇二

四、室町幕府に於ける足利義滿の地位……一〇三

五、室町時代の外國關係……一〇五

六、倭寇（海機・美術・東商・船高・松・高岡・大・運・和・歌山高商）—講評）……一〇七

七、歐洲人の來航……一〇九

八、キリスト敎の傳來……一一〇

九、室町時代に於ける外交の特質……一一一

一〇、我國の唐及明との交通につき比較論評せよ（岩手醫專）……一一二

一一、吉野朝時代、室町時代の日支關係（高檢）……一一三

（注意）……一一三

一二、室町時代に於ける日明の交通（彥根高商—講評）……一一三

一三、鐵砲の傳來と其影響……一一三

一四、我國に於ける吉利支丹弘通の原因（廣高・市・姫路・海機）……一一四

附表五　時代概觀（五）

近古史　第一期　鎌倉時代　第二期　吉野朝時代　展望

鎌倉幕府の創立から所謂南北朝の合一迄の凡そ二百年間の歴史は、衰へ行く公家階級と、勃興する武家階級との間の抗爭の連續だつた。鎌倉幕府の創立は武家勃興の一段落ついた所、元來公家は地方から出た武家を見下すに對し、武家は公家の分裂に乘じて擡頭し、幕府創設後は公武の地位逆轉。そこで地位權力の恢復策として承久の亂を起して成らず。頼朝が血緣者を大切にせず三代で滅びても北條泰時・時頼等の執政宜しきを得、時宗の英斷と擧國一致はよく大敵元軍を滅したが、此決戰は北條氏の疲憊を來し加へて高時の暗愚は朝廷に政權回復の機を與へ遂に建武中興となつた。併し中興の業も理想通りに行かず、恩賞の如何によつて動く將士の心を眼先の早い尊氏が收攬して再び亂世となり、吉野朝五十七年、朝廷方の困苦の中に後醍醐天皇の崩御、正成、義貞其他の勤皇の諸將戰死して遂に足利氏の天下となり、公武抗爭も到底武家の實力に敵せぬ事となる。そして敵のなくなつた武家は次に武家同志の爭となり、禍亂は一層ひどくなつて來る。

近古史　第一、二期　略年表

天皇	年號	紀元	重要事項
後鳥羽（八二）	安徳（八一）		
	壽永 三	一八四四	頼朝公文所問注所設置
	文治 元	一八四五	守護地頭設置、義經出奔
	三	一八四九	頼朝奥羽征伐
	建久 三	一八五二	頼朝征夷大將軍
土御門（八三）	建仁 三	一八六三	北條時政執權
順德（八四）	承久 元	一八七九	實朝害せらる
仲恭（八五）	承久 三	一八八一	承久の亂
後堀河（八六）	元治 元	一八八四	泰時執權
	貞永 元	一八九二	泰時貞永式目を定む
後深草（八九）	寛元 四	一九〇六	時頼執權
亀山（九〇）	文永 五	一九二八	時宗執權、元の使者を退く
後宇多（九一）	文永一一	一九三四	文永の役
	弘安 四	一九四一	弘安の役
伏見（九五）	正和 五	一九七六	高時執權
後醍醐（九六）	正中 元	一九八四	正中の變
	元弘 元	一九九一	元弘の亂、笠置還幸、正成擧兵
	三	一九九三	六波羅、鎌倉陷落
			北條氏滅亡
後村上（九七）	建武 元	一九九四	建武中興
	二	一九九五	尊氏の叛
	延元 元	一九九六	尊氏入京と西走、湊川の戰、正成戰死、吉野還幸
	正平 三	二〇〇八	四條畷の戰、正行戰死
後龜山	元中 九	二〇五二	京都還幸、兩朝合一

重要考察　總合問題集　第五　近古史（鎌倉吉野朝時代）

一、鎌倉幕府の創立とその影響（静岡高―講評）……一二七
二、鎌倉幕府の組織（東高師・美術・早高・七高）（注意―講評）……一二九
三、頼朝と義經との關係（狙ひ所）……一三一
四、守護、地頭の性質と武家制度の基礎（大分高商）……一三二
五、頼朝の朝廷に對し率る態度……一三四
六、頼朝が幕府の地として鎌倉を選びし理由……一三七
七、源頼朝の政治方針（小樽高商）……一三七
八、武家政治の成立と我國民道德との關係……一三七
九、源頼朝の人物（狙ひ所）……一三八
一〇、皇朝政治と武家政治との差異……一三八
一一、奥州藤原氏の盛衰……一三九
一二、征夷大將軍……一三九
一三、鎌倉……一四〇
一四、承久の變（東外語・東高師・美術・陸士・國大・廣島高・大阪高―答案・講評）……一四二
一五、北條氏の對朝廷政策……一四三
一六、鎌倉時代に於ける將軍家系の變遷及實權の推移……一四六
一七、承久の變に於て朝廷方の失敗に終つた理由……一四七
一八、貞永式目及それと大賓律令との比較……一四七
一九、「いざ鎌倉」の語の示す史的意義……一四八
二〇、元寇の戰捷の原因と結果……一五二
二一、鎌倉時代の對支關係……一五四
二二、蒙古襲來の際我が國民的意氣の發露（東京高）……一五四
二三、北條氏滅亡の原因（八高・福岡高）……一五六
二四、政權恢復の大業が承久に失敗し、元弘に成功したる理由を述べよ（狙ひ所）……一五九
二五、執權北條氏の功罪（新潟高）……一六〇
二六、鎌倉時代に於て我國體精神に關係の深き歴史事實をあげよ……一六一
二七、鎌倉時代の朝幕關係（海兵・專檢）……一六二
二八、鎌倉時代の文化の特色（福岡・静岡・成蹊各高・美術・神戸高商）……一六三
二九、鎌倉時代の佛教（美術・音樂・東高師）……一六四
三〇、鎌倉時代の美術工藝（京城大豫）……一六五
三一、武士道の起源（七高）……一六八
三二、武士道の發達（新潟高・長崎高商・三高・彦根高商）……一六八
三三、武士道の變遷……一六九
三四、鎌倉時代に新宗派の多く起りしは何故か（静岡高―講評）……一七〇
三五、武士道の精神は現代にも適用せらるべきや否や所見を開陳せよ（二高―講評）……一七二
三六、氏族制度時代並に鎌倉武家時代に於ける國民生活の美點を述べ其れが現代生活に對して有つ意義を明かにせよ（高知高―講評・答案）……一七三
三七、平安・鎌倉兩時代に於ける道德觀念の相違……一七四
三八、建武中興の失敗せる原因（東高師・東女高師・海兵・長崎高商・松本高・陸士）……一七九
三九、建武中興の思想的背景……一八二
四〇、建武中興が後世に及ぼせる影響……一八四
四一、新田・足利兩氏の關係……一八四
四二、吉野朝時代に於ける武士の思想……一九〇
四三、楠木正成の偉大なる點……一九一
四四、後醍醐天皇の御事蹟……一九二

附表六　時代概觀（六）

近古史　第三期　室町安土桃山時代概觀

室町幕府は鎌倉江戸兩幕府の中間に位して一番しまりのないものだつた。何しろ鎌倉幕府は初めての武家政治で賴朝が大分しつかりやつたし、江戸幕府は家康の堅實なやり方、前者は百四十餘年後者は二百六十五年續いたが室町の方は義滿から百八十年、長さでは相當だが應仁亂前八十年だけであと百年は混沌たるものだつた。尊氏の太つ腹と人心收攬策は臣下を徒らに太らせてしまつたので、室町の諸將軍は臣下諸侯のえら者に閉口し山名大内關東管領等を抑へる必要があつた。通じて戰爭ばかりで善政がなく外部は戰亂、内部では義滿義政などの時局を超越した趣味生活に終止した。義滿の奢侈は我國の體面を汚し、義政の榮華は民心を惡化させた。併し應仁の亂以後は幕府の權威全く地におち、皇室は式微し公家は放浪、弱肉强食の暗黑時代となつた。此間に貴族文化と平民文化と外國文化とが交錯してやがて近代文化の曙光がさして來る。寔に近代日本飛躍以前に於ける生みの惱みの時代だつた。其惱みの中から殆と時を同じうし、所を近うして生れた三人の麒麟兒、其第一たる信長が先づ諸豪を壓して眞先に上洛し、征服統一の事業は近畿東國から中國に及んだが、性格の禍する所、遂に本能寺に仆れて其大業中道に終り、秀吉此勢力を繼いで全國を平定し、雲の如き群雄を手玉にとつてガッチリと抑へ、あくなき征服慾は鮮・支・南洋に迄及ばうとしたが、戰に疲れた將士思ふに動かず秀吉の壽命が此大望に段落を付け、此間に隱忍深謀、治國の道を考へてゐた家康が幕府を開いて統一の業を完成する事になる。

近古史　第三期　室町・安土桃山時代略年表

天皇	年號	紀元	重要事項
後龜山	元中	二〇五一	義滿山名氏を滅す
御小松	應永	二〇五九	應永の亂、大内義弘服誅
	八	二〇六一	明と通交の始
稱光		二〇七九	義持明と通聘を絶つ
後花園	永享一〇	二〇九八	永享の亂
	嘉吉	二一〇一	嘉吉の亂
	長祿	二一一七	道灌江戸城を築く
後土御門	應仁	二一二七	應仁の亂起る
	文明	二一三三	宗全・勝元卒す
	九	二一三七	應仁の亂平ぐ
		一五 二一五一	北條早雲伊豆を略す
後柏原	大永	二一八四	北條氏綱江戸城を取る
後奈良	天文一二	二二〇三	歐人來航・鐵砲傳來
	一八	二二〇九	基督教傳來
正親町	弘治	二二一五	厳島戰・川中島の戰
	永祿	二二二〇	桶挾間の戰
	一一	二二二四	信長の上洛
	元龜	二二三〇	姉川の戰
	天正 元	二二三三	足利氏滅亡
	一〇	二二四二	織田氏滅亡・本能寺の變
	一一	二二四三	賤岳の戰秀吉大阪城築城
後陽成	天正一八	二二五〇	小田原征伐
	文祿 元	二二五一	朝鮮征伐開始
	慶長 二	二二五七	朝鮮再征始まる
	三	二二五八	秀吉薨ず

綜合案考量

問題集第六（室町時代 安土桃山時代）

一、鎌倉幕府と室町幕府との職制及び實力を比較考察せよ（高岡高商・佐賀師二・水戸高）……一〇〇
二、室町時代に守護が勢力强大なりし理由……一〇一
三、吉野朝廷が室町幕府に與へたる影響……一〇二
四、室町幕府に於ける足利義滿の地位……一〇三
五、室町時代の外國關係……一〇五
六、倭寇（海機・美術・東商船高松・高岡・大連・和歌山高商）―講評）……一〇七
七、歐洲人の來航……一〇九
八、キリスト教の傳來……一一〇
九、室町時代に於ける外交の特質……一一一
一〇、我國の唐及明との交通につき比較論評せよ（岩手醫專）……一一三
一一、吉野朝時代、室町時代の日支關係（高檢）
（注意）……一一一
一二、室町時代に於ける日明の交通（彦根高商―講評）……一一三
一三、鐵砲の傳來と其影響……一一三
一四、我國に於ける吉利支丹弘通の原因（廣高師・美術・海機）……一一四
一五、義滿、義政の外交を室町時代の世相と照應して考察せよ……一一五
一六、室町時代の美術工藝（四高・陸士・神皇）……一一六
一七、室町時代の佛教……一一八
一八、室町時代の產業交通と都市の發達……一一一
一九、室町時代の文化の特色……一二三
二〇、武家階級と室町時代……一二四
二一、鎌倉時代の文物と東山時代の文化……一二五
二二、東山時代の文化の後世に及ぼせる影響……一二五
二三、室町時代に於て禪宗の美術工藝其他の文化に及ぼせる影響について述べよ（浦和高―講評・答案）……一二六
二四、足利時代に於ける禪僧の事業……一二七
二五、足利時代の特異性……一二八
二六、關東管領と幕府との關係……一三〇
二七、應仁の亂……一三二
二八、室町幕府が勢力を持續し得ざりし理由（狙ひ所）……一三五
二九、德政と其影響（三高・四高・姫路高・海經・長崎高商）……一三六
三〇、戰國時代の特質……一三八
三一、戰國の亂世に現はされた我國體の精華……一四四
三二、室町時代の下剋上の思想の起りし原因及其實例をのべよ（廣高師）……一四五
三三、室町時代に群雄の割據するに至れる理由（狙ひ所）……一四六
三四、室町時代の國體觀念……一四六
三五、戰國時代に於ける皇室と國民との關係を略述して我國體の尊嚴を說明せよ（横濱高商・山口高商・二高・六高―講評）……一四八
三六、關東に於ける北條氏の興亡について述べよ（六高）……一四九
三七、室町時代に於ける山名、細川、大内諸氏の盛衰……一四九
三八、次の各時代の特色を略記せよ、奈良時代、鎌倉時代、室町時代（海兵海經―講評）……一五一
三九、織田信長が群雄に先んじて海内統一の事業を進捗させ得たる理由（松山高）……一六一
四〇、織田・豊臣時代の特色……一六一
四一、織田信長の人物……一六二
四二、足利義教と織田信長兩氏の共通點……一六二
四三、信長と秀吉との人物の比較……一六三
四四、聚樂第行幸の史的意義……一六四
四五、比叡山に關する歷史事實（陸士）……一六四
四六、秀吉の土地制度改革……一六五
四七、豊臣秀吉の朝鮮征伐に失敗せる原因……一七二
四八、文祿の役に比して慶長の役に我軍不振の原因（海兵）……一七二
四九、文祿慶長の役中に現はれたる我が國民精神……一七二
五〇、豊臣秀吉の生活理想を歷史事實に據て述べよ（廣高師）（感想―講評）……一七三
五一、室町時代の外交と豊臣時代の外交との異同に就て述べよ（大阪高）……一七四

重要個別問題

1 神皇正統記（幕府・陸士・海兵・海機・京城法專・長崎・京城各高商・大阪外語・松本・山形各高）

（1）吉野朝の忠臣北畠親房が延元四年常陸の關城に於て、戰亂の裡に執筆し、後村上天皇に奉つたもので、（2）六卷あり、神代から後村上天皇踐祚迄の史實の大要を和漢混淆の流麗な文で記してある。（3）特に注意すべきは皇統の由來を說き、南朝の正統なる事を明かにしたもので、國體明徵、日本精神の涵養の上に極めて重要なる史書である。

2 長慶天皇

後村上天皇の第一皇子、天皇の次に九十八代の天皇として卽位せられ、御在位十六年で後龜山天皇に御讓位あり、後小松天皇の應永元年御年五十一歲で崩ぜられた。天皇の御卽位については、異論を生じて二百五十餘年間學者に論議せられたが、八代國治博士の研究により、御卽位が立證せられ、大正十五年十月廿一日、第九十八代の天皇として御位の御宣布があつた。

3 後龜山天皇（鷹高師）

後村上天皇の第二皇子で長慶天皇の御弟。足利義滿の奏請を許し給ひ、京都に還幸あり、神器を後小松天皇に讓り給ひ、應永三十一年崩御。

4 賀名生（アナフ）（陸奥）

（1）大和國吉野郡にあり、正平三年高師直等が楠木正行を四條畷に破り、進んで吉野の行宮を侵したので、後村上天皇は難を此地にさけ給ひ、（2）又後龜山天皇、足利義詮が叛いた時に此地に幸された。（3）北畠親房も此地に薨じた。

第三期　室町時代

第八章　室町幕府

第一　内　治

一、室町幕府成立の次第

❶ **尊氏時代**　(1) 尊氏は延元三年（後醍醐天皇崩御の前年）恣に征夷大將軍となり、幕府を京都に開き、鎌倉幕府の制に倣ひ、建武式目を作つて武士を取締つた。(2) 併し尊氏の部下は献身犧牲を信條とせず、利害本位の徒が多く、尊氏の大まかな性格と人心收攬策とにより、むやみに諸將に領土を與へた結果は、部下の勢力を增し服從心を弱め、尊氏の威令十分には行はれず、建武式目の權威もなかつた。

❷ **義詮時代**　子の義詮は凡庸、優柔不斷、吉野朝廷の軍が度々京都を回復する程の勢もあり、且内訌があつたので、幕府としての實力が備はらなかつた。

❸ **義滿時代**　(1) 義詮の死んだ時、子義滿十歲で家を繼ぎ、智略に富む細川頼之が執事となつて挺身よく義滿を教育し、政治を輔けたから、足利氏の勢漸く强大となり、(2) 强臣山名氏清を滅ぼし、大覺寺・持明院兩皇統の御和睦に成功して、(3) 始めて公式の征夷大將軍となつたので、幕府の權威も强くなり、制度も整つた。(4) 義滿は新邸を室町に建て、此所で政治をとつたので、世に之を室町幕府といひ、其邸の華麗にして花卉多きために花の御所と呼んだ。

二、室町幕府の組織（餘士・餘經・長崎高資・美術・海兵・師泉）

中央	（三管領） 將軍―（足利氏）―管領（管領は執權に當る） 細川・畠山・斯波	役所	長官	職掌
		政所	執事	主として財政を司る。
		侍所	所司	軍事警察を掌る。三大役所中最も强權、赤松・山名・一色・京極の四氏より任命、之を四職といふ。
		問注所	執事	裁判（後に記錄證券）を掌る。
地方	關東管領・鎌倉に設置。東國の政務を行ふ。尊氏の子基氏が初任、其子孫世襲。 九州探題・九州太宰府におき中國、西海の地域を支配せしめる。 奥州探題・陸奥におき、奥州の鎭撫と民政を掌る。 守護・地頭・守護は諸國に置き、初め軍事警察のみを掌つたが後民政にも關係し、權勢增大、殆ど領主の如きものとなり、地頭の多くは其家來となつた。			一族又は功臣を之に任じた。

【註】評定衆二十餘人は將軍・管領の顧問、引付衆は評定衆の輔佐として設けられ、訴訟の事に當る。

三、山名・大内兩氏の亂

❶ **山内氏清の亂**―（明德の亂）

(1) 山名氏は時氏以來富强を極め、其子氏清の時には其領地は山陰道方面十一國に亘り、日本六十六州の六分の一を領する所から、六分一殿といはれた。

(2) 元中八年（明德二年・南北合一前）事によつて義滿を怨み、吉野朝に降つて兵をあげて叛した。義滿乃ち細川頼之、

大内義弘等を率ゐ、京都の内野に破つて氏清を斬つた。之を明德の亂といふ。

❷ **大内義弘の亂**—（應永の亂）

（1）**原因**　（イ）大内義弘は明德の亂に山名氏清を滅ぼし、兩皇統御和睦に功があつたので、六國（周防・長門・豐前・安芸・和泉）を領し、勢頗る強大、（ロ）足利氏の諸豪と同じく尊大で將軍の命に從はず、（ハ）和泉の堺を貿易港として支那貿易をなし、國富み兵強く、（ニ）義滿の金閣の造營に方り、諸大名に課役を命じても義弘は之に應ぜず、（ホ）ひそかに關東管領足利滿兼と通じて東西から義滿を討たうとした。

（2）**經過**　義滿怒り、自ら斯波・畠山等の將を率ゐて大内氏を堺城に破つたので、義弘は自殺した。義滿は防長二國を義弘の子持世に與へ、他は功臣に與へた。滿兼は幕府を助けると稱して駿河迄出動したが、義弘の敗死をきいて引かへし、義滿と和して事なきを得た。時に應永六年、之を應永の亂といふ。

四、義滿の驕奢

❶ **官位異進**　義滿は强臣山名、大内兩氏を滅ぼし、兩皇統御和睦を圖り、幕府の制度を確立したので、次第に傲慢な態度となつた。在職三年にして、將軍職を子義持に讓り、從一位太政大臣となつた。

❷ **僭上・驕奢**　自ら公方と稱し、出入の儀衞を上皇に擬し、攝關以下をひざまづかしめるなど不臣僭上の行をなし、又北山に別莊を營み、邸内に三層の金閣を造り、華奢・風流を盡した。

❸ **明との國辱外交**　驕奢の爲、財政難となり、之が打開の爲に明と通交して貿易の利を得ようとし、明王から日本國王の稱號を受け、自ら日本國王臣源道義と稱し、明の年號を用ひるなど、國家の體面をけがした。

考察問題

1 **鎌倉幕府と室町幕府の職制及び實力を比較考察せよ**（高岡高商・佐賀師二・水戸高）

① **職制の對照**

鎌倉幕府				室町幕府			
	役所	職	掌	役所	職	掌	鎌倉に比して
中央	侍所	軍事・警察	別當	侍所	軍事・警察	所司	最も權力がある
	政所	一般政治	別當	政所	主として財政	執事	權限縮少
	問注所	司法裁判	執事	問注所	記錄證券（引付衆が裁判を掌る）	執事	同右
地方	守護	諸國に置く、軍事警察		守護	諸國に置いたが、殆ど其地の領主の如く、土地人民を私有した。		
	地頭	公領・莊園におき、土地の管理・租稅の徵收		地頭			
	京都守護	京都の警備		關東管領	鎌倉に置いて東國武士統轄政務をすべる。		
	鎭西奉行	九州の庶政、西海警備		九州探題	中國・九州を治める。		
	奥州奉行	奥羽の庶政		奥州探題	奥州をすべる。		

② **異同**

（1）室町幕府の組織は概ね鎌倉のそれに倣つたもので、其の職制が大體似てゐる。

（2）中央の機關の中、室町では三人の管領（鎌倉の執權に相當）が將軍の下にあつて政務を統轄する。侍所が權限に於て裁判だけ擴大、他の政所、問注所は職掌縮少。裁判も始は司つたが後に侍所に移した。

（3）侍所は所司が所謂四職として赤松・一色・山名・京極の四家交互に任じて最も勢力があつた如く、職掌に對する家格が固定してゐたが、鎌倉方では固定しなかつた。

(4) 守護地頭　(イ) 諸國に置く點はどちらも同じだが、(ロ) 鎌倉では頼朝の家人が地方官の役目をなし室町では實權增大、土地人民を私有する勢、從つて (ハ) 前者では守護地頭によつて中央集權を全うしたが、後者では守護地頭の勢力强大の爲に中央集權が崩壞した。

(5) 鎌倉では京都守護、室町では關東管領、何れも一方にない機關がある。幕府の位置が鎌倉と京都にある事から生じた差であるが、室町に於ては關東管領が特に勢力があつた。

③ **實力の比較**

(1) **中心勢力**　甲の方は頼朝が第一の組織者であり、北條氏も善政を以て部下統制堅實、實力を蓄積したが、乙の方は尊氏が部下に對する人心收攬本位で寛大放漫の政策の爲に、中央集權の實があがらず、將軍に實力をもつもの少く、善政もなかつた。

(2) **實力建設と崩壞**　甲は源氏北條氏相次で、中央集權と軍備や民治に堅實な道をとつた爲に、其の實力發揮が元寇に現はれ、乙は基礎薄弱、中央徵力、守護强盛で其の結果が應仁の亂から群雄割據になつて現はれた。要するに、甲は建設時代で實力强く、乙は實力弱くして崩壞を招いだものである。

2 鎌倉室町兩時代に於ける守護の勢力の差　(前問②の(4)及次問3參照)

3 室町時代に守護が勢力强大なりし理由

① 足利尊氏が建武中興の失敗に鑑み、武家政治要望の大勢を見て、人心收攬策として多くの土地を武士に與へたので富强になつた。

② 吉野朝廷との敵對關係上、味方なる守護に强壓を加へる事が出來なかつた爲に、守護が增長した。

③ かくして守護の實權を伸張する事が出來た爲、一守護にして數ヶ國を領有し、地頭を驅使して其支配地の租稅を私し、宛かも領主の如き勢を有した。

④ 幕府の要職をもつ武士が皆有力な守護であつた事も大きな理由である。

4 吉野朝廷が室町幕府に與へたる影響

吉野朝五十七年は後醍醐天皇を始め奉り、四朝の天皇皇族勤皇の士の全く涙の苦鬪史であつたが、結局義滿の時代になつて、再び武家政治に立歸るのやむなきに至つた事は、表面上吉野朝方の敗北の如くに見える。併しながら、吉野朝時代足利氏が之と對抗する爲には、可也な犧牲を拂はざるを得なかつた。卽ち

(1) 對抗上から幕府を鎌倉に開く元の考が實行出來ず、京都に置き、文弱の弊に陷つた事。

(2) 關東を治める必要から、鎌倉に關東管領を置く事にしたが、之が强大になり、幕府の仇となつた事。

(3) 吉野朝との對抗上足利氏に從ふ諸將の心を收める爲に、寛大なる處置をとる必要があり、却つて諸將の權力・領土の擴大を來し、幕府の統一力を弱めた事。

5 室町幕府に於ける足利義滿の地位

① **第一代の將軍**　義滿は尊氏の自稱征夷大將軍からすれば第三代であるが、正式に天皇から任ぜられた征夷大將軍は義滿であるから、室町幕府第一代の將軍といはねばならぬ。

② **功績**

(1) 幕府の基礎樹立　尊氏の諸侯優待により專横を極めた山名氏淸を明德の亂に、大內義弘を應永の亂に平げ、以て幕府の障害を排除した事は幕府の實權擴充に貢獻したものである。

（2）戰亂終熄　足利氏にとつての數十年の對立抗爭の吉野朝に對し奉り、後龜山天皇の京都還幸を奏請し此戰亂を終熄せしめた事は大きな手がらであつた。

③ 罪過

（1）僭上の行ひと驕奢　やむなく武家政治となつても、北條泰時、時賴の如き善政と民力涵養に盡すならば恕すべきであるが、義滿は上皇に擬した行列、公方といふ呼稱など僭上の振舞多く、且苛稅をとつて驕奢にふける等、人臣として、天下の政治をとる者として許すべからざる行をなした。

（2）外交上の國辱　鎌倉幕府は元寇に方つて國際的に體面を維持したのみか、國威の顯揚に擧國一致の實をあげた。然るに、義滿は奢侈よりの財政の缺を補ふ爲、明との貿易を行ひ、又明との國交書に明の年號を用ひ「日本國王臣源道義」と稱し、明の冠服を着用し、國書に三拜の禮を行ふの卑屈を敢へてし、我國の體面を汚辱した事は、幕府としても甚だ不名譽であり、其責を犯したものといはねばならぬと同時に、甚しく幕府の威嚴を損じたものである。

重要個別問題

1 公　方（長崎高商）

（1）元は朝家の義、古くは朝廷の意。（2）義滿太政大臣となり僭上の餘り公方と稱し、征夷大將軍の別名となる。（3）關東管領も之に倣ひ鎌倉公方といひ、次で堀越公方、古河公方と稱へ、（4）德川時代にも將軍の別名で、「犬公方」―綱吉。「田沼樣には及びもないが、せめてなりたや公方樣」等と稱せられた。

2 建武式目

（1）建武三年日野藤範（フヂノリ）等八人が尊氏の諮問に答へた意見書。（2）先づ幕府を元の如く鎌倉に開くべきか否かを論じ、（3）次に儉約を奬め、遊惰を戒め暴行を禁じ、賄賂を禁じ、守護には器量あるものを選ぶべき事など十七箇條ある。（4）貞永式目に則つたものだが、幕府の實力、權威がない爲に、効果は之に及ばなかつた。（建武式目とあるから、天皇方の掟（オキテ）の如く思はれて混同し易い。）

3 細川頼之

（1）足利義詮病むに方り、彼を管領とし、托するに子義滿の後事を以てしたので、（2）幼主を助け、挺身教育に努め、（3）後龜山天皇京都御還幸をはかるなどの獻策をなし、幕府の實勢强化に力があつた。義滿悔長ずるに及び、頼之の權勢を忌み、讒を信じて職を退かせたが、頼之が讃岐から一詩を送つたので、義滿悔いて召還。明德二年山名氏清を平げ、六十四歳で歿した。

第二　室町時代の外國關係（神戸高商）

一、元・明との交通

❶ 國民の海外發展

（1）海外發展の源流　平安朝中期、我固有文化の發達と共に國民の自覺高まり、自主的觀念が發達し、宋に對する態度も對等的となり、特に元寇以後、戰勝と敵愾心などから海事思想、對外的精神が勃興した。

（2）元寇前後の日支關係　鎌倉時代の初め、我商船の南支那海に航海するものがあつたけれども、當時の支那（宋）は錢貨の流失を防禦する爲に、我商船の來航を禁止した事もあつた。

❷ 元・明との交通

（1）吉野朝期―元との貿易―天龍寺船　足利尊氏は後醍醐天皇の冥福を祈る爲、京都の嵯峨に天龍寺を建

立したが、其資金を得る一法として、我商人に特別の保護を與へ、毎年船二艘を元に遣はして貿易を營ましめ、其報酬として一隻に付錢五千貫を寺に納めさせて造營費に充てたので、この船を天龍寺船といふ。

(2) **明と征西府**　元滅んで明起るや、倭寇の侵略に苦しむ明の太祖（朱元璋）は、屢々使を九州に遣はして征西將軍懐良親王に通商を求め、其禁壓を乞うたが、其書辭無禮とあつて、之を斥けられた。

❸ **室町期**

(1) **義滿の外交**　前將軍義滿は使者を明に遣はして修好（應永八年）し、辭を低うして明の歡心を買ひ、明から永樂通寶其他の錢を求めて財政の不足を補つた。其外交書には明の年號を用ひ、自ら日本國王臣源道義と稱し、且明の冠服を着用し、明の國書には三拜の禮を行ふ等、我國の體面を汚し、大義名分を無視した。

(2) **義持義教時代**　其の子義持は父の失態を悔ひ、且對明貿易の不利に鑑み、明との交通を謝絶したが、義教の時に至つて又復活。

(3) **義政時代**　義政は奢侈遊樂に耽り、屢々錢を求め、又名畫、珍器を輸入したから、彼我の交通は愈頻繁となり、此結果、東山時代は多く明の文化の影響を受けた。

(4) **進貢船と勘合符**（皇紳）　明の成祖は一般の貿易を禁ずる代償として義滿のみに入貢を許し、この貿易を進貢といひ、其船を進貢船といつた。名義は入貢であるが、義滿が明に貢する品物に對し、明からは五倍十倍の代償が支拂はれた。

後、入貢を制限する爲、明は勘合の制を定めた。即ち明は商船と海賊船とを區別する爲に、百通の割符を我國に送り、其半分を明に止め、彼我照合して貿易船の證とした。之を勘合符といふ。

(5) **大内氏の交通**　通商は初め幕府の獨占だつたが、やがて諸國の守護・五山・南都の寺院・堺・兵庫・博多の商人なども幕府の勘合符をうけて通商した。義政以後幕府衰微するや、大内義興は幕府の許可によつて、明からの勘合符を受け、對明貿易の實權を握り、其利の一部を收めて富强を極めたが、大内氏の滅亡と共に、對明交通も中絶し、自然國民の通商的發展も一時中絶した。

二、倭寇（海賊・美術・長崎高商・東商船・高松高商・高麗・高商・大連高商・和歌山高商）

❶ **起源**

(1) 九州・瀬戸内海附近の海岸線出入に富む地方の住民は、早くから海の生活に馴れてゐた所、元寇によつて國民の對外的精神が勃興し、又吉野朝時代の前後、戰亂によつて志を得ない者や上記地方の住民は、黨を組んで大陸や朝鮮半島の沿岸に乘出して貿易を强要した。

(2) 當時の支那では、宋がさきに我商船の來航を禁じたので、彼我の商船は海洋上で密貿易をしてゐた。宋から明に至つても私貿易禁止の方針の爲に、干戈をふるつて掠奪を行ふやうになつた。支那人は之を倭寇といひ、その船を八幡船（バンセン船に八幡大菩薩の旗を掲げた。）と呼んで非常に恐れたものである。

❷ **明の倭寇防禦策**

(1) 明の太祖　太祖朱元璋は倭寇の害に苦しみ、征西將軍懐良親王に國書を送り、その禁壓を請うたが、親王は其書辭の無禮を咎めて之を却け給うた。

(2) 明の成祖　成祖永樂帝は足利義滿の進貢のみを認め、勘合符を造り來り、義滿も其請を納れて倭寇を禁じた。

❸ **倭寇の消長**

> **南京進擊の倭寇**　昭和十二年に始まつた支那事變の上海方面は四百年前倭寇の活躍地だつた。吳淞や杭州灣岸に上陸し、太倉、嘉定から進んで、明の首都南京迄三回も入城して居る。戰國時代川中島の戰の頃が盛だつた。しかも「倭に從ふもの十の七」とあつて、支那人が頭を日本人式になほして、此仲間になり、十人に七人は支那人だつた。之を討つ支那の官兵が殘虐無道で「賊去つて官兵來るを恐る」とあるのを見ても、支那の兵隊の昔からのやり口がわかる。

(1) 猖獗時代　吉野朝時代國内戰亂につれて盛となつた倭寇は、應仁の亂で國内混亂となるや、一層猖獗を極め、遂には明の暴民も之に加はつて、其暴擧は一層甚しくなり、明の國運爲に衰微を來した。

(2) 衰微時代　明は倭寇の爲に辟易し、國家的大患としてゐた位で、やがて明軍が倭寇を破つてから(倭寇の前年)勢力を失つたが、尙臺灣に退いて近海に出沒してゐた。しかし秀吉の天下統一と共に其禁止にあひ、全く姿を消すに至つた。

❶ **倭寇の影響**

(1) 邦人への影響　私の貿易は、かくの如くして禁ぜられたが、我國人の海外雄飛の精神は著しく旺盛となり、德川初期に至る迄南洋方面に渡航して貿易に活躍し、中には武名を轟かすものも出る程であつた。

(2) 外國への影響　明は倭寇によつて國運衰へ、高麗も之によつて滅亡の因を作つた。

【和歌山高商教授講評】 本問（倭寇）は容易であつた爲か相當よく書けてゐた。が中には隨分參考書類を見其れも試驗前だけでなく相當久しい間勉强したに違ひないと思はれる、よく整つた好答案もあつたが、反對に倭寇とは德川初代の海賊であるといふ樣なのもあり、この海賊職と區別する爲「朱ギヨク船」の制を設けたと記す者もあつた。：：一面要求する答も記してあるが、其以外に不要の事まで筆記した者も相當ある。その不要の部分に誤がなくても感心しないが、其はまだしも、もし誤謬があれば實力を疑はれても仕方がない。何れの問題といはず一讀其意のある所を知り得る如くであつてほしい。さういふ文章をかく事は一種の技術であるから平素の練習が必要である。：：**答案試驗は紙上の答案だけが考査の手がゝりで、口頭試問と趣を異にする。此點は篤と心得てゐてほしいと思ふ。**（文部時報五九四號ノ二による）

三、朝鮮との交通

❶ **高麗の滅亡**　高麗は元寇に從軍して財政困難となり、且倭寇の侵略により愈々衰頽し李成桂に滅ぼされた。

❷ **朝鮮の興起**　將軍李成桂は倭寇鎭壓の功により人望を收めてゐたが、我元中九年（二三〇五）に至り高麗を滅ぼして自立し、國號を朝鮮と改め、都を漢城（京城）に定め、李王朝五百年の基を開いた。卽ち今の李王家の祖である。

❸ **朝鮮との交通**　太祖李成桂は我國に通商を求めて來たので足利義滿之に應じ、次で義敎時代から對馬の宗氏が日鮮通商を掌つて戰國時代に及んだ。

四、歐洲人の來航

❶ **來航の動機**

(1) 伊太利人マルコ・ポーロは元の忽必烈に仕へ、歸國後話した東方見聞錄が出版され、之に依て歐洲人は東洋諸國の事情を詳かにし、特に見聞錄の我國の金に富める記事が好奇心を刺戟した。

(2) 當時西アジアに土耳其帝國起り、東洋貿易を遮斷したので、歐洲では香料・砂糖・嗜好物など熱帶特產物が騰貴した。そこで新航路によつて直接東洋と貿易して其利を獨占しようとした。

(3) 之より先（十三世紀末に）羅針盤の發明があつて遠洋航海に多大の便益を與へ、

(4) キリスト敎に新敎が生れた反動で、舊敎徒が對抗上東洋に布敎しようとした。

(5) かゝる間にイタリー人コロンブスは西方から、我國に來らうとしてアメリカ大陸を發見し、ポルトガル人バスコ・ダ・ガマは南アフリカの喜望峰をめぐり、印度から支那に來り、壞門（マカオ）を根據地とした。

❷ **ポルトガル人の渡來**

(1) ポルトガル人の來朝　後奈良天皇の天文十二年、海上暴風に遇つたポルトガル商船が、我種子島（タネガシマ）に漂

着した。

(2) 鐵砲の傳來　時に島主種子島時堯(トキタカ)は小銃と火藥の製法とを傳授されたが、丁度戰國時代なので、後に傳はつた大砲と共に、我が戰術と築城法とに一大影響を與へる事となつた。(二一三頁5)

(3) 南蠻人の呼稱　間もなくイスパニア人も我平戸に來て貿易に從事したが、主として鹿兒島、府内(後豐)長崎・堺浦(和泉)等の港に來た。當時我國人は之等の外國人を南蠻人と稱し、其船を南蠻船とよんでゐた。

五、キリスト教の傳來—天文十八年—二二〇九

❶ **傳來の始**　當時歐羅巴に耶蘇會といふキリスト教の一派が起り、天文十八年、其宣教師フランシス・ザビエル(Francis Xavier)といふものが印度のゴアより鹿兒島に來て、始めて我國にキリスト教を傳へた。

❷ **キリスト教の流行**　一度び傳來するや、九州の島津・大友、中國の大内等の諸侯皆布教を許し、ザビエルの去つた後も、立派な宣教師が續々來朝、教會堂は勿論、學校・病院等をたて、教科書をつくり、珍らしい西洋の諸文化を傳へて布教に苦心したので、數年でキリスト教は九州から中國・四國・近畿に傳播した。我國では此宗旨を切支丹宗又は天主教と稱した。

❸ **布教と貿易**　天主教の布教と共に彼我の貿易も盛となつた。之等の貿易に從ふ南蠻商人は何れも天主教を信仰し、布教したので、大内・大友などの諸氏は表むきキリスト教を保護しつゝも、貿易を主としてゐたものである。

❹ **南蠻寺**　織田信長は、佛教徒の横暴をおさへる爲にキリスト教を保護し、京都に南蠻寺をたて、安土に學校を起させて普及をはかつた。しかし秀吉の時代には之を禁じ、南蠻寺をこわした。

❺ **歐洲への遣使**　天正十年九州の大名有馬晴信、大友宗麟、大村純忠の三氏は、伊藤義賢、千々岩清左衞門(何れも十六歳以下の少年)等を羅馬法王グレゴリー十三世の許に遣はした。之が邦人の歐洲に行つた始である。

考察問題

1 **室町時代に於ける外交の特質**—足利幕府の外交(昭五高等試驗外交科)

【注意】他の時代、特に前の鎌倉・吉野朝時代、江戸時代等から眺めて、此時代特有なものがあるかを先づ考へる。範圍に於て、(1)西洋に迄亘つてゐる、(2)渡來文化の種類や性質に差がある。(3)やり方に差がある。(4)國辱的なもの、掠奪的な倭寇等々。

(1) **範圍が世界的**　從來の朝鮮、支那に止まらず、歐洲から西班牙人葡萄牙人が來るし、我國もローマに使する等の事は前代にない事である。

(2) **西洋文物の渡來**　之迄は東洋文物の渡來で、西洋のそれは支那印度を通して僅かに其文物の中に融合したものであつたが、此時代には直接に西洋文化が渡來した。鐵砲が戰術等に影響し、キリスト教は在來の宗教に大影響を與へ、他の西洋文物が新しい刺戟を我國に與へた。

(3) **外交の態度**—國辱　足利義滿、義政の外交は驕奢の財政的缺陷を貿易の利によつて補ふ爲に、敢て屈辱的對支外交をやつて顧みなかつた。

(4) **掠奪的貿易**—倭寇　倭寇は元寇の後の頃から起つてゐるが、此時代に於て義滿の勘合符による貿易で一時衰微し、足利幕府の衰へるにつれて盛になり、貿易と劫掠とを交へて高麗や明を惱ました。

(5) **積極的進取的**　我國民の態度として貿易上、倭寇の如きものに於てすら、廣範圍な積極性をもち、文化の受容態度に於て、支那、西洋文物の吸收が進取的であり、西洋人の渡來も領土擴張時代で積極、進取性に充ちてゐた。

2 我國の唐及明との交通につき比較論評せよ（岩手醫專）

我國が唐と交通したのは上古舒明天皇の御代犬上御田鍬の遣唐使差遣に初まり、以來平安朝で宇多天皇の寛平六年の廢止までに、高度の文化をもつ支那から、より低い我國へ、文化が非常な勢で流入し、大化改新、大寶律令の制定をへて奈良朝の文化を生み、次第に文化の落差を少くして行つた。

我國が明と交通したのは、足利義滿の時代（應永八年）で、遣唐使の初から七百七十一年も後の事。唐との交通では模倣中心だつたが、最早此頃になると日本の文化も進み、義滿を初め、義敎義政の明との交通は寧ろ貿易の利を占めるにあつた。義滿の如きは國家の體面をけがす迄に至つたが、國民の海外發展の勢は熾烈で、倭寇となつて支那沿岸を侵掠し、明の衰亡の因をなした位だつた。即ち唐との交通時代はまづ我國は子供時代、學習時代だつたが、明との交通時代になると、力づよい一人前の國となり上つてゐた譯である。

3 吉野朝時代、室町時代の日支關係（高檢）

【注意】吉野朝時代といふのが、ビックリさせられるけれども、別にえらい事はない。要點は、後醍醐天皇崩御、尊氏哀悼、疎石の建議で天龍寺建立の爲天龍寺船を元にやつたのが、吉野朝時代である。もう一つは倭寇が吉野朝の末頃から一層ひどくなつた事。――歷史の問題は、同一事實をどんなにも形をかへられるから、盲滅法式暗記では困る事がある。室町時代の所までは本文二〇六頁（1）より二〇八頁迄で解る。

4 室町時代に於ける日明の交通（彥根高商）**室町時代の支那との交通を說き、併せて其影響を述べよ**（名古屋高商）

【要點】支那との交通の中、室町時代の「明」に對する ① 義滿から、義政迄の屈辱外交、② 勘合符を用ひた貿易、③ 倭寇の顚末、④ 影響。この影響は

（1）對明貿易で互利を占めて幕府の財政を援けた事。

（2）支那文物が傳來し其の爲に（イ）禪僧の渡明で宋學や詩文が盛となり、（ロ）義政の名畫珍什の輸入により、又雪舟の渡明して支那畫風を研究した事から、淡墨瀟洒な宋・元・明の畫風が盛となり、東山時代の美術の特色をなした。（ハ）工藝方面では祥瑞五郎太夫が明の磁法を傳へた。（次頁參照）

（3）倭寇の影響（二〇八頁）

【彥根高商教授講評】日明の交通の時期は問題に明かに室町時代と限定してあるのに前後の南北朝時代と安土桃山時代乃至江戸時代初期迄も之に含めたのを多數見受けた。日明の交通といへば室町幕府と明朝との交通と兩國間の私的交通との兩者の記述を必要とし、之を政治的にも經濟的にも更に一般文化的にも見るべきで貿易にしても兩國間の官貿易とも稱すべき方物の交換もあり一般商人に取扱はれた特產物の交易もある。兩國は夫々交通開始の動機を異にしたが、如何なる結果を兩國に與へたかといふ事も重視しなければならぬ。殊に當時比較的高文化保持國としての大陸の明國から僧侶の往復により、又書籍類の輸入によつて佛敎の敎義や其他の學問が我に入り來り、尙貿易商品を通じて各種の工藝や美術が移植せられた事も考慮すべきであらう。日明間の出入船舶に附き物の勘合符の事は名稱だけはかいてあつたが、此の制度は如何なる理由によりて採用されたか其使用法の要點も判つて居らず、甚しいのは當時の貿易船を御朱印船と混同したものもあつた。（女部時報六三一號ノ二による）

5 鐵砲の傳來と其影響

① **傳來**　後奈良天皇の天文十二年（一五四三）ポルトガルの商船が、我國大隅の種子島に漂着して鐵砲を傳へるや、此島がやがて鐵砲、火藥の製造地となり、當時戰國時代だつた爲に、武器として普及の速度めざましく、川中島の戰、長篠の戰等を初め、實戰に用ひられ、戰術、戰陣、築城の方法から、之に關聯して色々の影響を與へた。

② **影響**

(1) **戰法の變化**　槍や刀の接戰だつた從來の戰法が、所謂飛道具たる鐵砲によつて個人的格鬪本位から大多數の軍隊組織になつてしまつたので、豪傑の先陣拔駈の功名は排斥され、足輕がねうちをもつて來た。

(2) **武將資格の變化**　從來の主從關係では血統本位の少數の家來でよかつたが、大軍隊組織になつてから血統門地よりは多數の人心を集め得るものが勝をしめる。元龜天正頃になると、身分の低い者の中から偉い人材がメキメキ出て來た。

(3) **小地頭の地位の變化**　大軍隊組織で且鐵砲が使はれるから、小地頭は獨立出來なくなり、大地頭に併合されるか、武士をすてて土地の豪族になるかの二つの道に立つ事になる。

(4) **築城法の變化と城下町の發達**　城の造り方は從來要害險岨の地だつたが、鐵砲を使ふ時になると、展望のきく土地に石垣を築き、堀を掘り、天主閣といふ物見臺を造り、籠城出來るやうに城内に大きな建物が必要になる。こゝに城下町が出來て、江戸・大阪・名古屋などの都市が發達し商工業者の擡頭を來す。

(5) **武士の都會生活と町人の勢力**　大きな城が出來ると、城下に家來をおく事になり、地方土着を基とした武士が都會生活をなし、消費者化したから、町人がいよ〳〵勢力をしめる事になる。

6 我國に於ける吉利支丹弘通の原因（鷹高師・美術・海護）

① 吉利支丹及布教の特質

(1) **耶蘇會の性質**　清新で剛健な宗風と、潑溂たる意氣とを以つて布教に當つた。

(2) **耶蘇會宣教師の人物**　ザビエルは勿論、其の他のヴィレラ・オルガンチノ等皆德行と熱誠を以て人を化し、又臨機應變に人を導く學識と智慮を有したので、當時佛教僧侶の亂行の甚しかつた際だつたから特に我國民を動かした。

(3) **學藝教育と慈善事業**　宣教師等は天文・地理・物理等の科學的智識を有し、早くから宗教書や文學書の飜譯、辭書文法の編纂によつて我國語を學ぶ事に努力した。又學校を設けて教育を起し、病院・保育院等を設けて癩病、黴毒の患者や捨子を入院せしめた。

(4) **商人の援助**　ポルトガル商人の援助で、九州方面の諸侯が外國貿易を渇望せる時、宣教師の好遇せらるゝ所だけに貿易船が入港した。ために便宜上吉利支丹を好遇することを必要とした。

(5) **西洋の文物**　宣教師の齎らした當時の文物や海外の新知識が歡迎せられた。

② 國内的事情

(1) **宗教上の救濟必要**　社會組織が紊れ、政治及び思想上に新勢力の侵入すべき隙間が多かつた。天主教の革新的の風が盛んで、新らしい事が歡迎せられた時であつたから、宗教上の救濟に期待する所が多かつた。

(2) **佛教との關係**　佛教の腐敗及び其の勢力を抑へるために、之を保護することは有効であつた。

(3) **我國の國民性**　わが國民は外來文化の傳達者を歡迎する傾向がある。だから國民は吉利支丹宗宣教師が、印度から來て會堂の設置、說教をなす事に對しても、何時も佛教の一派の如く考へ、親しみ易かつた。

7 義滿・義政の外交を室町時代の世相と照臨して考察せよ

(1) **室町時代の世相**　政治上に於ける幕威の失墜、權臣・豪族の跋扈跳梁は自然に社會秩序の紊亂を來し、上の威令は下に及ばず、社會の統制全く失はれて所謂下剋上の形勢が著しかつた。此形勢が一般庶民に及んで海外發展熱、商業組合など射利の方面に私利私慾を追ふものが多くなつた。上下を通じて、大義名分を忘れ、權勢と財利に狂奔する有樣であつた。

(2) **義滿の外交**　此の間に於て、義滿は、尊氏以來强勢だつた山名、大内等の諸豪を討ち、所謂南北朝合

一をなして世を太平にし乍ら、更に之をひきしめようとせず、僭上驕奢の振舞をなして顧みず、其財政的缺乏を專ら明への入貢貿易の利によつて補ふ事にし、其爲には國家の體面を瀆して迄、明の歡心を求める有樣であつた。義滿の外交は世相の反映たる財利、奢侈の甚しきものであると同時に、又將軍の外交の態度が世相を一層惡化せしめたといはねばならぬ。

(3) 義政の外交　義滿の國辱的射利外交は子義持の時一旦禁じたが、義政となつては義滿時代のそれに復活し、勘合符によつて倭寇を禁ずる事が、一面幕府・諸大名及社寺の貿易獨占となり、あからさまに明から錢を乞ふの醜態を演じ、又貿易によつて五倍から十倍位の利益を得た。其利益をもつて戰亂をよそに驕奢にふけつてゐたのである。

當時義政の權力は地に墮ち、權臣の勢力盛んで、只美術工藝其他の奢侈による外に樂しみはなかつた有樣であつた。

第九章　室町時代の文化

一、室町時代の美術工藝（四高・陸士・神皇）

❶ 發達せる理由

(1) 足利代々の將軍が概ね美術工藝に趣味を有し、特に義政の如きは、戰亂をよそに日夜遊樂に耽り、和漢の書畫古器を集め、土木を起したので、大いに藝術が復興した。

(2) 當時明との交通が開かれた爲に、彼地の美術・工藝が輸入され、發達を促進した。

❷ 東山時代と美術工藝の特色

(1) 東山時代　義政は應仁の亂中に將軍職を子義尙に讓り、屢々土木を起し、遊樂に耽つたが、義滿の金閣に倣つて東山に銀閣を造つて住み、屢々茶の會を催して風流を事とし、和漢の書畫珍器をもてあそんだので、美術工藝は大いに發達した。世に義政を東山殿といひ、美術史上で此時代を東山時代といふ。

(2) 特色　禪宗の影響で禪味を帶び、一般に淡泊雅致あるものが尙ばれた。

❸ 室町時代の繪畫　天平時代の彫刻と共に我國美術史上の二大壯觀である。しかも前代の濃艶な彩色を用ひた大和繪とはちがひ、宋・元風のあはい水墨畫が流行した。

(1) **東山以前**　宋・元・明の畫風が傳はつた。義滿・義持の頃には佛畫に僧明兆が出た。彼は京都東福寺の僧で其の殿司（ヅンス）となつた事から、兆殿司ともいひ、傑作に十六羅漢がある。又義滿の頃には、如拙・周文共に、相國寺の僧で、花鳥山水の墨繪に長じてゐた。

(2) **東山時代**

(イ) **雲谷（ウンコク）派**　義政の頃僧雪舟が居り、山水畫に古今獨歩といはれる妙筆を振つた。畫風が禪味たつぷりの淡泊な墨繪で、人物花鳥も得意だつた。雪舟が明から歸朝して、山口の雲谷寺にゐて雲谷と號した事から、雪舟の畫派を雲谷派といふ。

(ロ) **土佐派**　土佐光信は光長・光起と共に土佐三筆と稱せられ、鎌倉時代まで盛だつた大和繪を再興した。

(ハ) **狩野派**　狩野元信は古法眼（ゲン）と稱し、周文に學んだ父正信の畫風と、土佐光信の畫風とをとり入れて、

和漢の風を折衷し、狩野派を起した。

❶ **建築**

(1) **禪宗の影響**　禪宗全盛の爲に、禪刹伽藍が多く建築され、住宅建築にも此風が取入れられた。

(2) **書院造**　寢殿造から變化したもので、簡素で風雅、大體は僧侶の讀書する書院の構へを摸したものなので、書院造といふ。近世住宅建築の基となり、現代の日本式住宅に見るやうな玄關・床の間・違棚・書院・襖・明障子（紙の障子）疊などの設備、床の間の掛軸・香爐・挿花・幽靜な庭園など、書院造が現代にまで殘つてゐるのである。

(3) **代表的建築物**　義滿の建てた北山の金閣、義政の建てた東山の銀閣など。

❺ **工藝**　彫刻は鎌倉中期以後衰へ、美術工藝品が發達した。

(1) **製陶**　東山時代は茶の湯が流行し、從つて陶器の明から輸入されたものが多かつた。伊勢の人祥瑞五郎太夫は明に渡り、歸朝して唐津燒を傳へた。

(2) **金工**　武家中心の社會で、刀劍裝具の彫刻も大いに進歩し、後藤祐乘の如き名手が出て、世に金工の祖といはれ、目貫・鍔・小柄など、後の人の珍重する所である。

(3) **漆器**　義政が漆器を愛玩したので幸阿彌の如き蒔繪の名工を出し、支那にも漆器を輸出した位だつた。

二、室町時代の佛教

❶ **特色**

(1) 室町時代は鎌倉時代に興つた新宗派の完成期で、禪宗を初め淨土諸宗派及法華宗などが皆舊佛教の壓迫を受けつゝ其基礎を確立し、其勢力を民間に迄及ぼして國民生活と關係を深からしめた。

(2) 室町時代は戰亂相次ぐ時代だつたので、僧侶が唯一の知識階級の如くなり、之が明に渡つて、佛教のみならず儒教其他の文化を吸收して來た爲と、亂の裡に義滿義政等の奢侈生活が影響して、學問・美術工藝等文化一般に佛教及僧侶の支配力がつよかつた。

❷ **禪宗**

(1) **禪宗と足利氏**　禪宗は鎌倉時代から引續いて行はれ、特に足利氏の保護により愈盛となつた。尊氏の建立した天龍寺、安國寺や、義滿の相國寺等皆有名である。義滿は鎌倉五山に應じて京都の五山の順位を定めた。（京都五山―天龍寺・相國寺・建仁寺・東福寺・萬壽寺　鎌倉五山―建長寺・圓覺寺・壽福寺・淨智寺・淨妙寺）

(2) **禪僧と文化**　此時代の武人は戰亂の爲に學問修得の餘裕がなかつたのに、禪僧には學問があり、支那に往來して彼地の事情に明るいものが多かつたので、義滿・義教等は之を用ひて政治外交の顧問とした。

(3) **有名な禪僧**　(イ) 夢窓國師（疎石）、尊氏の尊信した臨濟派の名僧で、天龍寺の建立、天龍寺船による支那貿易、諸國に安國寺の建立など皆此僧の献策によるものである。(ロ) 義堂・絶海　共に義滿に事へて政治、外交の顧問となつた。

❸ **眞宗**

(1) 關東にあつた眞宗は、應仁の亂の頃から近畿・北陸方面に廣まり、

(2) 將軍義政の頃、蓮如上人（兼壽）が出て本願寺中興の祖となつてから大いに盛となつた。蓮如上人は說法が巧みであり、御文章が平易で、口と筆とによつて布教に努めたので信者が激增したのである。かくして此信仰者は武力團體にまとまり、石山本願寺はまるで一大名の富强を有し、信長も之を滅ぼすに骨が折れた位であつた。

❶ **日蓮宗**

（1）眞宗と同じく吉野朝から應仁の亂頃にかけて京都を中心に中國九州に廣まつた。

（2）日朝・日親などの傑僧が輩出し、其布教により、妙覺寺・本國寺・本能寺等の名刹が建立された。

三、室町時代の學問・文學

❶ **學問**

（1）五山文學　亂世に於て學問を維持したのは五山の僧侶だつた。彼等は多く儒教佛教を研究し、又詩文に巧みな者が多かつた。中にも尊氏時代の疎石、義滿時代の義堂・絶海などが有名。

（2）漢學　鎌倉時代に傳來した宋學は當代に一層隆盛となり、天理人性を究める風となつた。

（3）公家の學問、一條兼良（カネラ）は和漢の學に長じ、公事根源（クジコンゲン）を著はし、子の冬良（フユラ）は增鏡の著者として傳へられ、三條西實隆は詩歌で有名だつた。

（4）武家の學問　上杉憲實は足利學校や金澤文庫を再興した。

❷ **國文學・和歌**

（1）國文學　北畠親房が神皇正統記を著はして國體の淵源を明かにし、又吉野朝廷の正統なる事を論じ、小島法師の太平記、一條冬良の增鏡、吉田兼好の徒然草亦有名である。

（2）和歌　一般に振はず、東常縁（トウノツネヨリ）が「古今傳授」を著はし、太田道灌は武士の歌人として名を殘してゐる。

（3）連歌　和歌の一體で、宗祇・肖柏が出て大成し、廣く行はれるやうになつた。

❸ **能樂狂言**

（1）**田樂から散樂**　田樂の衰微によつて猿樂が流行し、やがて能樂と狂言とに分れて發達。能樂の流行によつて謠曲の新作が盛に出たが、多く武勇物語を主としたから、武士の間に行はれた。

（2）**謠曲の流行**　謠曲は義政の頃、觀世・寶生・金剛・金春の四流に分れ、秀吉の頃喜多流が起つた。

❹ **お伽噺**　江戸時代の平民文學の先驅としてお伽噺が擡頭したのは庶民文化の向上と見られる。

四、室町時代の風俗

❶ **風俗の特徴**

（1）武家が京都に居つて公家に接した爲に、鎌倉時代の如き質朴、剛健の風を失つて公家風となつた。

（2）前代の庶民の風が次第に貴族間に行はれるやうになつた。

（3）一般に禪宗の影響を受け、淡泊で氣品あるものを好むやうになつた。

❷ **衣・食・住の變化**

（1）**衣**　武士の服裝は初め烏帽子・素襖・長袴を用ひたが、後には肩衣・半袴を、式日には直垂（ヒタタレ）を用ひるやうになり、

（2）**食**　料理法は大いに進歩し、從來の一日二食は應仁の亂頃から三食をとるやうになつた。戰爭の場合從來のふかし飯でなく、今日の如く鍋釜で炊く飯になつた。

（3）**住**―建築の項參照

❸ **遊技**　禪宗の影響で、茶の湯が盛となり、之に伴つて生花、盆栽・香合（カウアハセ）等の優雅な遊が起つた。

五、室町時代の産業交通と都市の發達

室町時代は從來繁盛だつた京都や鎌倉が戰亂の爲に衰へ、地方の諸大名の强勢と庶民の擡頭とによつて地方

の都市が勃興し、產業が發達して交通も盛になつた。

❶ **職人の發生**　此時代は一般庶民の經濟的な獨自の力を發揮するに至つた事が原因して、德政一揆や一向一揆が起つたものである。平安朝時代迄工藝品の製作に從事したものは、朝廷や貴族に隷屬した奴婢だつたが、鎌倉・室町時代になると奴婢が解放されて自由獨立の職人となり、註文を取つたり、市場に賣る爲に諸種のものをつくるやうになつた。

❷ **商業の狀態**　平安時代の商業は京都では東西市場の市制で行はれ、地方には定期市が行はれたが、室町時代には都市に於ては市を立てゝ取引する外、店を構へて商賣する座商が出來、地方には近江商人の如き行商が盛になつた。又港町には商人の往來、商品の賣買が烈しくなつた。

❸ **座の制度**　之等職人商人は、同業者が組合を組織し、人數を定めて之に加入せぬものは其業に從事せしめず、色々の特權を領主から與へられた。此組合を座といふ。（鎌倉の町には綿座・炭座・米座等の七商座と二十程の工座とがあり夫々製造販賣を獨占してゐた。）座は商工業の利益を保證し、競爭を避けさせ、城下町を繁榮にし、之に課稅する事によつて財政上の收入が得られたから、室町時代には幕府・諸大名・寺院などは皆領內の座を保護した。

❹ **交通の狀態**

（1）鎌倉時代の末から建武中興をへて吉野時代に至つては、戰亂絕間なく、中央政府の威力が衰へた爲に、地方の領主や社寺などが、勝手に關所を設け、港や渡船場等で、關料、渡船料を貪つたから、交通は一層不便になつた。

（2）尊氏は此料金徵收を禁じたが、領主社寺は財源を失ふ事を恐れて命を奉じなかつた。

（3）戰國時代には軍略の必要上殊更に道路をわるくしたが、信長の時代から交通政策に意を用ひ（諸國の新關を廢し、道路を改修し大路小路を分け、六町一里を三十六町一里に改めた）次第に便利になつて來た。

❺ **都市の發達**

（1）**城下町**　（イ）室町時代から其の末葉の戰國時代には、鎌倉京都が疲弊し、地方大名の有力化するにつれて、地方に都市が發達した。（ロ）中でも周防の山口は大內氏の城下町で、氏が領內に銀鑛をもち、朝鮮・支那と貿易を營んで富强だつたから、公家や職人、商人が移住して一時は全國的に繁榮した。（ハ）戰國時代の小田原は北條氏の城下町で、關東に雄飛した名族だつたから西國・北國に至る迄多くの商工業者が集まり、眼覺しい繁華を示した。其他安土（信長）甲府（信玄）岡崎・濱松（家康）等も城下町として榮えた。（ニ）秀吉の開いた大阪、家康の開いた江戶の如き、近世史上の二大都市として並立つものである。

（2）**商工業都市**　堺は瀨戶內海の要港で內外の船舶が集り、富裕となつて遂に特別自治制を施いて市民自ら市政を運用し、暫豪をほり、軍隊を養ひ、大名寺院より獨立した都市をなした。兵庫は中國筋の良港で博多・坊の津・平戶・長崎・府內などは外國貿易で、大津長濱などは內國商業で發達した。

考察問題

1 **室町時代の文化の特色**

① **上流文化の下降**

（1）幕府が鎌倉から京都に移つた結果、武士が公家化し、貴族の生活の文化が武人庶民の中でも少數乍ら學ばれるやうになつた。

（2）殊に應仁の亂後公家が地方に流浪して上流文化が地方化する一方、一般人民の勢力が擡頭し、文化の

上下・都鄙の區別がだん〳〵少くなつた。

② **下流文化の上昇**　① と對稱的現象で、民間に發達して卑俗なものと卑しめられてゐた文化、例へば猿樂、連歌等が發達して、武士は勿論公家にまで流行した。

③ **元・明文化の影響**　五山文學や墨繪の流行、朱子學の研究などに於て元・明文化の影響が著しかつた。

④ **風流な生活**　義滿・義政などの榮華に耽つた事が一般に影響し、優雅な公家風と淡泊な禪家の風が武家に取入れられ、戰亂の間に於て尙風流な生活が行はれた。

⑤ **文化の混在**　前述の上流文化の下降、下流文化の上昇、外來文化、その何れもがまだ融合する迄に至らず、混在の狀態であつた。

2 武家階級と室町時代

① **武家發達の結論時代**　我國に莊園の出來た頃から室町時代迄の武家階級は、凡そ四百年程の間に非常な發達をとげ、社會の中心勢力になつた。保元の亂時分は、公家の勢力次第にふるはず、承久の亂や吉野朝をへる間の對立から平家をへて源氏が天下をとつた頃には、公家の勢力次第に政治的にも優勝的な地位を得、に勢力のもりかへしもきかず、公家は殆ど實力がなくなり、武家が經濟的にも政治的にも優勝的な地位を得、自由な境遇になつて來た。此點から見ると、平氏時代は**武家發達の序論**で、源氏北條氏の時代は**本論**、足利氏の時代は**結論**の時期といつてよい。

② **武家中心文化の過渡期**　なる程、武家は權力に於て我國の中心にはなつたものゝ、文化の方面から見ると貴族中心の宮廷文化には及ばなかつた。何しろ武家の發達の中心は東國の田舍で、性質上農村土着の農業經營者だつた初期から、**鎌倉時代**に進んでは貴族文化を排斥して武家としての生活を作らうとした。（武家の遊戯等にも見える）が何といつても其生活は單純、貧弱だつた。所が**室町時代**になると、京都に中心をおいたので村落生活に生ひたつた武家が、都會生活の裡に出來あがつた貴族文化の內容を取入れた生活をする事になる。平氏時代、清盛すつかりいゝ氣持になつて宮廷貴族と化し、滅亡を早めた失敗にかんがみ、頼朝以來武家特有の文化をつくつてゐたので、京都中心の室町時代は武家文化プラス宮廷文化といふ事になる。抑々二つの生活樣式が一つのものにとけこんで、新しい生活樣式が出來る迄には、長い年月がかゝり、其間に兩生活樣式、慣習、思想のちがひなどでゴタ〳〵がおきたり、不安動搖がある筈だ。（之は明治以來西洋文化がはいつて來て七十餘年、和洋兩式の考へ方、服裝、建築、生活風俗などがなか〳〵融合出來ないのを見てもわかる。）**室町時代は武家の發達から見ると結論の時代だけれども、武家式公家式の文化の混在時代といふ點から見て國民文化發達上の過渡期だといふ事になる**

3 鎌倉時代の文化と東山時代の文化

兩時代とも大陸文化の影響を受けて發達したものであるが、其根柢に於ては常に武家生活特有の力强さが流れてゐた。

① **鎌倉時代**　武家は新興勢力であり、鎌倉時代には質朴・剛健・勇壯・果敢の風に富んでゐたが、文化の程度は尙低く、京都文化を取入れて、漸く發達の途に上つたのである。それも幕府の所在地鎌倉が東國の中心として榮え、寺院が建立され、學問開け、商工業が進歩したけれども其他は一般に餘り進まなかつた。

② **室町—東山時代**　然るに室町時代には幕府が京都にあり、武家は公家と接してゐたから其の文化を多分に取入れて、學問・文學・藝術等が大いに進み、遂に東山時代に見る如き高度文化を發達せしめるに至つた。

③ **文化の地方化**　此文化は應仁文明の大亂によつて京都が荒廢し、公家衆が諸雄の保護を求めて地方に下るに伴ひ、多くの城下町に移植され、全國に普及されるやうになつた。

4 東山時代の文化の後世に及ぼせる影響

東山時代の文化は禪宗趣味を基調となし、淡泊幽玄の趣を備へ、格調の高いものであり、後世の文化に多大の影響を及ぼした。

① **儒教**　當時禪僧に依つて養はれてゐた朱子學は、安土・桃山時代に藤原惺窩を起たしめ、江戸初期に林羅山を出し、遂に近世に於ける一大學派たらしめた。

② **佛教**　禪宗流行の外眞宗の蓮如が教團の勢力を擴充、法華宗も次第に民間に擴まり、共に現代に於ける教風の根柢を固くした。

③ **文學**　禪僧の詩文は近世漢文學の先驅をなし、連歌は近世の俳諧の道を開き、謠曲・狂言は近世に至つて益々普及し、今日もうたひ、能狂言など高尚な趣味として廣く行はれてゐる。

④ **繪畫**　雪舟が代表する水墨畫、元信の大成した狩野派、光信の新生面を開いた土佐派は、何れも近世に入つて畫界に重きをなし、延いて現代に及んで居る。

⑤ **建築**　書院造は次第に一般民衆の住宅に取入れられてゐる。（床の間、違棚、疊、障子の所謂日本間）

⑥ **趣味**　茶の湯・活花・香道に至つては遍く上下に行はれ、名流巨匠を出し、現代でも必要な修養として、高尚の趣味として重んぜられてゐる。

かくの如く現代文化は、遙かに東山時代に其淵源を求め得るものが少くないのである。

5　室町時代に於て禪宗の美術工藝其他の文化に及ぼせる影響について述べよ（浦和高）

【浦和高校教授講評】　本問は室町時代に流行した禪宗が、當時の美術工藝を始め林泉・茶湯・挿花其他の趣味などに如何に影響したか、其具體的の例を聞きたかつたのであるが、多數の受驗者は單に當代の美術工藝等の文化の概況を述べたるに止まり、問題の核心たる、それ等のものゝ禪宗より受けたる影響について述べたものが少かつたのは遺憾である。之は從來此種文化史に關する問題が、多く「何時代の美術工藝」に就て述べよといふ如き一般的類型的な問題であつた爲に、受驗者の側に深い用意が缺けてゐた結果かと察せられる。更に一歩を進めて言へば歴史の學習は單なる暗記に墮して史實の理解推理に於て缺くる所あつた爲と思はれる。

（下略）左に比較的優良な答案を原文のまゝ採錄する。（文部時報五九四號ノ二による）

原文の儘の優良答案

鎌倉時代の末期、宋から禪宗が我國に輸入せられて、以後の我が生活樣式、文化に大きな影響があつた。生活樣式は著しく、さびた簡素な風を來し、又繪畫に於ては、幽玄なる墨繪が流んになつた、雪舟、狩野元信等の畫家が出たが、その畫風は墨一色のさびたものであつた。又住宅は、書院造りとなつて、家中一面に疊を敷きつめ、玄關・床間等のある、略々現代の樣式になつた。その他に禪宗の傳はりによつて導かれた、茶の湯の法により、幽簡なる茶室が建てられた。足利義政が京都北山に立てた銀閣等は禪宗風の建築をかねたその一例である。又さきに加藤景正、詳ずい五郎太夫等によつて盛んになつた、陶器の製法等により茶器の發達を遂げた。その他に、猿樂等も傳（は）り、又庭園の樣式も特殊な發達を遂げたが、此れらの内容は、何れも淋しさのある、さびた、幽玄の味を有してゐた。總じて、あらゆるものが幽簡の風になつたのは、禪宗の影響である。

優良答案の中原文のまゝのは之が始めである。所與の問題に對する答案の纒め方、史實の當否（禪宗の渡來は鎌倉時代が泰時の頃）（鎌倉時代道元が泰時の頃）脱落の有無、誤字などを注意して見て批判を試み給へ。又句點のうち方、行のかへ方等も。しかし、講評にもある通り、「禪宗の影響」には皆相當、虚をつかれてまゐつた樣だし、試驗場の心理もある。此程度の答案が「比較的優良」であるといふのは、實戰に臨まうとする諸君に大いに參考にならうと思ふ。

① **學問上**　鎌倉幕府の末期以來戰亂相つぎ、學問衰微の中で、鎌倉及京都の五山の禪僧は、學問の中心となつて、後代に之を傳へた。特に臨濟派の義堂・絕海などは漢詩・漢文に長じ、又儒學の力もあつた。中には支那に渡つて宋代儒學を傳へたものがあり、之が德川時代に全盛を極めた宋の儒學―宋學の因をなした。

② **政治・外交上**　足利氏は政治外交の計畫はいつも僧侶の手によつた。尊氏が夢窓國師を尊信して天龍寺建立、其の爲の天龍寺船による貿易、義滿・義持の時代の義堂・絕海など、皆政治上の顧問をやり外交上の事務をとつた。

7 足利時代の特異性

【狙ひ所】　尨大なボーツとした問題だが、大體、政治、經濟、外交、文化等の特色に分けて見られるのを、一くるめに、相關聯して大づかみに見た特異性を捉へる事が眼目である。(二五一頁參照)

全般的特異性　足利氏の世は、尊氏が恣に幕府を開いてから義昭が信長の爲に將軍職を廢せられる迄、二百四十餘年の間、眞に平和といふべき期間は義滿の後半期と義持の前半期を合して三十年程だつた。といふのは、尊氏が天下をとるや、諸大名が多くの土地と人民とを私有しようといふ心あるに乘じ、巨賞・重賜を以て豪傑の心を釣つたので、大名の心は水の低きにつく如く足利氏にむかひ、天下一統が易々と出來たが、之が却つて足利氏の事業速かに成り乍ら曇亂の絕えなかつた所以だつた。此時代の特異性は次の五つである。

(1) **朝廷の式微**　鎌倉時代は皇室に尙多くの御料地があり、京都と鎌倉とは互に相侵さぬ所を示したが、足利氏になると、幕府を京都において政治は幕府でやり、皇室の領邑はうばはれ、皇室の財用は幕府の負擔であつたが、幕府の衰微と共に皇室も甚しい式微にあらせられた。

(2) **學藝の容異**　戰爭亂離の間に於て、學問は一般に衰微しながらも、尙その重んずべきを解するもの起り、之と共に工藝が盛で、天正以後文明復興の素因をなした。

(3) **錢貨貿易**　鎌倉時代から貨幣流通の盛となりしあとを受け、支那及朝鮮と交通を開いて錢貨を得ようとした。倭寇の如きも貨幣金銀を得ようとする手段であつた。

(4) **特許商業**　今日とちがつて、商業は座といふ特許的なるものであつた。政府は之によつて一定の收入を得、商人は競爭を制限し得た。

(5) **西洋人の來航**　足利末期に於てポルトガル、イスパニア人が九州に來り、日本を近世化する端緒を開いた。

重要個別問題

1 蓮如上人（兼壽）

親鸞九世の孫に當り、若い時眞宗隆興の志を立て、近畿・東海・北陸等を布敎し、越前に道場を設けて多くの信徒を得た。後萬難を排して山城に本願寺を創建し、淨土眞宗中興の業をなした。上人は人を引きつける力があり、話も上手で、平易な文章（片假名）がうまく、八十五歲迄、五十餘年間の各地布敎により、佛の道を說いた。

2 左の人々と事項との關係深きものの番號を記して之を結びつけよ

(1) 佛　敎	古法眼	(6) 狩野派	義　政
(2) 徒然草	義　堂	(7) 兆殿司	後藤祐乘
(3) 製　陶	雲谷派	(8) 五山文學	祥瑞五郎太夫
(4) 連　歌	吉田兼好	(9) 墨　繪	宗　祇
(5) 金　工	疎　石	(10) 東山殿	佛　畫

第十章　室町時代に於ける社會的革新

第一　室町幕府の失政—應仁の亂

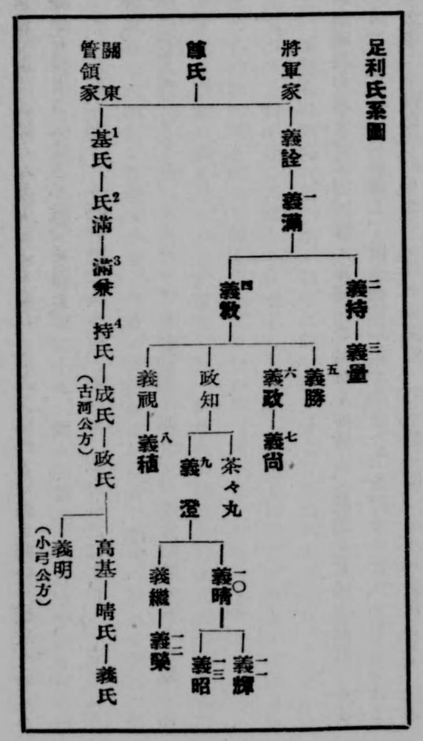
一、關東管領と幕府との關係

❶ **關東管領設置の理由**　尊氏は鎌倉の重要性を認めて幕府をこゝに開く考だつたが、吉野朝廷に牽制されて京都に置く事となり、爲に子基氏を關東管領として鎌倉に居らしめ、上杉氏を執事として之を輔佐せしめた。

❷ **勢力の强大**　其爲管領家は强勢となり、關東十ヶ國の外奥羽地方をも支配し、將軍に倣つて自ら鎌倉公方と稱し、執事上杉氏を管領と呼ばせた。滿兼に至つては將軍たらんと野心を起し、大内義弘と謀つて兵をあげたが、義弘敗死の爲、義滿と和した。

❸ **滅亡—永享の亂**—永享十一年

（1）**原因**　幕府では、將軍義滿から義教をへて義量（カツ）が將軍となつたが、世嗣を得ずして早世したので、義持の弟義教（曾義圓の還俗の名）が職をついだ所、さきに將軍職を望んで許されなかつた關東管領持氏は大いに憤り、義持に反抗してやまなかつた。



（2）**發端**　執事上杉憲實は屢々諫言してもきかれぬのみか、却て殺害される虞れがあつたので、やむなく急を將軍義教に訴へた。

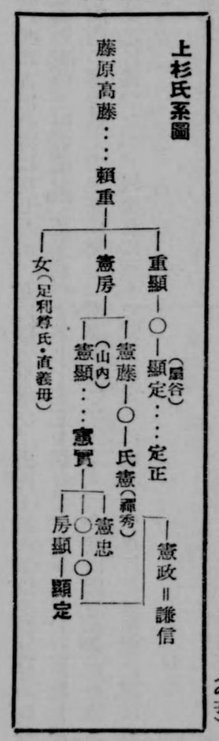
（3）**結果**　そこで義教怒つて持氏追討の勅を受け、憲實を助けて持氏をうたせたから、持氏戰敗自殺、時に永享十一年。關東管領家は四代九十一年で滅び、實權は上杉氏に歸した。

二、永享の亂後の關東の形勢

❶ **古河公方の出現**　永享の亂後關東管領はおかれず、一時上杉氏が支配したが、勢力弱まり、爲に幕府に乞うて持氏の子成氏を關東管領にし、憲實の子憲忠が執事となつた。然るに成氏は憲忠を父の仇として殺害したので、上杉氏は兵を發して成氏と戰ひ、成氏破れて下總の古河に移つた。そこで成氏を古河公方といふ。

❷ **堀越公方の迎立**　上杉氏の事へた成氏が敵對して古河に走つたので、上杉氏は對立上、時の將軍義政（義教の子）の弟政知を迎へて伊豆の堀越に居らしめた。即ち堀越公方である。於茲、兩公方の對立となり、各將士も何れかに屬して爭つた。

❸ **兩上杉氏の對立**　（1）上



杉氏は山内・扇谷兩家に分れ、共に古河公方に抗したが、互に權力を爭ひ、山内上杉は家臣長尾景仲の死後衰へ、（2）扇谷上杉には定正の家臣太田道灌（持資）が文武の才あり、定正を輔けて主家を再興、江戸城を築き古河に備へて強勢。（3）山内の顯定嫉んで定正に讒し、道灌を殺させ、（4）今度は顯定が定正を襲ふと、定正は古河の成氏と結んで之に當つたが、以後互に爭うて關東は大いに亂れ、後遂に北條早雲に滅ぼされる事になる。

三、嘉吉の亂―（嘉吉元年）―（東高師東外語）

❶ 義教の苛酷　永享の亂に關東管領足利持氏を滅ぼした將軍義教は果斷の人で、幕府の頽勢回復を志し、權臣の跋扈を抑へて容赦しなかつたので、近臣の間に反感が濃厚となつた。

❷ 赤松滿祐の叛　則村の曾孫赤松滿祐は同族貞村に將軍の寵篤く、己が領地が取上げられて貞村に與へられんとしたので、平生憎まれてゐた滿祐は遂に義教を我が邸に招いて弑し、白旗城に走つた。

❸ 山名持豐平定　將軍職は義教の子義勝がつぎ、山名持豐（後に宗全）をやつて滿祐を滅ぼさせた。

四、應仁の亂

❶ 原因

（1）遠因―義政の失政

a **權臣の跋扈**　（1）將軍義勝の次の將軍は年少（八歳）な義政で、（2）管領畠山持國・細川勝元交互に威權を弄し、山名持豐（宗全）も盛であつたので、幕府は衰微した。

b **義政の暴政**　（1）義政長じてより政治を怠り、奢侈にふけつて財政窮乏。（2）時恰も天災・飢饉・惡疫流行して正に非常時にも拘はらず、（3）義政盛に土木を起して重稅を課し、德政令を頻發し、暴政を行つた。

（2）近因―相續爭と勢力爭

a **將軍家の相續爭**　義政に嗣子がなくて、弟義視を後嗣とし細川勝元を後見にした所、後に、義尙が生れたので、母日野富子（義政の寵姫）は義尙を將軍に立てたくなり、山名宗全に依頼した。そこで義視は將軍たり得ぬ爲、義政と不和になる筈。

b **畠山・斯波兩家の相續爭**

（1）畠山持國、亦子なく甥政長を養子にした後、義就（ナリ）が生れたので政長を出して了つた。政長は勝元に頼り、義就は宗全に就く。

（2）斯波義健（タケ）子なくして死し、家臣は一族より義敏を迎へたが、讒言で退けられ、義廉（カド）が世嗣と定められた。義敏一旦周防の大内氏を頼り、京に還つて義廉と家督を爭ひ、義敏は勝元に、義廉は宗全に頼つた。

c **勝元・宗全の勢力爭**

（1）三管領の畠山・細川・山名の中、畠山氏最も勢力があつた爲、之と對抗上、勝元は山名宗全の娘を妻にしたが、畠山持國が勢力を失ふと、宗全・勝元卽ち舅婿で勢力を爭つた。

（2）對立と幕府の無力

（イ）細川黨　勝元は義視を戴き、畠山政長、斯波義敏と合同し、

三管領家系圖

- **細川氏**　義季……（三代略）―頼之
　　―頼元……（二代略）**勝元**
- **畠山氏**　義純……（六代略）滿家―持國―**義就**
　　―□―**政長**
- **斯波氏**　家氏……（七代略）**義健**―**義廉**
　　―**義敏**

（ロ）山名黨　宗全は義尙を輔け、畠山義就、斯波義廉と結合した。幕府は無力で取締不能。

❷ 戰況―應仁元年（一四六七）より文明九年（一四七七）まで十年間

（1）後土御門天皇の應仁元年（一四六七）畠山義就が先づ山名宗全の援助で政長を京都の御靈林（ゴリヤウバヤシ）に破つたのが戰端で、（2）畠山政長を助けた勝元は幕府の東に陣し（兵十六萬）山名宗全は其西に陣し（兵十一萬）東西對抗、互に勝敗あり、（3）文明五年、勝元・宗全相次で病歿し、將軍職は義政から義尙に讓つたが、戰は續いた。併し諸將次第に戰爭にあき、各々兵を率ゐて歸國したから、文明九年さすがの大亂も終をつげた。

❸ 應仁の亂の結果（和歌山高師・驛經）

（1）京都の荒廢　京都は此大亂で兵火にかゝり、內裏、幕府を初め、社寺・邸宅・貴重なる寶物・器物・古記錄等が灰燼となつた。

（2）中央勢力の衰微　（イ）朝廷の式微　鳥有に歸した內裏は修理を加へるものなく、御儀式すたれ、朝廷の御料は豪族の爲に奪はれ、公家は地方豪族に寄寓するものが多くなつた。（ロ）幕府の衰微　幕府の勢力全くなくなり、政治は權臣によつて左右され、幕府衰亡の兆は旣に明かとなつた。

（3）地方勢力の勃興　應仁の亂の結果、全國的に群雄割據、弱肉强食の戰國時代となり、下剋上の傾向は愈々盛となり、武士の道德はすたれ、國史上の一大轉機となつた。群雄の割據は地方の都市の勃興となり、京の公家町人の地方流浪は京文化の地方傳播となり、全體として地方勢力の勃興となつて來た。

考察問題

1 保元の亂と應仁の亂との比較

① **類似點**　便宜上保元の亂を甲、應仁の亂を乙とする。

（1）相續爭　甲は皇室の皇位繼承問題と攝關藤原家の勢力爭が結びついて起り、乙は將軍家と管領家の相續爭が原因となつて起つてゐる。

（2）甲、乙、兩亂共に京都が戰場だつた。

（3）新興勢力の擡頭　甲に於ては公家の勢力に代つて武家擡頭して新興勢力となり、乙に於ては將軍家、管領家等上流武家階級沒落して下級武士や庶民階級の勢力を得るはじめとなつた。卽何れも新舊勢力の交代期をなした。

（4）亂後の亂世　甲に於ては以後源平の爭覇戰となり、乙にあつては其の後戰國群雄割據の世となつた。

（5）道德頹廢　兩亂共に道德地に墮ちた時勢だつたから、骨肉の間の爭が行はれた。

② **差異點**

（1）甲に於ては公家の爭が主で武士は其手段に使はれたのであつたが、乙の方は旣に公家の勢力全く衰へて武家相互の爭であつた。

（2）甲に於ては、旣に成人せられた天皇上皇、攝關家の公家の爭であつたが、乙に於ては、子のない爲に家督を定めた後、圖らずも生れた實子に相續せしめようといふ事が動機になつてゐた。（將軍義政・畠山持國）

（3）甲に於ては戰期短く小規模で、結末が骨肉相剋、戰の終期も明瞭であつたが、乙に於ては戰期永く、大規模な戰陣だつたが勝敗明かならずして終つた。

2 室町幕府が勢力を持續し得ざりし理由

【狙ひ所】 鎌倉幕府に於ける如き統一精神もなく、德川幕府の如き水も洩らさぬ組織もない室町幕府、それが永續せぬのは當然であるが、さて何故かといふ事になると、相當興味のあるいゝ問題である。先づ統一が

あつたかどうか。牽制される勢力はなかつたか、將軍がしつかりして大名等を統御したり、善く民政を見たか、等々を考へて見ると、なるほどゝわからう。かういふ點がつまり狙ひ所。

(1) **幕府創業方針の誤**　建武中興の失政で武士が之を厭うた時、尊氏は餘りに巨賞、重賜を以て豪族の心を釣つた爲に、部下重臣の權力が强すぎた。爲に統一に困難を來した。

(2) **吉野朝廷の牽制**　吉野朝五十七年間は、官軍の數少きに似ず勤皇の將士の誠忠により、足利氏の勢力を牽制した爲に、足利幕府としては豪族の心を釣る必要もあり、都を京都におく必要もあり、東國鎭撫の爲に鎌倉に關東管領を置かざるを得なくなり、之亦統一に骨が折れた。

(3) **將軍の無力と遊情**　尊氏以來十五代の二百四十餘年の中、全盛は僅かに義滿の時のみといはれ、山名大内等の諸豪を抑へたが、後は驕奢にふけり、義教は苛酷・驕慢で怨を天下に買ひ、義政は應仁の大亂を他所に、奢侈遊樂に終始し、側室より政令が出る有樣で、其勢力の及ぶ所も近畿を越えず、諸國は群雄の勢力擴張にまかせる次第であつた。

(4) **暴政と民苦**　諸豪族を統御する力のない所へ、華奢の生活の爲、財政窮乏を不當なる徵稅で補ひ、又天災疫病に苦しむ人民に施す所なく、屢々德政令を發して公私一切の貸借消滅をなした。

かくの如く、設立の時に於てしまりがなく、中心に力なく、諸豪族の勝手なふるまひにまかせ、民政を顧みずして却て之に虐政を以て苦しめるに至つては、到底其勢力を永續せしめ得るものではなかつた。

3 德政と其影響（三高・四高・廣島高・海經・長崎高商）中世の德政令につきて（昭五高等試驗司法科）

① **德政の本義**　本來德政は文字通り道德的政治卽ち仁政の意味で、天災凶年の時などに田租、課役を免除し、大赦（罪人の罪を許し又減刑する）を行ひ、貧民や老疲病者等を救濟する善政で、奈良時代の聖武天皇の頃から、北條泰時の頃まで行はれたものである。

② **鎌倉末期の德政**　弘安の役後武士の破產窮迫するもの頻發し、領地の賣買、質入をなし、將軍や守護の課役を怠り、訴訟や紛爭が絕えなかつたので、武士の窮乏救濟の爲に法令を發し、武士の領地の賣買質入は二十年に滿たぬものは元の所有者（賣の主）に返す事、鎌倉の家人でないものや、平民が武士から買つたものは年限をとはず元の所有者に返す事にした。併しどこまでも鎌倉幕府の家人の借金整理にあつたので、目的を達した後は、此法令は空文となつたから、有害な影響を後に及ぼさなかつた。

③ **足利幕府の德政**

(1) 義政政代の德政は、將軍の過度の奢侈の爲に財政窮乏して負債が拂へぬ爲、公私の貸借を帳消しする法令である。

(2) 之を繰返す中、無賴の徒で借金に苦しむ者が相結んで、德政令の發布を幕府に强要する事となり、所謂德政一揆を起して政府に迫り、政府も之を鎭撫する力なくして發令する有樣だつた。義政の代には十三回も發せられる始末であつた。

(3) **德政の結果**　德政令が發布になると、貸した物は返さずにすむし借りたものは已の所有に歸するので

(イ) 貸す人がなくなり、融通を絕つ事になる。そこで、(ロ) 良民は貯蓄心を失ひ、細民は亂を思ふの心を起す。おまけに (ハ) 暴動が起つて、當時の金融機關たる質屋にして酒屋をかねた店（之を土倉といふ）にあばれこみ、證券を奪ひ、劫掠を行ふ。(ニ) 其外、賭博、追剝（オヒハギ）等が橫行して全く暗黑時代となつた。

重要個別問題

（德政挿話—文明年間、京都の旅館主人、近く德政が行はれるを豫知し、宿泊の武士を欺いて、刀劍と旅裝を借用した所、果して數日後に德政が發布され、武士が貸した刀劍旅裝を何といつても主人が返さぬ。そこで武士「拙者の貸したものは、規則だから返さんでいゝ。では拙者は貴殿からこの旅館を借りて泊つてゐるのだ。今德政令が出た以上、之は足下に返す必要はない。此旅館は拙者のものだ、足下はすぐに退去せねばならん。」兩人論爭して奉行所に訴へたが、旅館の主人は遂に放逐されたといふ。）

1 上杉憲實（東高師・京城大穆）

（1）山内上杉家四代の主で、文武の才あり士民悦服。（2）關東管領足利持氏の執事の時、かねて將軍たらんと希望した持氏が、僧義圓還俗して將軍義教となりしに失望し、幕命に反抗したので、憲實は屢々之を諫めた所、却て聽かずして己を殺さうとするので、急を幕府に告げ、遂に永享の亂となり、義教の追討の兵と共に持氏を討つた。（3）持氏自殺の後、程なく職を弟憲忠に讓つて出家した。（4）憲實は學問を好み、足利學校を再興して和漢の書籍を集め、又金澤文庫を修理する等、文敎上にも功が多かつた。

2 義政の課した諸税

（1）**土倉役錢**　質屋・酒屋に課するもの。質屋は、同時に酒屋を兼ねた當時の金融機關だつたので、貸借の十分の一を徵した。

（2）**段錢**　臨時の税金で、全國の百姓の段別に課し、内裏造營、神社造營など重大な事ある時に徵する。

（3）**棟別錢**（ムネワケセン）　棟は一戸毎の意味で、今日の戸數割の如きもの、但し重大な事ある時の臨時税である。

之等の租税の外、守護からの貢納がある筈であるが、支配の權力が幕府に十分にない爲に、それが出來ず段錢、棟別錢を出すものも少くなり、京都附近からのみ徵收したから此附近の住民は重税に苦しんだ。

第二　新興武家社會の發生―戰國時代

一、戰國時代の特質

❶ **無統一の社會**　應仁の亂以後幕威全く地に墜ち、全國的權力の中心もなくなり、幕府の諸將は幕命をきかずして領地に蟠據し、地方の守護は各地に割據して恣な政治をやり、兵を蓄へ、他領を侵略して勢力を張らうとし、應仁の亂後凡そ百年の間は所謂戰國時代といひ、國をあげて無政府狀態だつた。

❷ **實力中心**　群雄各地に勢力を競ふ時、實力ある者はよく勝を占める。皇室は式微し、舊勢力たる鎌倉から室町時代にかけての名門舊家は殆ど衰亡し、各地の豪族の間にも盛衰甚しく、實力あれば家系や身分のない者でも天下に雄飛し得る狀勢であつた。

❸ **主從關係の變化**

（1）**主從關係から傭兵へ**　武家譜代主從の關係が衰へて傭兵の性質が加はつて來た。之れは、戰爭打續き多くの兵士を必要とするから、代々血統の續いた家人だけでは不足になつた爲である。

（2）**武士の俸祿生活化**　郎黨家人などに與へられる報償が、從來の如き土地よりも寧ろ土地の生産物たる米を以てする傾向が發達した。卽ち多くの傭兵に對しては、土地の如き永久物件を與へる事は不便でもあり、土地爭奪のはげしい折だから、物品支給が便利で、米を以て報償とする事になり、鼓に武士は土地所有權からはなれて、俸祿生活だけのものが出來て來る。

❹ **土地に對する權利の變化**　土地の直接所有權が武家より農民の手に移り、武家は支配權のみを有する傾向が發達し、從つて大土地支配權を得る爲に、激烈なる領土爭奪戰を演ずる事になつた。之は小土地を所有する武士の生活から、大土地の支配權をもつやうに變化した結果、一面又部下の多くの武士に俸祿米を給する必要から、實力ある者は多くの土地の支配權を獲得せんとして、他人の權利を侵して土地支配權擴張をやるために征服を行ふ事になる。

❺ **前期は分裂・後期は統一**　應仁の亂から天文の末年迄の八十年間は全く戰亂攻伐の時代、分裂の時代であつたが、後の廿年間は其間に新興勢力中の實力强大なる者が、弱小なるものを併呑して行く統一時代にな

る。其第一の覇者は實に織田信長であつた。

二、足利氏の末路

❶ 細川氏の專横　應仁の亂の一因をなした義尙が將軍になつたのは八歳の時で、學問を好み、長じて幕政回復を圖り、尙武善政を志したが夭折したので、義視の子義稙（タネ）が將軍となり、勝元の子政元が管領となつて勢力を振ひ、畠山政長を殺し、義稙を排斥して周防に迫ひ、義澄（堀越公方政知の子）を迎へて將軍にした。

❷ 三好氏の實權把握　其後細川高國（政元の養子）は義澄を退けて、周防から再び將軍となつた義稙を追ひ、義晴（義澄の子）を將軍とした。併し間もなく衰へた細川氏に代つて勢を得た細川氏の家臣三好長慶は、義晴の子義輝を將軍にした。

❸ 松永氏の專權　やがて三好氏の臣松永久秀、權を握つて威を弄し、將軍義輝を弑して義榮（ヒデ）を擁立した。

❹ 信長の援助　松永久秀が義輝を弑するや、弟義昭都をのがれて諸國流浪の後、織田信長に助けられて京都に還り將軍となつた。（後、信長の隆運を妬み上杉、武田等と通じて信長を除かうとし、遂に京都を追はれて滅亡、時に天正元年（一三三））

三、各地方の群雄

❶ 關東地方の形勢

A 關東の混亂　（1）兩公方の對立　關東地方では古河、堀越の兩公方對立し、（2）上杉氏分裂　執事の上杉氏も山内、扇谷の兩家に分れて互に爭つたので、共に衰へた。（二三一頁參照）

B 北條氏の興起

（1）**北條早雲**　關東地方の混亂に乘じ、伊勢新九郎長氏は堀越御所の亂（延德三年）に乘じ、政知の子茶々丸を殺し、伊豆を取つて韮山に據り、次で扇谷上杉の臣大森藤頼（イヨリ）を伴り亡ぼして小田原城を占め、姓を北條と改め、入道して早雲と號し、次第に領地を擴張して伊豆相模を領した。

（2）**北條氏綱**　早雲の子氏綱、雄略に富み、武藏に上杉氏を攻め、安房の里見氏を鴻の臺に破り、里見氏の擁立した小弓公方義明を滅ぼした。

（3）**北條氏康**　氏綱の子氏康は古河公方と兩上杉氏の聯合軍を川越城に破り、次で扇谷上杉氏を滅ぼし、更に上野に山内上杉氏を攻めて上杉憲政を越後に追ひ、古河公方晴氏を滅ぼして關東の大部を收めた。

（4）**小田原の繁盛**　北條氏の居城小田原は關東の政治と文化の中心となり、氏康につぐ氏政をへて氏直が秀吉に滅ぼされる迄凡そ九十年間繁盛を極めた。

❷ 中部地方の形勢

A 上杉謙信

（1）**長尾氏の强盛**　越後の長尾氏は山内上杉氏の家老として勢力あり、景虎出でゝ其名が北國に響いた。

（2）**上杉氏をつぐ**　時しも上杉憲政が北條氏康に逐はれて、保護を景虎に求めたので、景虎は管領職と上杉の苗氏とを憲政から讓られると共に、上杉輝虎と稱し、入道して謙信と號し、やがて北國を經略した上、屢々關東に攻入つて北條氏康と戰つた。

B 武田信玄

（1）武田氏は新羅三郎義光の裔で甲斐の守護であつたが、信虎の時此國を領有し、子晴信（父が次子を愛したので長子たる晴信は父を追つた）自立し、入道して信玄と號した。信玄心を民政に用ひ、富國强兵、威を隣國に張つた。

(2) 川中島の戰　信玄は信濃の村上義淸を攻め、義淸が上杉輝虎に賴つたので、謙信、信玄が川中島に戰ふ事數次、勝敗決せずして終つた。

❸ 東海道地方の形勢

A 今川義元　駿河の今川氏は遠江を併せて勢力あり、義元の時松平氏（後の德川氏）の微力に乘じて三河を併合した。義元常に勤皇の事を說かれ、皇室の御料を奉獻した事があり、天下を統一して叡慮を安じ奉らうとの大望を抱き、上洛を望んでゐた。

B 織田氏の興起

(1) 織田氏の自立　織田氏は管領斯波氏の家臣だつたが、信秀の頃自立して今川氏と對抗する事となる。

(2) 桶挾間の戰　正親町天皇の御代、今川義元は兵を尾張に入れ、信秀の子信長之を桶挾間に破つた。

❹ 近畿地方の形勢

A 齋藤氏　土岐氏の家臣で、主家衰微に乘じ、秀龍が土岐氏を滅ぼして美濃を領した。

B 淺井氏　氏は京極氏の家臣だつたが、之に代つて獨立し、六角氏を追ひ、近江を領した。

C 朝倉氏　管領斯波氏の家臣で、義景出づるに及んで、獨立して越前を領有した。

D 一向一揆　眞宗（一向宗）では蓮如上人が出て布敎に力め、又、蓮如上人の子光兼の勤皇によつて、信者が多くなり、門徒の勢力が强くなつた。當時寺院は寺門、寺領の保護を名として僧兵を養つたから、遂には兵器を以て諸國の群雄と爭つた。之を一向一揆といひ、北陸の富樫氏の如きは之が爲に滅んだ。

❺ 中國地方の形勢

A 尼子氏　京極氏の一族で、出雲に起り、山名氏の衰微分裂に乘じて其舊領を併せ、山陽道の大半を從へた。山陽道の東部には赤松氏の陪臣宇喜多氏が、主家の衰微に乘じて備前に起つて雄視してゐた。

B 毛利氏

(1) **大內氏の興亡**　義興の時に大いに榮え、領地は山陰・山陽の西部を占め、明や朝鮮の貿易の利を占め、富强を以て鳴らしたが、子の義隆が和歌、點茶等の遊樂で政治を怠つたので、臣陶晴賢（スエハルカタ）が之を諫めた所、却つて晴賢を殺さうとしたので、晴賢は遂に大內氏を弑した。

(2) **毛利氏の興起**—嚴島の義戰　陶晴賢が主君大內義隆を弑した爲に、其部將毛利元就は報復の軍を起し、晴賢と嚴島に戰ひ、之を敗つてから、勢力は大內氏にかはり、尼子氏をも滅ぼして中國十餘州を領するに至つた。

❻ 中央より遠い諸地方の形勢

A 四國　長曾我部氏　四國では阿波・讃岐を領してゐた管領細川氏が、室町時代の末に勢力を失ひ、臣三好氏から其家臣松永氏へと勢力が下降し、やがて土佐に興つた長曾我部元親によつて滅ぼされ、元親は四國の大部を掌握するに至つた。

B 九　州

(1) **大友義鎭（ヨシシゲ）—宗麟**　豐後を領有し、支那人葡萄牙人と貿易して富强を極めた。

(2) **龍造寺隆信**　元少貳氏の家臣、主家の沒落後起つて肥前から筑前筑後、壹岐對馬を領したが、島津義久に滅ぼされた。

(3) **島津氏の繁榮**　島津氏は忠久以來薩摩に勢力を得たが、義久は九州の南半を占めて勢力强大。

C 奧　羽

伊達政宗　奧羽地方では伊達（ダテ）（米沢）葦名（アシナ）（會津）最上（モガミ）（山形）南部（ナンブ）（南部）秋田（アキタ）（秋田）等の諸氏相次で興り、勢を爭つ

たが、伊達政宗出でゝ最も強勢。しかし遠隔の爲に中央の影響はなかつた。

四、皇室の御式微—戰國の亂世に現はされた我國體の精華

❶ 朝廷の御式微　應仁の亂後幕府の勢力衰へ、地方豪族で皇室の御料地を侵すものがあり、爲に皇室の收入が絶え、其日の供御にも事缺き給ふ程で、皇居は荒れ果て、後土御門天皇崩御の後、御靈柩が黑部の御所に安置される事四十三日に及び、後柏原天皇は御踐祚から二十二年後、後奈良天皇は十年後に御即位の大禮を行はせられた程の御有樣で、其式微の御樣子は誠におそれおほい次第であつた。

❷ 皇室の御仁慈

（1）**御尊嚴の維持**　かほどの御式微に於て、金品奉獻者に對しても官位をみだりにし給はず、常に學德を修め、皇室尊嚴の御維持につとめ給うた。

（2）**後奈良天皇の御仁慈**　此の御代に天變地異があり、飢饉・疫病が全國にわたつた時、御親ら經文を寫し、御宸筆の般若心經（ハンニヤシンギヤウ）を日本全國の一の宮に納められたほどである。

❸ 尊皇精神の發露

（1）**公家其他の勤皇**　（イ）三條西實隆は後土御門天皇以來三朝に歷事し、供御の調達に苦心し、各地を遍歷して有志の豪族に獻金を促し、朝儀の遂行に努力した。（ロ）山科言繼（ヤマシナトキツグ）は、正親町天皇に仕へ、老軀を提げ、地方豪族を訪うて、御用度の進獻、御領の復活に盡力せしめた。（ハ）宇治の慶光院清順尼は神宮の修復につき、後奈良天皇の勅許を得て諸豪族から費用を募つて神宮を造營し奉つた。

皇室御系圖（其十二）　一八八頁より二九〇頁に續く

一〇二 後花園—一〇三 後土御門—一〇四 後柏原—一〇五 後奈良—一〇六 正親町—〇—一〇七 後陽成

（2）皇室で御大禮、御大葬の御費用がなくて、之を執り行はせられぬ時、大內義隆・本願寺光兼・六角高賴・毛利元就等が獻金した爲、御儀式を行はせられた。又織田信秀は皇居の御修理を營み奉つた。

❹ 國體の精華　御式微の皇室に於て尙御仁慈をたれ給ふ事は、我皇室を措いて他に比を見ぬところであり、弱肉强食の戰國混亂の時代に於て、啻に皇室に對する誠意を失はぬのみか、獻金其他に於て勤皇の士が皇室の爲に御盡し申しあげた事は、是れ又外國史にも見る能はざる我國獨特の美風であり、君臣がかゝる非常の場合に於ても君民一體父子の如き關係にある事は、眞に國體の精華といはねばならぬ。

考察問題

1 室町時代の下剋上の思想の起りし原因及其實例をのべよ（廣島師）室町時代の世相（昭一〇高等試驗司法科）

① 下剋上の風

（1）**意義**　下剋上（シタコクジヤウ）の字義は下の者が上の者を剋（シノ）ぐといふ事で、從來の格式傳統を破つて、實力ある者が上の者を倒して之に代つて支配する事をいふ。

（2）**原因**　尊氏の人心收攬策が諸豪族を强勢にし、遂に諸將の叛服を反復せしめ、幕府の威力は義滿の頃一時伸張したが永享嘉吉の亂以後は、將軍も徒らに權臣のあやつる人形の如くなり、實力の强き者は、身分格式の如何をとはず、弱きものをしのぐ時代となつた。啻に中央のみならず、地方の守護も次第に權力を高め、國衙領・莊園を橫領する者も出て、自領內の政治經濟、軍備の實權を掌中に收め、互に攻伐を事とし、主君の衰微に乘じ、倒して之に代るやうになつた。

② 實例

（1）**武士の下剋上**　將軍義稙は管領細川政元に追はれ、細川氏は其家臣三好長慶に其勢力を奪はれ、三好

氏は已が臣松永久秀に勢力を奪取された。

(2) 土民の下剋上—土一揆　身分の階級的固定で秩序が保たれてゐた我國に、身分格式をかまはず、實力ある者が之をしのぐといふ風は、武士から土民にまで及んだ。即ち戰亂と天災地變と幕府の重稅との爲に窮乏の極に達した土民は、幕府に迫つて德政の一揆を起し、土倉・酒屋或は寺院を襲擊して債務を破棄し、掠奪を恣にした。即ち土一揆、一向一揆、德政一揆といはれるものは、皆下剋上の現はれである。

2 室町時代に群雄の割據するに至れる理由

【狙ひ所】 群雄割據については、關東地方から順次各地方に誰が勢力を張つたかを、恰かも地理の地方誌の如く列擧するのが普通である。しかし、えらい豪傑が何故各地方に起つたのか、と聽かれると、さて、と手を胸にあてたくなるだらうが、之は今迄くりかへした中に問題解決の鍵は潛んでゐる。即ち、(1) 思想的には下剋上の思想。(2) 政治的には尊氏の豪族優待、幕府の無力、奢侈、(3) 經濟的には土地支配權の擴大（本章二三九頁）之をまとめればいゝ。只事實のみを暗記してゐると、「理由」と出てまゐつてしまふ。頭をたえず働かせておく必要がある所以である。

3 室町時代の國體觀念

【狙ひ所】 室町時代はいつからいつまでか。其間には、國體觀念の暗黑時代といはれる數々の事例がある一方、皇室の式微にふるひたつ戰國の諸雄があつた。プラスとマイナス兩方が存在する所、しかも將軍義滿から應仁の亂の邊までは、マイナス方面が多く、戰國混亂の時に却つてプラスの方が現はれてゐる。前の方を頭にうかべたばかりだと、「暗黑時代」に力が入り、後の方のみだと、「勤皇の士」のみを書いて平氣でゐる。時代觀念をはつきりしておくと、プラス、マイナス、兩方が書けると思ふ。問題としての狙ひは大抵かういふ所にあるものだ。

① 時代區分　室町時代は後龜山天皇京都還幸の年（元中九年 二〇五二）から足利幕府の滅亡（正親町天皇の天正元年 二二三三）までで、之を室町本期即始より應仁の亂の始（應仁元年）までと、室町末期即戰國時代—室町幕府の滅亡までにわける。

② 室町本期に於ける國體觀念　(1) 吉野朝時代には官軍の純忠至誠で國體觀念は極めて明徵であつたが、足利方は、義よりも利の集團だつたから此の精神なく、所謂南北合一して天下統一するや、(2) 將軍足利義滿は僭越不臣の行多く、出入の行列を上皇に擬し、妻を後小松天皇の國母に准ぜしめて自ら太上天皇たらんとした程であり、又明との國交に於て日本國王の稱號を敢へて用ひなどし、一國の政權を掌るものが、かかる國本精神忘却に陷り、不逞不臣の行をするに對して、(3) 公家は勿論、國民の間にも餘り非難するものゝなかつたのは、國體觀念が薄く、國民精神が衰へてゐた爲である。(4) だから國民の間に統一すべき精神なく、義持・義教をへて義勝・義政の幼主が將軍となり、幕府の勢力が管領から漸次下層の權臣にうつり、應仁の大亂を起すに至つた。

③ 室町末期・戰國時代の國體觀念—要項に止める。

(1) 皇室の式微　戰國時代は京都が戰場、皇居荒廢、御料地横領、幕府衰微と皇室への經濟的支持力なし—皇室財政御困難。公家の流浪—大名寄身（大内・朝倉・今川氏等へ）—皇室の御有樣を豪族が知る。

(2) 皇室の御仁慈と勤皇、三條西實隆、山科言繼の盡力、大内・毛利・北條・朝倉・上杉・大友等の献金。

④ 皇室超然と上洛の理想

戰亂の時代に於ても、皇室は其渦中に居らるゝ事なく、國民生活上朝廷のみが超然たる位置に崇められて居り、戰國諸雄は上洛して天皇を奉ずる事を最上最後の理想としてゐた事が、我國の特殊なる國柄たる事を示すものであり、我國はかゝる時に於ても國體觀念の忘失される事がなかつたわけである。

【註】 西洋では王權が最も盛な時に變革が起り、其結果は王權の縮少となる史實が多く、我國では皇室の式微にある時、必ず忠臣義軍が興つて結果は皇室の御繁榮となる。彼我の國情の差、我國の萬邦無比なる所以を東洋史・西洋史と比較して體得すべきである。

4 戰國時代に於ける皇室と國民との關係を略述して我國體の尊嚴を說明せよ（二高・六高・橫濱高商・山口高商）

【二高教授講評】 共通缺點は、(1) 戰國時代の狀勢を叙述せざりしもの多かりし事、(2) 機械的に事實を羅列して論理的說明を缺くもの多かりし事。（文部時報五九四號ノ二による）

【六高教授講評】 此問題も中學校の國史教科書に詳しく記載されてゐる個所から提出したものであり、且小學校以來反復されてゐる問題であるに拘はらず、結果は全く意想外であつた。殆ど白紙に近い答案すら若干あつた。甚しきは戰國時代を吉野朝時代と混同したり、高山彦九郎や蒲生君平を戰國時代の勤皇家に加へたものすらあつた。要するに試驗委員の感じた所は、例年の事乍ら一般に記述が斷片的で甲乙を混同し、時代の前後を倒錯し、總合的に纏める力の缺けてゐるものが多い事である。（文部時報五九四號ノ二による）

【二高優良答案の要點】 (1) 戰國時代の情勢、

下剋上の風潮盛なりし事。皇室は式微の極に達し給ひし事を叙す。(2) 歷代の天皇の御修養深く御聖德盛なりし事の著例として後奈良天皇（御奈良と書きしもの多し）の御寫經を叙す。(3) 公卿の奔走、著例として三條西實隆、山科言繼の苦衷を叙す。(4) 群雄の尊皇事績、皇室の御大葬禮、御即位禮に對し來りて群雄の中御費用を献上したるものありし事、皇室を奉戴して大統一の實を擧げんとせし事を叙す。(5) 結論　皇室式微の秋に方り、非望を企つるものなく、反つて皇室奉戴思想が勃興せしは皇祖皇宗の「國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ」し結果にして國體の尊嚴此に存す。

總合問題

本問の得點分配

二高	
20點	39
22	3
23	4
24	6
優良成績計	52
0點	16
全體	338

六高	
0	10
10未滿	212
10以上	200
20以上	32
25(滿點)	5
計	459

5 關東に於ける北條氏の興亡について述べよ（六高）

① 關東の形勢

(1) 古河公方（下總）と堀越公方（伊豆）とが對抗したが、其の勢力は漸次衰へてきた。

(2) 山內上杉（上野・伊豆）と扇谷上杉（武藏・相模）の勢力の對抗があつて、關東は四分五裂の狀態であつた。

② 北條氏發展の過程

(1) 北條早雲　(イ) 堀越公方の內紛に乘じてこれを滅ぼす。(ロ) 韮山を根據として伊豆一國を征服。

(ハ) 小田原城を略取して、之を根據地とした。(ニ) 相模一國を平定した。

(2) 北條氏綱　(イ) 江戸城を略取し、(ロ) 小弓公方を擁せる里見氏の勢力を國府臺の戰で破つて武藏を經略した。

(3) 北條氏康　兩上杉及古河公方を滅ぼし關東大半を平定した。

③ 北條氏の民政　早雲・氏綱・氏康は何れも亂世の英雄で、また民政にも心を用ひ、特に氏康の如きは文武兩道に通じ、よく父祖の風をつぎ、士民を愛し民政に勵んだから、關東の士民はよく歸服し、小田原の城下は商家軒を竝べ、東國第一の繁華の都會となり、關西の大內氏の山口と對比した。

④ 北條氏の滅亡　天正十八年豐臣秀吉が小田原城を攻めて中々陷らなかつたが、秀吉の持久戰術の攻圍で、百餘日の後遂に氏直降り、父氏政（氏康の子）自殺し、氏直は高野に追はれた。秀吉の天下の大軍に攻められて百餘日を保ち得たのは、早雲以來五代の間民政に努めて人心を得てゐた爲である。

6 室町時代に於ける山名、細川、大內諸氏の盛衰

① 山名氏　(1) **氏清**　新田氏の一族、父時氏が尊氏に從ひ、一族所領十一ヶ國となり、氏清を六分一殿と稱し、勢を恃んで義滿と不和となり、明德の亂で元中八年義滿に誅せられ、一時衰へた。

（2）**宗全**（持豐）　氏清の甥時熙の子、嘉吉の亂に赤松滿祐を亡ぼし、其舊封を得て家名を再興し、細川勝元と結んで畠山氏に對抗したが、畠山氏衰ふるに及んで細川氏と對立し、遂に應仁の大亂に於ける西軍の總帥となつたが、亂の半に歿してから山名氏は衰へた。

持豐六世の孫豐國は、鳥取城主として毛利氏に屬したが天正九年秀吉に降つた。

②**細川氏**　（1）**頼之**　足利義康八世の孫で、義滿を助けて賢明の聞え高く、所謂南北朝合一を獻策し、幕府の職制を整へ山名氏清の亂を鎭めた功臣である。

（2）**勝元**　頼之五世の孫で、屢々管領の要職を占めた。初め畠山持國と權勢を爭ひ山名宗全と結んだが、畠山氏が衰へると、山名氏と對抗して應仁の亂に東軍の總帥となり、�亂の半に病歿。

（3）**政元**　勝元の子、應仁の亂後、勢力あり、時の將軍義稙を周防に追ひ、堀越公方政知の子義澄を將軍にして專横。政元子なくして家督の爭起り、養子澄之が政元を殺し、別の養子澄元が澄之を殺した。

（4）**高國**　頼之七世の孫で政元の養子となり、政元に追はれて大内氏に頼つた義稙が、大内氏の力で再び將軍職に復したのを、高國が追つて義澄の子義晴を將軍に迎へて專横を極めたが、後三好長慶に勢力を得られて衰へた。

③**大内氏**（山口高）（1）**義弘**　百濟琳聖太子よりの出で、吉野朝時代に足利氏に與して武功をたて、元中九年義滿の命をうけて吉野朝廷に使し、兩朝合一に成功した。義弘は周防、長門、和泉、堺等の諸國を領し、權勢頗る强大、功を誇つて、遂に關東管領足利滿兼と結び、堺に兵をあげたが義滿に滅ぼされた。之を應永の亂といふ。

（2）**義興**　義弘五世の孫、世々周防の豪族として聞えたが、義興になつて中國九州に亘つて所領六ケ國、勢頗る盛、將軍義稙が細川政元に追はれて來り投ずるや、義興之を奉じて上京し、義稙を將軍に復し、自ら管領となつて政を執る事十一年、朝廷の式微をなげいて私財を獻上する等治績の見るべきものがあつた。晩年明と交通して貿易を開き、益々富强を誇つた。

（3）**義隆**　義興の子、父の志を享けて皇事にはげみ、後奈良天皇の御即位の費を獻じた功はあるが、父祖以來繁榮のあとをうけ驕奢に耽つて政治を顧みず、家名衰へんとしたので老臣陶晴賢が之を諫めたけれどもきかず、却つて之を除かうとしたので、晴賢遂に義隆を弑し、大内氏はこゝに滅亡した。

7　次の各時代の特色を略記せよ、奈良時代、鎌倉時代、室町時代（海兵海經共通）

	奈良時代	鎌倉時代	室町時代
内治	此時代の内治の特色は佛教政治にある。聖武天皇の崇佛は兩國分寺の建設となり、佛教が政治の根柢となり、はては、僧侶と宮臣との爭から道鏡の如き無道のものが出た。が清麿の忠誠はよく我國體の本義をあやまる事なからしめた。	政治上三大變革の一たる武家政治が此の時代の始から起つた事は最大特色である。其創始者源氏は三代で亡び、北條氏と帝室との間に皇權回復の爭があつたけれども、幕府の勢力は北條泰時、時頼の善政によつて堅實となり、元寇後、高時に至つて遂に滅亡し、政權朝廷にかへつた。	鎌倉以來の武家政治は、吉野朝の制肘をうけて、幕府の基礎が脆弱となり、權力の分散、大名の强力となり、將軍は義滿義政の如く、奢侈にふける間に天下麻の如く亂れ、やがて應仁の大亂以後戰國の世となり、分裂の時代百年をへて、織田豐臣の統一に向ふ事になる。
外	此時代としては、外交は主として支那文化輸入の爲に行はれた。即ち遣唐使の派遣が最も多く行はれ、之が文化のみでなく行はれ、之が文化の	元寇が外交上の最大特色である。我國力とは比較にならぬ大國元の寇するに對し、北條時宗毅然として之に抗し、皇室、幕	幕府の對明外交は義滿の時に貿易の利を得んとして體面を汚し勘合符を用ひて貿易を獨占し、後には各國の守護、五山、南都

く、政治にも影響する所多大であつた。此外滿洲の一地方に起つた渤海國が、聖武天皇の時に入貢。	府、國民、上下一致國難に當り、見ん事之を突破した事は、史上空前であり、國威を海外にかゞやかしたものである。	の寺院、商人も之によつて貿易し巨利を博した。尙此時代の末頃には倭寇が再び猖獗を極め、朝鮮支那は被害甚大
文化		
奈良時代の文化は支那印度の外來文化で、未だ日本化せず、とりわけ佛教が中心文化をなし、美術工藝、音樂、漢文學等に及んでゐる。そして、地方には及ぶ事が少く概して都市が中心であつた。しかも大陸からの外來文化なるが故に、支那印度と交通のあつた西域の文化、ギリシア文化の影響をもうけてゐる。	武家政治の創められた時代なので、武士中心の文化が鎌倉を中心として地方に普及し、公家中心の都會文化と對立して、男性的活動的であつた。武士道が、武士に歡迎された佛教と共に發達し、之が文學に於ては軍記物となり、美術工藝では武家造・刀劍・甲冑等の製作にあらはれた。	幕府が鎌倉から京都に移つた爲武士の公家風化と共に武家・公家兩文化の混在となり、又下流文化が上流に及び、元明の文化の影響をも多くうけ、義滿義政などの先んじて榮華にふけつた爲に、前代の剛健な風がすたれて、優雅な公家風と淡泊な禪宗の風が、武家に取入れられ、戰亂の間にも風流な生活が行はれ、今日の茶・花・禮法等に見る如きものには此時代に確立したものが多い。

【海軍生徒試驗委員講評】（1）本問は單なる史實の暗記を檢せんとして出題したるものなるが、答案の中には或は單に史實を列擧し或は史實を無視して勝手なる意見を述べたるもの等多數ありき。かゝる問題に對して大切なるは確實なる史實に基き他の時代と比較して大局より觀察し、これこそはその時代の特色なりと思はるゝ事項を中心として答案を認むべきものなり。他の時代にも普通にあり又は比較的重要ならざる事は省き、特色を中心として各方面より史實を按配しつゝ簡明直截に記述すれば足るなり。（2）從つてかゝる問題に對しては單に內容を美術文學等に限る事なく、廣く政治經濟等の問題にも觸るゝを要し、又其記述も箇條書又は表の如きは適當に非ず、中心を持ちて纏りたる文となすことが必要なり。（著者曰く、右の記述は理解に便ならしめる爲に表的形式をとつた）（3）疑はしきものは寧ろ記さざるに如かず、例へば奈良時代に藤原氏專權の事を記したる爲折角佛教の隆昌を記したるにも拘らず著しく減點せられたる例あり。

第四期　安土・桃山時代

第十一章　織田・豐臣二氏の統一

一、織田氏の勃興

❶ 天下統一の動向

（1）**群雄の共通念願**　戰國亂世の群雄は何れも上洛して天皇を奉戴し、以て天下に號令しようとしてゐたが、位置が京都に遠いとか、諸雄の相互牽制等によつて容易に其目的を遂げる機會が捉へ難かつた。

（2）**天下統一の端緒**　當時、織田信長は拔群の智謀と絕好なる地理的事情とによつて天下統一の端緒を開いたのである。

❷ 織田氏の興起

（1）**信秀の勢力**　尾張の織田氏は足利氏の管領斯波氏の重臣であつたが、信秀の時自立して勢漸く强く、屢々近隣の諸雄と戰つた。信秀は勤皇の志篤く、內裏の垣を修理し奉つた。

（2）**信長の出現**　信秀の子信長は桶狹間の戰後上洛の理想を實現する爲に次の策を執つた。

（イ）**敵國の牽制**　德川家康と結合して東國の武田・北條兩氏に備へ、後顧の憂をなくした。

（ロ）**上洛の手段**　美濃に入つて齋藤氏を降し、居城を清洲から岐阜に移し、次で淺井長政に妹を結婚せしめて勢力の增大をはかつた。

（3）**信長の誠忠**

（イ）**勅命下る**　正親町天皇、信長の武名を聞召され、特に密勅を以て美濃尾張の御料地の恢復及內裏の修理を命ぜられた。信長感激し、直ちに上洛の準備に力をつくした。

（ロ）**信長の上洛**　曩に將軍義輝の遭難により、弟義昭は諸國に流浪したが、此頃信長に賴つて幕府の復舊を圖らうとしたので、信長は義昭を奉じて上洛し、奏して之を將軍とした。時に永祿十一年。

（4）**信長の勤皇**　信長は上洛と共に、皇居を修理し、內裏の供御を奉り、御料の恢復に力を致し、又朝儀の復興を圖り、公家の采地を復して其窮乏を救つた。かくして京都は漸く秩序整ひ、舊觀に復するやうになつた。

（5）**信長の施政**　信長は統一の業が進捗するを見るや、先づ行路の便を圖り、關所を廢し、道路を修築した。次で貨幣の價値を統一し、又財政の基礎を確立する爲に檢地を行ひ、秀吉に至つて完成した。

二、近畿の平定

❶ **姉川の戰**　越前の朝倉義景は斯波氏の家臣なので、同じ家臣なる信長の命に從はなかつた。そこで征伐に出かけた所、意外にも信長の姻戚淺井長政が朝倉方に味方して織田勢を夾擊しようとするし、延曆寺の僧徒も敵方に應じ、六角承禎も兵をあげて信長に抗したので、信長は決死の覺悟で、家康の援を得て淺井朝倉聯合軍を姉川に破り、六角承禎も柴田勝家に破られた。

❷ **比叡山の燒打**　信長は前から延曆寺僧徒の橫暴を憎んでゐた所へ、朝倉方に味方したので、比叡山を圍んで火を放ち、滿山の堂塔を燒き、僧侶を殺したから、平安時代以來暴れた山の法師は玆に全く勢を失ふに到つた。

❸ **足利幕府の滅亡**　信長によつて將軍になつた義昭は、信長の隆運を見て幕府の實權が之に移るかと憂へ、反信長熱の高きに乘じ、上杉・武田・毛利・淺井・朝倉等と通じて信長を除かうとした。天正元年（一五七三）信長怒つて義昭を二條城から追つたので、義昭は毛利氏に賴り、後毛利氏にも見はなされて出家した。そこで信長は彼の官爵を削つたから足利幕府は遂に滅亡した。（將軍氏が幕府を開いてから二百三十五年、義滿から十三代百八十年）

❶ **安土築城**　やがて信長は淺井・朝倉兩氏を滅ぼし、安土に壯麗な城を築き、七階の天主閣を設けて岐阜から移つた。之から安土を根據として一時天下の兵馬の權を握つたので、信長の時代を安土時代といふ。

❺ **一向一揆の鎭定**　運如上人以來强勢となつた一向宗は、其の子光兼が後柏原天皇の卽位の資を獻じて准門跡の稱を賜はり、門徒は富强を恃んで各地の豪族と爭ひ、近畿北陸地方に威を張つた。當時本願寺光佐（顯如上人）は大阪に石山城を築いで信長に反抗し、伊勢長島の一向一揆も之に加勢したので、信長は先づ長島を平げ、後、正親町天皇の勅旨を奉し、光佐と和して大和を收め、やうやく近畿を平定した。

三、東國の經略

❶ **武田氏の滅亡**

（1）**三方原の戰**　元龜三年、信玄は西上の目的で大擧して來攻、家康は信長の助けを得て遠江の三方原（現在の浜松市の北方約十二粁）に防いで大敗し、勝ち誇つた信玄は更に軍を進めようとしたが、間もなく陣中に死んだ。

（2）**長篠の戰**　信玄の子勝賴は父の遺志をついで、天正三年三河の長篠に織田家の家臣奧平信昌を圍んだ

が、鳥居勝商の決死の使で、家康・信長の援軍を得、勝頼大敗、武田勢の勇將多く戰死し、武田氏の衰運を招いた。

(3) **天目山の戰**　天正十年、信長・家康、甲州の天目山に勝頼を攻め、勝頼敗れて自殺、之で武田氏は滅亡した。

❷ **上杉謙信の死**　謙信も亦西上しようとして越後から能登に打入り、毛利氏と通じて信長と戰はうとしたが、天正六年其出發に先立って病死し、養子景勝があとをついだけれども、次第に不振となった。

四、中國征伐と本能寺の變

❶ **中國征伐**

(1) **毛利氏の隆昌**　毛利元就の死後、孫輝元其あとを繼ぎ、叔父吉川元春・小早川隆景の輔佐を受けて中國十餘國を領し、遂に信長に抗するに至った。

(2) **高松城の水攻**　そこで信長は羽柴秀吉を播磨守として中國を經營せしめたので、秀吉は先づ但馬(タヂマ)・因幡(イナバ)を略し、備中の高松城を圍んで水攻めにした。時に城將清水宗治頑強に抵抗し、又輝元も大軍を率ゐて來援したが、天候・地利に妨げられて秀吉を破れず、一方秀吉も信長の來援を求めた所、信長が救援の途中に本能寺の變あり、秀吉急に和議を成立せしめて急遽歸還となる。

❷ **本能寺の變**

(1) **安土から本能寺に入る**　高松城攻圍中の秀吉から來援を求められた信長は、武將明智光秀を先發せしめ、自ら秀吉を援助すべく、安土城から入京して本能寺に宿營した。

(2) **光秀の叛逆**　光秀はかねゞ信長から數々の恥辱を受けてゐたので、急に叛して本能寺に押寄せ、信長手勢少く遂に自刄し、子信忠も二條城に於て自殺した。時は天正十年、信長四十九歳であった。

五、豐臣氏の興起

❶ **秀吉の生立**

(1) **生立**　天文五年((織田信長の六年前)傳來)名古屋市の西、中村の百姓彌右衞門の子として出生し、八歳で父に死別し、姉と秀吉(日吉丸)をつれた母は同村の百姓筑阿彌に再婚。秀吉は腕白で、寺の小僧も他家の奉公もつとまらなかった。

(2) **出世の徑路**　十六歳で家を出て針の行商中、遠江久能の城主松下嘉兵衞に仕へて草履取となり、十八歳で織田信長に仕へ、名を木下藤吉郎と改めた。秀吉は信長に重用せられ、齋藤龍興征伐以來屢々武功をたて、淺井長政の滅亡後は其舊領廿二萬石を與へられて長濱の城主となり、(信長に仕へてから廿年後)名を羽柴秀吉と改めた。(丹羽長秀・柴田勝家の勇名を慕うて)

❷ **山崎の弔合戰**

(1) **毛利氏と講和**　高松城水攻の最中に主君の死をきいた秀吉は、敵に之を知らせぬ中に和議を持出し、清水宗治を自殺せしめ、とってかへして、信長死後十日目には山崎で明智の軍と戰ってゐた。

(2) **山崎の戰**　山崎は淀川畔の狹い土地だが、要害の地で京都へ凡そ十二粁。光秀秀吉の軍と戰って大敗し近江の坂本城に歸る途中、小栗栖(アグルス)の土民に竹槍で殺された。旗あげ後十一日。

六、天下統一

❶ **信長遺業の繼承**　山崎の弔合戰以來、秀吉の盛名は次第に高くなり始めたが、諸將を清洲に會して、信長

の孫秀信を後嗣と定めて岐阜におき、信雄・信孝が之を輔佐する事とし、諸將に信長の領地を分配した。併し既に實權は秀吉に移つてゐる。

信秀―信長―┬信忠―秀信
　　└信雄
　　└信孝

❷ 賤ケ嶽の戰―勝家等の嫉視　秀吉の盛名隆々たるものあるや、柴田勝家・瀧川一益等は之をねたみ、織田信孝と圖つて兵をあげた。秀吉は信孝の兄信雄と結んで、天正十一年勝家を賤ケ嶽に破り、更に進んで之を越前北の莊に滅ぼした。信孝は自殺し、一益は降參したので秀吉は勢愈盛となつた。

❸ 大阪築城　此年秀吉は諸侯に課して大阪城を築かしめ、京・堺・伏見の商人を移したので、大阪は政治と經濟の中心となつた。秀吉はこゝにゐて信長の遺業を完成しようとした。

❹ 小牧・長久手の戰　賤ケ嶽では秀吉と結んだ織田信雄も、秀吉の威勢を見て之を忌み、德川家康の援を得て秀吉を除かうとした。で、家康は信雄を擁して小牧山（愛知縣）に陣し、秀吉の大軍と對陣して勝敗決せず、時に秀吉の部將池田信輝は、別軍を以て三河を攻めようとしたが、却て長久手に戰つて敗れ、（天正十二年）且紀州の僧徒、四國の長曾我部等の大阪に來攻の狀勢を知り、秀吉は急に信雄と和して大阪に歸り、家康とも和し、妹を家康に嫁せしめて親睦を固くした。

❺ 諸國の平定

（1）**南海**　小牧の對陣中、根來寺（紀伊）の僧徒が家康に應じたから先づ之を征服し、次で四國の長曾我部元親をも降して四國を從へた。

（2）**北陸**　信雄にくみした越中の佐々成政を攻めて降し、上杉景勝と和して北陸を平定した。

（3）**九州**　自ら大軍をひきゐて西征、島津義久を降して九州を統一した。

（4）**關東**　北條氏政・子氏直と共に小田原城に居り、秀吉に服せず、よつて天正十八年家康を先鋒として小田原城を圍み、半年にして之を滅ぼし、其領國七ヶ國を家康に與へた。

（5）**奥羽**　小田原城包圍中、奥州の豪傑伊達政宗も來降、他の諸豪悉く服屬し、之で海内全く統一。（時に天正十五年、秀吉六十五歳の時である。）

七、秀吉の尊皇

❶ 秀吉の榮達　秀吉は小牧山の戰の翌年、既に關白に任ぜられ、後陽成天皇御即位後、太政大臣に任ぜられ、豐臣の姓を賜はつた。

❷ 聚樂第行幸　天正十五年秀吉は結構壯麗なる邸宅を京都の内野に營み、之を聚樂第（ジュラクダイ）と稱し、翌十六年天皇の行幸を仰ぎ、饗宴・舞樂・和歌の會を催し、文武百官悉く扈從し、鳳輦駐る事五日に及び、善美を盡した盛觀を拜した諸國の人民は、今更の如く皇室の尊嚴をさとり、永く打續いた戰亂の後の太平を、涙をながして謳歌したものである。此時秀吉は、家康以下諸將に命じて、皇室を尊崇し關白の命に服從すべき事を誓はせた。

❸ 皇室に對する奉仕　秀吉は皇室の御料を增し、諸公卿諸門跡の料を獻じ、仙洞御所を修理し、皇大神宮の遷宮を行ひ、すたれてゐた式年遷宮の儀式を復活したので、信長以來舊に復した皇室は、益々其尊嚴を回復した。

八、秀吉の施政

❶ 秀吉の統一政策　秀吉は實力を以て諸大名を統べ、後陽成天皇の關白として天下の政治に關り白（アッカマ）した。又功臣・大名に對して朱印を捺した知行狀を與へたので、知行（土地支配）制度が成立した。（元來大名とは大いなる

名田の所有者の意であつたのを、鎌倉時代に入り武門の領袖の意味を帶び、室町時代に入つては、新興の諸氏をも大名と呼ぶ事になつたが、戰國以後は從來の守護・地頭と異なり、地方の政治・經濟の兩權を完全に私有するやうになつた。秀吉もかゝる大名を認めたのである。)

❷ 政治機關

(1) **五奉行**　前田玄以(京都及社寺)淺野長政・石田三成・增田長盛(訴訟其他一般庶務)長束正家(出納)

(2) **五大老**　重要政務の議決をなす。德川家康・前田利家・毛利輝元・宇喜多秀家・小早川隆景(後に上杉景勝)

(3) **三中老**　五大老と五奉行の中間に位して政務に參與する。生駒親正・堀尾吉晴・中村一氏。

❸ 財政政策

(1) **檢地**　信長の始めた檢地を繼承し、天正十七年より全國の耕地の段別・等級を定め、石高を定むる、いはゆる檢地をなし、數年を要して完成し、土地臺帳を作つた。之を文祿の檢地又は太閤の檢地といふ。(從來は一段歩が三六〇歩又は四二〇歩で不定、田地を計るのに貫高だつたのを、一段歩を三六〇歩とし、土地を石高で計る事にした。)之によつて田の制度が確立し、地租の基礎が定まつた。

(2) **貨幣制度**　當時の貨幣は粗惡だつたので、賣買に不便だつたが、秀吉は鑛山の發掘を奬勵し、佐渡の金、生野の銀の產額も增したので、秀吉は純金銀を以て大判・小判・丁銀を鑄造して、全國の貨幣制度を一定した。

❹ 其の他

(1) **刀狩**　社會の平和を圖る爲、町人・僧侶・百姓の武事に携はるを嚴禁し、民間の刀槍の類を沒收した。之を太閤の刀狩といふ。戰亂相つぐ實力時代に大名をおさへる一方、庶民の武器の沒收は統一平和に必要な事であつた。之から全く兵農が分離する事となつた。

(2) **五人組・十人組制度**　犯罪取締の爲下人は十人組、侍は五人組の組合を組織せしめ、犯人がある時は組合から告發させた。

(3) **キリスト敎の禁壓**　秀吉は切支丹宗が我國體を破壞する恐れあるを認めたので、天正十五年島津征伐の時之を禁壓し、南蠻寺をこわした。

(4) **交通、都市の發達**　關所稅を廢して交通の便をはかり、京都の市街を整理し、各都市の發達を圖つた。斯くして全國統一の實をあげ、國民は多年の戰亂の後、やうやく天下泰平を謳歌することが出來るやうになつた。

考察問題

1 織田信長が群雄に先んじて海內統一の事業を進捗させ得たる理由(松山高)

(1) **地の利**　信長の出身が尾張で、當時群雄の理想だつた上洛に都合のいゝ距離だつたし、北條・上杉・武田の豪勇等が互に牽制されてゐる間に、近くの諸侯とは和戰兩樣を使ひわけた上に、京都との間に信長に拮抗する大敵がなかつたので上洛に好都合だつた。

(2) **信長の人物**　獨創的智略と精力絕倫と豪勇と。

(3) **兵制革新**　新兵器たる鐵砲を利用して第一線におき、又長槍を奬勵し、安土に近世的大城廓を築く等、衆に先んじて兵備をなした。

(4) **尊皇**　皇室奉戴、大義名分を明かにし、御料地の恢復、內裏の修理等。

(5) **其他**　人材の拔擢優遇、人民の保護、關所交通稅廢止、道路交通の便をはかる外、橫暴なる佛敎徒を抑壓した事等。

2 織田・豐臣時代の特色

(1) **短期多變化**　織豐時代又安土桃山時代は信長の入京から秀吉の薨去までの約三十年間で、時代區分上最も短いのに信長・秀吉二英傑あらはれ、最も事變が多かつた。

(2) **實力本位**　足利時代以來の下剋上の氣運愈發揮され、身分本位よりも實力本位で、匹夫より出た秀吉の如き人が位人臣を極めたほどであつた。

(3) **統一時代**　戰國時代の不統一が信長によつて統一の緒につき、更に秀吉によつて統一された。之が次の時代家康によつて完成される事になる。

(4) **皇室中心**　信長・秀吉共に武家政治をやり乍ら、武家特有の將軍職につかず、信長は右大臣、秀吉は太政大臣・關白・太閤となつた。共に尊皇心あつく皇室を中心として天下に號令したものである。

(5) **活力横溢**　實力本位と國内爭鬪に永年費したエネルギーが、統一の機運と共に(A)外交方面にあらはれ、(1)朝鮮征伐、(2)羅馬遣使、(3)南洋方面に植民して倭寇の弊をなくするなど、尙又(B)美術方面では桃山時代といつて一種の豪放雄大なる樣式を形造つたのも活力横溢の一面である。

(6) **土地制度の變化**　信長秀吉は一方には土地の兼併を行ふと共に、他方、有功諸將を此の間に封じて武家の私占たる新封建の情勢を造つた。尙秀吉の檢地によつて、複雜を極めた土地關係が整理された。

(7) **職業分化の傾向**　武士・百姓・町人・僧侶の區別が漸次明かに分化するやうになつた。卽ち信長の時代をへて秀吉の時代になるにつれて兵農が分離し、又町人・僧侶の階級が出來た。

3 織田信長の人物

長所　(1)人となり精悍にして果斷、奇略縱横よく人の意表に出で、勝を咄嗟の間に決する俊敏なところがあつた。

(2)非常な場合にもあはてる事なく、從容沈着な態度を失はず、理財の道にも長じてゐた。

短所　癇癖がつよく、殘忍刻薄の一面が弱點だつたので、遂に明智光秀のうらみを買つて天下統一の中道でたふれたのはをしい事であつた。

4 足利義敎と織田信長兩氏の共通點

兩氏共に殘忍なる點が共通　義敎は小兵な赤松滿祐を三尺入道と罵り、大勢の前で猿に滿祐の顏をひつかゝせ犬をけしかけて滿祐を困らせ、滿祐が犬を殺すと、義敎は滿祐の妹を殺し、領地をとりあげるなど、殘忍な仕打の怨みで遂に滿祐に弑せられた。

信長は比叡山燒討の功を賞して明智光秀に丹波をやつたが、其國の八上城主波多野秀治が信長に抗するので、光秀が信長の命によつて、之を伐めたが降參せぬ爲、母を人質にしたところ、秀治は人質なる光秀の母を殺して自殺した。そこで光秀は母親殺しとそしられ、信長に不平をもつた上に、宴席で嫌な酒を信長に無理にのまされ、頭を鼓の如くうたれなどして、數々の恨みが重なつて遂に信長を弑する結果になつた。

兩者共、性格の缺點から身を破滅に導いたものである。

5 信長と秀吉との人物の比較

(1)信長は性質精悍で果斷、秋霜烈日の概がある。秀吉は豪快濶達で天眞爛漫光風霽月の趣がある。前者を火とすれば、後者は水である。

(2)信長は奇策縱横、捷を一擧に決せんとし、秀吉は機智横溢、徐ろに人を屈せしめる。

(3)信長は性急の中に餘裕あり、秀吉は從容迫らざる中にも案外性急なところがある。

(4)信長は派手を好むに止つたが、秀吉に至つては豪奢を好んだ。

(5)二人共によく人を知り人を用ふるの才あり、また理財の道に長けてゐた。

(6)敵を攻むるに信長はよく火を用ひ、秀吉はよく水を用ひた。

（7）信長の弱點は癇癖（カンペキ）強くして人の恨を買ふにあり、敵に對して殘忍刻薄なるにあり、秀吉は氣宇人を呑み人を疑はず、敵に對して信長ほど殘忍ならず、降るものは大抵之を赦した。

6 聚樂第行幸の史的意義

（1）秀吉の天下統一の大業による榮途　四夫より起つて戰亂の巷に豪雄を征服し、壯麗な邸宅をたてゝ行幸をあふいだ事は、天下統一の大業成就の結晶とも見られる。

（2）秀吉の尊皇心の發露　秀吉の勢力天下に並ぶ者のない狀況に於て、行幸を仰いで臣下の禮を盡した事は、戰爭以外に何の辨へもない者の多かつた武將等に、皇室の尊嚴を悟らしめる事に效があつた。

（3）公卿諸侯に對する勢力の示威　行幸は秀吉の威光を示す事になつたので前田利家、德川家康の如く、一時秀吉に敵對した者も全く心服するやうになつた。

總合問題

7 比叡山に關する歷史事實（略）

（1）京都の東北に聳ゆる比叡山の延曆寺は、延曆七年、最澄の建立した天台宗の本山である。

（2）延曆寺は桓武天皇以來、王城鬼門の鎭護として、皇室の尊崇が最も篤く、所領も漸く增大したので平安朝の末葉には、僧兵を養ひ、北嶽と稱して橫暴を極めた。

（3）後醍醐天皇は、尊氏の叛以後、二回難を山上に避けられた。吉野朝時代には、吉延曆寺の僧徒は吉野朝方として忠勤をつくした。

（4）織田信長は、僧徒の橫暴を惡んで比叡山を燒打し、三千の僧徒は多く之を殺したので、其勢力が大いに衰へた。

（5）豐臣・德川二氏は之を保護し、寺領を寄附し、家光の時、舊觀に復したが、僧徒を抑へたので、その橫暴は止んだ。

8 元龜・天正年間の著名なる戰爭を列擧せよ

① 信長時代

（1）元龜元　姉川の戰　朝倉義景・淺井長政を攻め、信長辛うじて勝つ。

（2）同　二　叡山燒討

（3）同　三　三方ケ原の戰　武田信玄を家康が信長の援によつて討ち武田氏衰ふ。

（4）天正二　伊勢長島一向一揆の平定。

（5）同　三　長篠の戰　信長・家康、奧平信昌に援助して武田勝頼を破る。

（6）同　八　一向一揆鎭定。

（7）同一〇　（イ）天目山の戰　武田勝頼亡ぶ。（ロ）高松城の水攻。（ハ）本能寺の變。（ニ）山崎の合戰

② 秀吉時代

（8）同一一　賤ケ嶽の戰　瀧川一益・柴田勝家亡ぶ。

（9）同一二　小牧長久手の戰　秀吉が家康及織田信雄と戰ひ和睦。

（10）同一八　小田原落城、北條氏滅亡、關東平定。

9 秀吉の土地制度改革　天正・文祿の檢地（昭六高等試驗行政科）

秀吉は戰國時代の後を受け、田制紊亂して其廣さも一樣でなく、租稅も不公平なのに鑑み、信長以來始めてゐた檢地を行ひ又石直（コクナホシ）を行つた。天正から元祿にかけての大規模な事業だつたので、太閤の檢地・文祿の檢地・天正石直の稱がある。

(1) 檢地　天正から文祿にかけて諸國に檢田使を派し、全國の土地を調べ、從來一歩が六尺三寸平方を一歩とし、二十歩が一畝、三百六十歩が一段であつたのを三百歩と改め、十段を一町とした。田畠の收穫を京桝（方四寸九分、深さ二寸七分、即今日の一升桝と同積。）を用ひて定め、肥瘠によつて田地の等級を定め、租稅は二公一民とし、檢見（ケミ）取の法（作柄（サクガラ）を檢し豐凶を見て年貢を定める。）により三分の二を年貢とした。

(2) 石直（コクナホシ）　從來土地の收入は永樂錢による錢で勘定し、之を貫高といつたが、一貫文の土地は二石と數へ、石高で勘定して何石の土地と稱するやうに直したので石直といふ。

10 織田氏の勤皇（大阪商大・一高・東高師・京城大・陸士・松本高）

織田「氏」である。信秀の勤皇事蹟を書落してはならぬ。（二五三頁❷の(1)(4)）

重要個別問題

1 足利義昭

【注意】 戰國騷亂もやがて統一に近い頃の足利最後の將軍で、もはや問題にされぬ地位だから、ツイうつかり見落すけれども、仲々其一生は單純でない所に、問題としての興味と危險がある。

(1) 義晴の第三子、義輝の弟。三好松永の黨が兄義輝將軍を弑し、義昭をも殺さうとしたので、近江に走り更に越後の朝倉義景にたよつた。

(2) 信長の才略勇武あるをきいて、永祿十一年幕威恢復の事を托した所が、信長は喜んで義昭を奉じて京師に入る。義昭は征夷大將軍に任ぜられ、信長は二條城を築いてこゝに居らしめた。

(3) 信長の隆運を見て、幕府の實權が之に移る事を憂へ、義昭は上杉・武田・毛利・淺倉・淺井等を通じて信長を除かうとした。そこで、信長怒つて天正元年二條城を圍み、義昭和して追はれ、毛利氏に賴つたから、信長は義昭の官爵を削つたので、足利幕府はこゝに滅亡した。

(4) 毛利氏に賴つた義昭はこゝで薙髮し、後京師に歸り、慶長二年大阪で薨じた。六十一歲。足利氏茲に滅亡。（朝鮮征伐（慶長の役）の年）

2 安土（東高師・東女高師・東外語）

近江國（滋賀縣）蒲生郡安土村にあつて、信長がこゝに壯麗な城を築き、七階の天主閣をたてた。是卽ち我國の城廓で天主閣を造つたはじめ。從來險峻の地に築いたものが、鐵砲の傳來で戰術に變化を生じ、城を平地に作るやうになつた近世城廓のトップである。信長は天正四年工終るや岐阜からこゝに移つたので、安土時代の稱がある。しかし、明智光秀の叛するに及んで、天正十年光秀の爲に燒かれた。

第十二章　安土桃山時代の外交と文化

一、秀吉の征明計畫

❶ 秀吉の雄圖　室町時代の末葉より我國民の海外發展の氣象は漸く旺盛となつてゐたが、秀吉は全國平定をなして後顧の憂なく、經濟的實力も充實したので、一には戰國時代以來の殺伐なる氣風を海外に轉ぜしめ、一には海外諸國と通商して國富を增進せんとし、爰に海外發展策を講ずるに至つた。

❷ 朝鮮役の由來

(1) 朝鮮との修交不調　小田原城攻圍の時（天正十八年）朝鮮の使者が來たので、秀吉は朝鮮王李昖（エン）に命じて明國征伐の嚮導をさせようとした所、李昖は明を恐れて應じなかつた。

（2）**外征の準備**　そこで先づ朝鮮を征伐してから明を討たうとし、關白の職を養子秀次に讓つて太閤と稱し、諸大名に命じて出征の準備をした。

二、文祿の役

❶ **戰況**

（1）**秀吉の陣營**　後陽成天皇の文祿元年（一五九二）秀吉は名護屋（佐賀縣）に本營をおき、こゝで自ら外征軍を督した。

（2）**我軍の出發**　陸軍十三萬餘で宇喜多秀家を總大將とし、加藤清正、小西行長を先鋒として出征せしめ、別に九鬼嘉隆・藤堂高虎等に水軍九千餘人を率ゐて之を援けしめた。

（3）**京城の陷落**　水軍は明の李舜臣に屢悩まされて不振であつたが、陸軍は破竹の勢を以て、釜山上陸以來一ヶ月を經ずして國都京城を陷れ、國王は逃れて明に救を求めた。小西行長は王を追擊して平壤を占領し、清正は咸鏡道に入つて會寧に二王子を捕虜とした。

（4）**碧蹄館の戰**　朝鮮王から援を求められた明王（神宗）は祖承訓を將として來援したが、行長に敗られたので、明王恐れて我國の事情に通じてゐた沈惟敬（シンヰケイ）に和を請はしめておいて、すきをねらつて李如松に命じて大軍を以て攻め來り、平壤を回復し、京城に打入らうとする所を、小早川隆景が碧蹄館で擊破した。

❷ **講和の不成立**

（1）**講和條件**　明は愈我國を恐れ、再び沈惟敬をして講和せしめた。そこで秀吉は明使を名護屋に謁見して和議を結び、一部の兵を釜山に留めて軍を朝鮮から召還した。和議の條件は（イ）明の王女を日本の皇妃となす事、（ロ）貿易を舊に復する事、（ハ）朝鮮の南四道を日本に割讓する事、（ニ）朝鮮の王子、大臣を質として日本に送る事、（ホ）日本はさきに捕虜とした二王子を還す事等であつた。

（2）**明の不誠意**　右の條件は沈惟敬の勝手に定めたものだつたので、少しも實行されず、加ふるに慶長元年明使沈惟敬が伏見城に來た時の國書には「特封レ爾爲ニ日本國王一」（ジテフス）とあつたので、秀吉大いに怒り、すぐさま明使を追ひかへして再征の令を發した。之が慶長の役の動機である。

三、慶長の役

❶ **戰況**

（1）**我軍再征**　慶長二年小早川秀秋を總大將とし、清正・行長を先鋒として再び朝鮮に征め入つた。

（2）**戰況不振**　今度はどうも軍勢振はず、加藤清正・淺野幸長等は蔚山で明軍に圍まれ、久しく籠城の後やつと敵を敗り、島津義弘は明軍と泗川に戰つて勝つたけれども、水軍は屢々李舜臣に敗られ、一般に士氣が上らなかつた。

❷ **結果**

（1）**秀吉の薨去**　慶長三年秀吉は役の半に病にかゝつて遂に薨じ、遺命によつて諸將皆兵を引上げる事となつた。

（2）**幾圖の挫折**　此兩役は前後七年に亘つたが、秀吉の薨去の爲に遂に成功を見る事が出來なかつた。

（3）**國威の發揚**　併し之によつて國威が海外に發揚され、又國民の進取の氣象、海外發展熱が高められ、爲に德川時代初期の我國民の植民、通商事業の發展を見るに至つた。

（4）**文化上の効果**

（イ）**活字**　朝鮮から分捕つて來た活字による印刷術が傳來し、家康の時になつて多くの經書を印刷し、

學術の普及發達の因をなした。

（ロ）**陶工**　島津・毛利・鍋島の諸將は朝鮮の大名を伴ひ歸り、薩摩燒、有田燒、萩燒等の陶磁器製造が勃興する事となつた。

四、西洋及南洋諸國との交渉

❶ **西洋諸國との關係**

（1）**西洋人の來朝**　戰國時代に渡來以來、信長時代にはキリスト教徒保護の關係から宣教師や商人の來朝が多かつた。

（2）**天主教の禁**　信長は佛教徒抑壓の必要上からも基督教を保護したが、秀吉は、天主教が我國情と相容れず、布教が領土擴張の手段の如き疑があつた等の爲、其布教を禁ずる事にした。併し通商貿易は許可し、我國民の海外發展を奬勵した。

❷ **南洋諸國との關係**―秀吉の大志

（1）**ポルトガル印度總督**　秀吉はポルトガル領印度のゴアに居つた印度總督に好を通じ、其來貢を命ずる書を送り、彼からも鄭重な書を送つて來た。

（2）**フイリツピン太守**　商人原田孫七郎を仲介とし、西班牙領フイリツピンに派遣して、太守に入貢を促し、大いに我國威を示した。

（3）**臺灣**　當時高山國（タカサゴ）といひ、未だ統一した國でなかつたので、此國に書を送つて服從を促したが返答を得なかつた。

（4）**御朱印船**　海外發展熱で南洋諸島、安南・暹羅・印度に出航して貿易を營むもの多くなり、秀吉は之等貿易商人（長崎・京都・博多・堺等の商人）に對し、海賊と區別する爲、朱印狀（朱印を捺した許可狀）を與へて認可の證としたので、之等の船を御朱印船といつた。

五、桃山時代の文化

❶ **桃山時代**

（1）**其意義**　桃山時代とは信長の横死（天正十年）から秀吉の薨去（慶長三年）に至る十七年間をいひ、秀吉が晩年に伏見に居城を築いてそこに住ひ、德川時代にとりこわして城址に桃を植ゑたので桃山と稱した事から、此十七年間を桃山時代といふ。此城址が今の桃山御陵である。

（2）**其特色**　戰國時代の亂雜な世相は、信長と秀吉との力によつて統一されたから、當時の氣風は萬事豪壯、華麗な趣味を尚んだ。殊に秀吉は豪放、濶達な性格で、壯大豪華な土木を好んだので、此豪壯華麗が時代精神となり、美術・工藝に其特色が具現されてゐる。

❷ **建築**　聚樂第、大阪城・伏見城の外方廣寺・本願寺の書院・唐門・飛雲閣・大德寺の唐門など何れも壯大堅固、豪華、雄麗を極めてゐる。

❸ **繪畫**　宋・元に於ける雄頌なる筆力と、土佐派の豐麗なる色彩とを應用した裝飾畫が生れた。狩野永德・狩野山樂及び本阿彌光悅などは大阪城・伏見城・聚樂第に其彩筆をふるつた。

❹ **彫刻**　左甚五郎が當代の彫刻に光彩をそへた。

❺ **其他**　染織は京都西陣の金襴・緞子きらびやかなものがあり、茶道・華道の流行につれ、風雅な陶器の製造が盛となつた。その他漆器・螺鈿・七寶等の工藝も大いに進歩した。

考察問題

1 豐臣秀吉の朝鮮征伐に失敗せる原因

(1) 明使沈惟敬の計略に陷り、講和を約した事。

(2) 諸將は多年の戰に倦み、士氣の次第に衰へた事。

(3) 我水軍振はず、陸軍の進出に伴はなかつた事。

(4) 秀吉が內地に居た爲、戰略上及諸將督勵上に不便多く、且諸將相和せず、互に功を爭つた事。

(5) 兵員及軍資の次第に缺乏せる事。

2 文祿の役に比して慶長の役に我軍不振の原因（海兵）

(1) 戰爭倦怠　永き戰國時代をへてやうやく國內統一をした所へ二度目の外征で、敵に對する意氣ごみも敵愾心も旺盛を缺いてゐた。

(2) 明國の準備　文祿の役の講和はもと〳〵明の方は本心を表はさなかつたので、再度我軍の侵入を豫測し明の方に充分の準備が出來てゐた。

(3) 李舜臣　明の海將李舜臣が屢々我水軍を敗り、我制海權に不安のあつた事。

3 文祿慶長の役中に現はれたる我が國民精神

① 我兵の武勇と秩序　慶長三年八月秀吉薨じ、其遺命により我出征軍が朝鮮を撤退に決するや、敵は好機逸すべからずとなし、大擧襲擊したが、此危機に於ても、島津義弘等は之をむかへ擊つて敵を大敗せしめ、殿戰首尾よくして全軍堂々歸國を全うした。

② 島津氏の戰死者供養　島津義弘は慶長の役後歸國し、高野山に碑を建て、**敵味方を問はず**、篤く戰死者を供養した。又すべて我軍の朝鮮に在陣中は堅く掠奪を愼しみ、良く彼國人を安堵せしめ、產業を保護し、納稅の法を定め、我國語を彼の地に普及せしめる外、捕虜となつた朝鮮王子の優遇、傷病兵の看護、死者の弔等、敵を愛する我國民精神の精華を發揚した。

4 豐臣秀吉の生活理想を歷史事實に據て述べよ（廣高師）

【感想】よくわかつてゐなくては出來ない問題である。秀吉の生活理想などは一寸、教科書に書いてないであらう。結局歷史事實から「生活理想」を抽出して、かうだと結論する事になる。そこで生活理想の「生活」とは何だといふ事になる。色々議論はあるだらうが、生きて行く間にどんな理想で行動したかを見る事であると思ふ。秀吉の一生は百姓の子から天下をとつた出世の極點迄行つてゐる點から「どこまでも伸びようとする理想」があつたといへる。**之が第一**。次に當時澎湃として漲つた統一、支配の精神が秀吉の理想に表現した事。卽ち四十七歲の時山崎の合戰で勝つてから群雄のトップとなり、やがて天下を統一するや朝鮮・明・琉球・比律賓から天竺（印度）南蠻までも統一の意志を表はした。**之が第二**。併し外國の英雄の如く、單にあくなき征服慾で、自ら王たらんとする如きものでなく、勤皇の精神が橫溢してゐた。之は秀吉の煌々たる生活理想といふべきである。卽ち幕府政治を斥け、自ら朝臣の一人として天下の經營に當らんとし、赤心もつて皇室を奉戴すると共に、天下をして尊皇の美風を起さしめんとした。聚樂第の行幸をはじめ、御料を獻じ、伊勢神宮の遷宮式の復舊等の事を行つてゐる。**之が第三**。併し、秀吉は草履取から成立つた苦勞人である。人間味たつぷりで、上下の區別なく樂しみを共にしようとし、又親孝行であり家族愛も濃厚であつた。人間味ある政治を行ふといふ事が**第四**の生活理想と思はれる。尙此外材料は豐富である。諸君が此問題を話題の中心として語りあふ事は、勉强にもなるし「秀吉の卵」としての諸君の修養にもなる。

【廣島高師教授講評】秀吉は天皇中心主義を彼の生活理想として信奉した。されば彼は政治を行ふにも、一朝臣としては天皇を輔け奉り、幕府を置かず武家政治は行はなかつた。又壯麗無比なる聚落第を建てるや、天皇の行幸を仰いで慰め奉つてゐるのである。次に彼は朝鮮を征し明を伐たんとし呂宋に來朝入貢を促す等、諸外國を我に服せんとの大望を抱いてゐたが、これ皆彼の生活理想たる天皇中心主義の擴充であり、發展である日本中心主義の現れであつたのである。（文部時報六三一號ノ二による）

5 秀吉の人間味を示す實例

① 金くばり　天正十七年(聖年行幸の)聚樂第に金銀三十六萬五千兩を積上げ、之を一族・公卿・諸將に分配した。之は生前の遺品分(かたみわけ)であると共に財政の豐かな事を示し、人心を安んぜしめたものである。

② 北野大茶の湯　天正十五年京都の北野松原に八百餘の茶室を設け、公卿諸侯を初め町人百姓、更に外國人までも茶の湯に熱心な者の來會を許し、衆と共に樂しみを共にした。

③ 醍醐の花見　薨去の年の春、醍醐三寶院を修理して天下の名花を集め、大規模な家族的の花見をやり、衆と共に遊び興じた。

④ 家族愛　母大政所に對しては孝養をつくし、子秀頼を熱愛した外、他の家族に對しても實に濃やかな愛情を示した。

6 室町、安土・桃山兩時代の文化の特色の比較(六高)

室町時代	安土・桃山時代
(1) 美術工藝　幽玄・枯淡なものが特色であつた。 (2) 宗教・文學　禪宗が盛で、五山の僧侶が詩文に長じ、時代を風靡してゐた。	(1) 秀吉の雄大豪華の氣性が美術工藝上に反映し、色彩絢爛、構想の雄大なものがはやつた。 (2) 戰亂相つぎ、信長も秀吉も宗教、文學の方面に積極的な奬勵を加へなかつたから、振はなかつた。

7 室町時代の外交と豐臣時代の外交との異同に就て述べよ(大阪高)

① 同一點

(1) 支那・朝鮮を主たる相手とした。(2) 貿易の利を目的とした。(3) 前者は天龍寺船を、後者は御朱印船などを出した。(4) 何れの時代も、國民は海外に活動した。

② 相違點

(1) 室町時代の外交は義滿・義政などが日本國王といはれ自分もかく曰つて得意でゐたほど屈辱的なものであつたが、秀吉は明が汝を封じて日本國王と爲すといふのを見て大いに立腹した。(2) 前者は屬國的、後者は征服者的。(3) 前者は支那朝鮮だけ、後者は倚臺灣・琉球・南洋・シヤム・フイリツピン等にも及んだ。

重要個別問題

1 蔚山(松山高)

(1) 朝鮮慶尙南道にある地名。慶長の役に加藤淸正こゝに籠城し、明軍に包圍せられ、堅守して降らず、遂に擊退して勇名を轟かした。

(2) 日露戰役に上村大將の率ゐる第二艦隊が、浦鹽艦隊を此沖合で擊破した。

2 飛雲閣

京都西本願寺にある三層の建築で、元は聚樂第の一部であつて之に移されたもの、桃山時代の代表的建築で變化の中に統一あり、全體として輕快優美な感じを與へる。天井や杉戸には狩野永德・山樂などの筆と稱される名畫がある。

3 小早川隆景(松山高)

(1) 毛利元就の第三子で小早川家を繼ぐ。

(2) 兄吉川元春と共に甥の輝元を助けて父元就の遺命を全うした。

(3) 輝元が秀吉と和するに及び、秀吉に用ひられて五大老の一人となつた。

(4) 文祿の役に立花宗茂等と共に明軍李如松を朝鮮碧蹄館に迎擊ち、大いに之を破つた。慶長三年薨去。

第四篇　近世史

第一期　江戸幕府創業時代

第一章　封建制度の完成

第一　豐臣氏の滅亡

一、德川家康の天下一統

❶ **家康の地位向上**

（1）**信長時代**　桶狹間役後互に同盟し、武田氏を抑へて後之を滅ぼし、又淺井・朝倉等を滅ぼして信長の統一事業を助けた。

（2）**秀吉時代**

（イ）小牧山の戰には對抗したが後に和睦し、實力を認められて優遇を受けた。（初め驛遠參を後關東八州を領す）

（ロ）五大老として政治に與り、官位や所領が他に卓越した。

（ハ）秀吉の死後は遺命によつて前田利家と共に秀頼を輔佐し、伏見城で政務を執り、勢漸く强大となつた。

❷ **關ケ原の役**　石田三成を破り、豐臣氏の舊勢力を打破して天下の實權を獲得した。

❸ **大阪の二役**　によつて豐臣秀頼を滅ぼし、天下全く德川氏の手に一統された。

（1）冬の陣　慶長十九年。鐘銘事件に端を發し、一時和し、大阪城の防備を壞した。

（2）夏の陣　元和元年。城濠埋立の事から再戰、遂に豐臣氏を滅亡せしめた。

二、關ケ原役の原因・結果（東高師・陸幼）

❶ **原因**

（1）秀吉の薨後、家康の威權漸く强大で專横の行ひが多くなつたので、

（2）石田三成は秀吉の舊恩を思つて潛かに家康を除かうとした。

（3）慶長五年（皇紀二六〇〇）上杉景勝・毛利輝元等、家康を憚る勢力者が三成と結んで擧兵。遂に天下分け目の大戰となつた。（德川・石田兩中心に天下の勢力東西二分、此戰の勝敗で天下の政權が定まる重要な鬪爭だつた。正に天下分け目の名ある所以）西軍（豐臣方）の將小早川秀秋の內應で西軍潰滅

❷ **豐臣氏の敗因**

（1）豐臣氏の舊勢力だつた加藤・福島等の主腦部が多く家康を援けた事。

（2）西軍（豐臣方）の部隊全體に敵愾心乏しく、統制が十分でなかつた。

（3）西軍方の小早川秀秋等の東軍に應じた事で戰況一變して豐臣方敗北。

❸ **結果**　天下の政權が家康の手に歸した。

（1）德川・豐臣二氏主從の地位を轉じ、

（2）戰役に關係した三成・行長を斬り、宇喜多秀家の所領を沒收し、毛利輝元・上杉景勝の領地を削つて東軍有功將士に與へ、

（3）豐臣秀頼は攝津、河內、和泉三國六十五萬石の大名として大阪城に居らしめ、片桐且元に政を助けしめた。かくして天下統一の豐臣氏は二代目に一大名となつたわけである。

三、豐臣氏滅亡の顚末

❶ **關ケ原役以後の豐臣氏**

（1）一大名に成下つた豐臣氏、尙其居城大阪城は西國の要地で且秀吉の遺した財力豐富、秀吉の恩顧をうけた諸大名の心をよせる者少からず。

（2）秀頼の生母淀君は家康を憎んで豐臣氏の舊勢力恢復の企があつた。之から所謂冬の陣夏の陣二役によつて滅亡となる。

❷ **大阪冬の陣**（一高）

（1）**原因―鐘銘事件**　（イ）家康は豐臣氏の豐富な財力を弱める爲、秀頼に勸めて父の冥福を祈る爲として京都東山の方廣寺に大佛殿を再建させ、（ロ）其竣工により開眼供養の擧式の前、新鑄の鐘銘に「國家安康君臣豐樂」の句があるのを、己を呪ふものとなして豐臣氏を詰責した。（ハ）片桐且元百方辯解に力めたが家康きかず、大阪では大野治長等淀君に勸めて且元を斥け、諸國の浪人を招いて擧兵した。

（2）**戰況**　慶長十九年十月、家康秀忠父子は大軍を率ゐて大阪城を圍んだが、大阪方は眞田幸村・後藤又兵衛基次・木村重成等善戰、屢々德川勢を破つて落城容易ならず、大阪方も諸大名來援するものなく、遂に和議となつた。

（3）**結果**　家康は大阪城の外濠を埋める條件を約して講和が成立した。之を冬の陣といふ。

❸ **大阪夏の陣**（一高・二高・高知高）

（1）**原因**　冬の陣の結果、大阪城の外濠のみを埋める約に反し、內濠をも埋めた爲、豐臣方は大いに憤つて再び擧兵。時に元和元年。

（2）**戰況**　家康・秀忠再び出陣來攻。既に外內共に濠が埋められたので、豐臣方は遠く河內迄出て拒ぎ戰ひ、幸村・重成・後藤基次等奮戰の甲斐なく遂に落城した。

（3）**結果**　秀頼・淀君は自殺し、豐臣氏滅亡。（秀吉の盛時聚樂第行幸の年より僅かに二十七年後、秀吉歿後十七年）

是に於て海內全く平定し、德川氏は爾後大兵を用ひる事がなかつた。世に之を元和偃武（エン）といふ。

考察問題

1 **織田・豐臣・德川三氏の天下一統の大業を比較して其異同を考察せよ**

① **信長の天下一統**　戰國時代、群雄割據、勢力分裂の時期に於て、近畿に近い尾張に擡頭し、地の利により遠交近攻の策をとり、秀吉を部下とし家康と同盟して頑敵を破り、足利義昭を奉じて群雄に先んじて上洛し尊皇の行事によつて人心統一に効果を上げた。

② **秀吉から家康へ**　信長の天下一統は完成期に入らず、群雄を蹴倒して統一の機運を作り、之を繼承した秀吉が殘る諸豪を全く屈服せしめ、更に進んで海外にまで其勢力を伸張したが、統一後の組織を充實する暇なくして薨去し、家康は寧ろ守成的に大名を威壓し、皇室を抑へ奉り、二百六十年の持久策を樹立した。

③ **共通點**　（1）三者共に時を同じうし、出生地を近うして亂世に健鬪した英傑で、三者が主從となり盟約を結んで天下統一の三段階に各々努力した。（2）三者共に皇室を尊んで皇居の修理、御料地の恢復又は御料の增加をなし奉つた。

④ **差異點**　信長は統一の第一段たる攻伐が中心、秀吉は攻伐の完成及勢力の廣範圍なる擴張をなして第二段の事業をなし、家康は前二者の成したあとを承けて、守成的に永遠の道を以て組織化し、眞の統一を結果せしめた。

重要個別問題

1 石田三成

近江の人、幼少にして秀吉に仕へて恩顧を受け、五奉行に列し、政務に參與した。秀吉薨後、家康の勢盛なるを忌み、之を除かうとして擧兵、關ヶ原の戰に敗れて捕へられ、京都で斬られた。

2 上杉景勝

元、長尾政景の子、上杉謙信に養はれ、後秀吉に仕へて五大老に列した。秀吉薨後、石田三成と謀り、家康を除かうとして領地會津に反したが、關ヶ原役後家康に降り、米澤に轉封。

3 片桐且元（東高師）

近江の人、秀吉に仕へて武功あり、特に賤ヶ嶽七本槍の一人として勇名をあげた。關ヶ原以後秀頼の傅となり、方廣寺鐘銘事件で家康が立腹した時、其中にたつて豐臣氏の爲に盡力したが、大野治長・淀君の疑を受け澁に退いた。

4 方廣寺

京都にある寺院、秀吉の創建で慶長元年の地震の爲に破壞したが、家康は豐臣氏の財力消費の爲、秀頼に勸めて方廣寺を再建させた。愈々開眼供養を行はうとする時、鐘銘中に「國家安康」の文字のあるのを家康は自分を呪ふものと曲解し、片桐且元の辯解もきかず、遂に大阪冬の陣を起した。方廣寺は其後再び地震で破壞したので、銅佛を熔して寛永通寶を鑄た。今の大佛は半身の木像である。

第二　江戸幕府の組織

一、江戸幕府の組織（三高・山形高・東高商・東商・船・山口高商・北大・專檢・昭一二高等試驗法律五二による判檢試）

江戸幕府の組織は既に家康の頃から基礎が築かれ、家光に至つて完成した。即ち德川將軍を中心として封建制度をとり、諸侯に知行を與へて土地人民を支配せしめ、幕府は別に天領を有した。

江戸幕府の中央組織

- 征夷大將軍
- 大老
- 老中
- 若年寄
- 三奉行
  - 寺社奉行（全國の寺社僧侶神官を支配し其訴訟を掌る。外關東八州の私領の訴訟をも掌る。）
  - 町奉行（南北に分れ、江戸市内の訴訟と政務を掌る。下に與力同心がある。）
  - 勘定奉行（幕府の財政及び幕府直轄地（天領）の訴訟を掌る。）
- 目付
  - 大目付（老中の指揮を受け諸大名諸役人を監察する。）
  - 小目付（若年寄の指揮を受け旗本を監察する。）

大老　幕府諸役の首班で、將軍を輔佐し一切の政務を統轄する。常置の職でない。十萬石以上の譜代大名を任じた。

老中　專ら幕政を掌り諸大名を取締る。家光の時五人定員、内一名月番で庶務統轄。三・五萬以上の譜代大名を任じた。

若年寄　老中を輔け又旗本を取締る。六人定員、一、二萬石の譜代大名から任じた。六人衆ともいふ。

江戸幕府の地方組織

京都	大阪	山田	天領
所司代	城代	長崎	郡代又は代官
宮廷の護衛、京都の訴訟を掌り陰に朝廷を監視し、西國の大名を抑へた。	市民の訴訟、警察の事に當る。	佐渡等	奉行
		町の行政、訴訟警備に當る。	民政を掌る。

ローマは一日にして成らずの諺の通り、二百六十五年の久しきに亘る江戸幕府政治の建設は一朝一夕の業でなく、家康から四代將軍家綱の初めに亘つて次第に解決されたものである。

❶ **豐臣氏の處置**—大阪冬・夏の陣　家康の幕府を開いた時から、豐臣秀頼は攝河泉六十五萬石の一大名となつたが、秀吉の子として特別な立場にあり、幕命に不從順だつたので、方廣寺の鐘銘事件に端を發して大阪冬の陣となり、和議成つて大阪城の外濠を埋める事となり、約にそむいて內濠迄埋めた事から大阪方の再擧兵で夏の陣に再戰、遂に元和元年豐臣氏が滅亡した。

❷ **諸大名の統御**　（奈良女高師・水戸高・鶴岡高・東高師・神皇・陸士・七高・松山高・三高・靜岡高・八高）

德川氏は天下の諸大名と勢力を爭ひ之に打勝つて幕府を建てたのだから、その統御には最も力を用ひた。

（1）**勢力の均衡**　大名を親疎の關係により親藩（德川一門）譜代（關ヶ原役以前よりの臣）外樣（關ヶ原役以後の臣）の三類に分け、

（2）**大名の配置**　親藩は大藩で重要地點に、譜代は領土大きくなくも重要な場所に、外樣は領土の大きいものでも遠隔の地におき、互に牽制しあふ樣にした。

（3）**財力消耗策**　大名の財力豐富とならぬやうに、諸大名特に外樣大名に對し、皇居・江戸城・駿府城・名古屋城・木曾川堤防修理等の土木工事の助役（ユキ）により多大の費用を提供せしめた。

（4）**證人の提出**　之は關ヶ原以前から始まり、後には凡ての大名の妻子を江戸に住まはせた。

（5）**參覲交替**　家光の時から幕末迄行はれ、全大名を時を定めて在府、在國せしめたので、幕府の中央政權確立に與つて力があつた。同時に、土木工事の負擔と併せて、諸侯の財力消耗策の一つにもなつた。

（6）**武家諸法度**　元和元年發布、諸大名の行動を嚴重に取締つた。

（7）**懷柔策**

a　結婚政略　外樣の大藩前田、黑田、伊達等と婚を通じて手なづけた。

b　お茶の會　お話相手として諸侯を城中によび、將軍自ら茶をたてゝふるまひ、お話をして親睦をはかつた。

c　參覲交替の爲め、入京退京の際は將軍が狩と稱して江戸の郊外迄出迎へ見送をして大名を喜ばせた。

（1）から（6）迄は諸大名をしめる方だが、（7）に於てよくこれを緩和したものである。

❸ **朝幕の關係**（陸士・師二）

（1）**對朝政策**　表面は皇居修理、御料增進など皇室尊崇の誠意を示したが、朝廷が政權に關與せられぬやうに色々の政策をとつた。卽（1）京都所司代をおいて監視し、（2）禁中並公家諸法度を以て朝廷から政治關與を避け（3）外戚政策により秀忠の子和子を後水尾天皇の中宮に奉つて東福門院となした。

（2）**對朝關係の變遷**　後水尾天皇、後光明天皇の時代、幕府の抑壓に堪へかねて憤られた事もあつたが、綱吉の頃から漸次融和の傾向となつた。（二九〇頁2・3・4及第五章第三考察問題參照）

❹ **財政の安定**　當時幕府の收入の主要なものは地租・雜稅だつたから、農工商の保護・新田開發・農法改善・殖產興業・幣制の整理などで財源を養ひ、金銀銅の採掘、外國貿易の振興等で富が增殖して頗る安定となつた。

❺ **外國との關係**　江戸時代の初め、交通したのは鮮・支・南洋・葡・西・英・蘭等で、主として貿易の利を目的としたが、天主教に累ひされて鎖國を斷行するに及び、對外問題に心勞するの要なきに至つた。

❻ **浪人問題**　浪人は關ヶ原・大阪陣・大名の除封・減封などで多く發生し、太平の世となつては立身の道なく、不平不滿の爲、社會生活に不安を漂はせたが、慶安年間由井正雪の陰謀事件が之から起り、其の亂後は浪人發生の機會も少くなり、人心和ぐと共に此の問題も危險なものでなくなつた。

三、德川家康の施政方針（陸士・東高師）

（1）**江戸に幕府を開く**　之は頼朝の例に倣ひ士氣の柔弱になるを防ぎ萬一に備へる爲だつた。

（2）**根本主義**　長く平和を維持して幕府の基礎を確立する事が根本主義だつた。

（3）**對諸侯政策**　諸侯の巧妙な配置、政權の均分、武家諸法度の嚴守其の他の策で中央集權を確立。

（4）**對朝廷政策**　表面は皇室尊崇、他面に公家諸法度を設けて朝廷を制し、政權から遠ざけ奉つた。

（5）**對文化政策**　文教を復興して學問に依て人心を教化し、戰國殺伐の氣風を和げ、平和に向はせた。

（6）**對宗教政策**　キリスト教を禁じ、佛教の勢力を大にして之を牽制せしめた。

（7）**對外政策**　貿易を奬勵し、外國に對して親和主義をとつた。

四、德川時代の法律（東商船）

德川時代の司法制度（昭六高等試驗司法科）

❶ **武家諸法度**　二代將軍秀忠の時、諸侯制御の目的で（元和元年）發布したもので崇傳（スウデン）・天海・林羅山等の起草に成り、十三ヶ條あり、將軍の代替り毎に諸侯を集めて之を頒つ例になつてゐた。內容は、（1）無屆で城普請・婚姻せざる事、（2）諸大名參覲の事、（3）法度に背く者を隱匿せざる事等を規定した。幕府の初期には之によつて處分されたものが多い。

❷ **公家諸法度**（禁中方御條目）　秀忠の時（元和二年）朝廷抑壓政策として制定した一種の憲法で十七ヶ條あり、內容は（1）畏くも天子諸藝能の事に干渉し、（2）公卿服裝の事、（3）紫衣・上人號を濫授せざる事等、元來朝廷の大權に屬する事頗る多く、諸寺諸法度と共に崇傳の起草したものである。

❸ **公事方定書**（クジカタサダメガキ　オサダメガキ）（御定書百ヶ條）（昭六高等試驗外交科）　吉宗の制定した成文法律である。其頃迄幕府には成文の刑法なく裁判には前例・舊慣で處理してゐたので、公平を缺き不正の事もあつたのを遺憾とし、吉宗は大岡忠相等に命じて、支那の律や大寶律、幕府の裁判例などを參酌して之を制定した。

❹ **社寺法度**　大きな寺院や神社には個別的に法度を制定して遵守させ、宗教に關する方針を確立した。（大德寺法度・妙心寺法度の如き）

❺ **地方の行政**は一般諸侯に統轄せしめたので、各藩には夫々行政・財政・刑政等の地方的法規が施行された。

五、我國封建制度の由來

❶ **意義**　封建の語は支那古代の社會政治組織に就て用ひられたものであるが、我國では武家時代の社會組織を封建制度と呼び、殊に江戸時代の社會は其の最も整頓したものとされてゐる。今左に其由來をたづねて見よう。

❷ **皇室中心の國**　元來我國は皇室中心の國家で天皇屢々親ら民の父母と仰せられ、國民は天皇の忠良なる赤子として至誠を傾けて奉公し、君臣の中間に介在するものはなかつた。

❸ **鎌倉室町時代**　然るに武家階段が勃興し、權力に據つて幕府政治を創めて以來、鎌倉・室町時代には、征夷大將軍の下に守護、地頭があり、其下に夫々家臣があり、更にその下に農工商業の庶民がある如き社會形態を備へるに至つた。

❹ **桃山時代**

（1）土地制度　秀吉は信長のあとを繼いで全國に亘つて大規模な檢地を行ひ、中古以來の莊園を廢して土地制度を確立した。

（2）封建制度の發達　從來諸國の守護は、戰爭によつて敵の領地を占領しても、其土地の者から代官を命

じて之を治めさせたが、信長以來、占領した土地は悉く有功の將に分與して、其地一切の行政を委ねた。

(3) 對諸侯政策　秀吉は諸侯を統御し之を全國に配置するに非常な苦心を拂つた。

(イ) 毛利・島津　兩氏は早く歸服したので舊領を安堵せしめて心服させると共に、秀吉の事業に助力させた。

(ロ) 德川氏　家康は元駿・遠・參・甲・信を領有してゐたが、秀吉は北條氏滅亡の後、家康に關八州を與へて其の功を賞すると共に、會津に蒲生氏郷を封じて家康の背後を押へさせ、江戸と京都との間に多くの腹心の部下を配置して萬一の爲に備へしめた。

❺ 江戸時代　江戸時代に及んで、武家階級の內部構造は一層整頓し、征夷大將軍の下に直屬の旗本・御家人あり、別に二百數十家の大名があつた。

(1) 大名の格式　大名は幕府の政策上から國主（一國以上を有するもの）准國主（一國を有たずとも國主に次ぐもの）城主（城を有する者）城主格（城を有せず城主の待遇者）領主（城を有せぬ者）に分れ、夫々待遇に差等があつた。

(2) 旗本と御家人　廣義の旗本の中にも將軍に謁見を受け得る者、卽ち御目見以上と以下の別がある。狹義の旗本は御目見得以上で、以下は御家人といつた。尙農村にすみ、半ば百姓の生活をする武士を鄕士といふ

(3) 農工商　其武家階級の下に更に農工商の庶民があり、武家は政治上の實權を握り、しかも生活の資料を農民や町人商工業者から求めた。農工商の三者は武家の支配を受けつゝ、生產に從事し相とともに社會の大部分を形成してゐた。

(4) 公卿・僧侶・神官　公卿は實勢力は乏しかつたが形式上では武士の上に立ち、前代迄は武士に匹敵する勢力をもつてゐた。僧侶神官は此時代には尙武家の下農工商の上に介在して傳統的勢力を保つてゐた。

(5) 職業世襲　武士も町人も代々武士であり町人である。同じ町人でも酒屋は代々酒屋である如く、身分職業を累代相繼承するならはしであつた。

(6) 階級の弊　身分・職業が階級的に固定し、幕府は此區別を紊す事を許さなかつたから、大體に於て、無能でも家柄の良い者は要職に座し、有爲の人材でも身分の低い者は出世が困難だつた。爲に此弊が重なるにつれ、後には上流武士の大半は器量の乏しい者となつた。

六、我國と西洋との封建制度の比較

西洋中世の封建制度はもとフランスに起り、（フランク王の宮宰チャールス・マルテルがサラセンの侵寇を撃退する爲王領の一部を割いて封土として部下に與へ君臣關係を結んだ）後ドイツ・イタリー・スペインの大陸諸國は勿論イギリスに迄行はれたものである。今我國のそれとの異同を見るに、

❶ 類似點　國王が國內の土地を諸侯に領地として與へ、（之を封土 Feudum といひ、之から封建制度卽ち Feudal system といふ名が出た）諸侯は又其部下に分與して、數次の主從關係を結び、確然たる階級制度を組織してゐた。此點に於て我國近世封建制度と類似點の多いものである。

❷ 相異點

(1) **地方分權と中央集權**　西洋では國內權力の中心は大小の諸侯にあつて、國王は殆ど虛位を擁するに過ぎないので、國王の命令では諸侯を動かす事が出來ず、極く明瞭な地方分權制だつたから、國王は常に此制度を破つて政權を中央に集めようと努力した。然るに我國では封建制度をとり乍らも、之は武家階級以下の國民層の間に於て構成され、皇室は其の上におはしまして絕對獨立の立場を保有し給ひ、暫く政權の運用を幕府に委任遊ばされたものである。是れ我國體の特異なる所以である。而して將軍の下に於て完全な中央集權制を持續し、諸侯は將軍の權威に完全に服從してゐた。

(2) **庶民愛撫**　西洋の諸侯は平民を非常に抑壓し苛遇したけれども、我國の大名は一般に仁政を行ひ、庶

民を愛撫したので、西洋に屢々見る如き平民の反抗運動の如きは我國では例外の事件であつた。

(3) **時代の趨**　歐洲の封建制度は中世に行はれ、土地生産及商業上の聯盟が活躍してゐた狀態で成立し、(支那では古代に封建制度が行はれ、土地生産が最重要の狀態で成立し、)我國では近世に完成し、土地生産及商工業兩方が重要で、幕府は宏大な農耕地と重要商工業都市を直轄地として中央集權力を強化し、社會統制力を大にした。

考察問題

1 參覲交替と其影響（長崎高商・陸幼・小樽高商・靜岡高・三高・東府高）

① 德川幕府が大名を統御する爲に設けた重要な政策で、大名が定期に江戸に侯する事を參覲といひ、一定期間歸國の途につく事を交替といふ。秀忠の時始め、家光の時完成。

② **其方法**　天下を二分し其一半を江戸に參覲せしめ、他の一半を國に居らしめ、一ヶ年後に交替せしめた。後多少之を改革し、將軍吉宗の時には在府半ヶ年、在國一年とした。

③ **影　響**

(1) **幕府への影響**　此制度の確立は、全國に散在する諸大名を江戸に引附け、幕府の中央集權を實現し得た主なる原因の一であり、大名は江戸が本居で領國は分擔の支配地守備地に過ぎないと思ふやうになつた。

(2) **大名への影響**　一年の江戸在住と道中の往來の爲に、大名の領國に居る間が短いので、事を構へる暇もなく、又大名の失費は非常なもので、財力疲弊の一原因になつた。

(3) **社會的影響**　大名の江戸在住は、之に家臣も從ふわけで、江戸の人口が激增して繁榮を來し、物價も騰貴した。一方には大名の財政窮乏を補ふ方策として、產業を奬勵したので地方產業の隆興を見た。

(4) **文化的影響**　文化の中心たる江戸へ各地から大名が往復する爲、當然交通が發達し、人々の來往が頻繁になるので、地方文化と江戸文化との交流が起つて來た。

2 鎌倉・室町・江戸三幕府の幕府を中心とせる中央集權的諸政策を比較考察せよ

① **鎌倉幕府の中央集權**　我國武家政治の第一期で、地方に於て反逆を企てる者は平氏の殘黨と義經及奥州藤原氏であつたが、奥州征伐以後は此事なくなり、全國に守護地頭をおき、源氏の家人を以て之に充てた。北條氏の時代になつても、其善政と武士の推服により中央集權に大なる困難はなかつた。又朝廷に對しては京都守護をおいたが、朝權恢復の爲の承久の亂が失敗に終つて後は、兩統迭立迄は無難であつて、善政と實力と堺國一致とはよく元寇の國難を克服し得た。

② **室町幕府**　此の時代は元弘の亂以來公武對抗の戰亂絕えず、足利尊氏が人心收攬の爲に、諸侯の勢力を强めたので、中央集權の力微弱となり、地方分權的となり群雄割據の狀勢を馴致した。鎌倉幕府が求心的ならば、室町幕府は遠心的狀態だつたので、中央集權の爲におかれた關東管領も守護地頭も、領主のやうに土地人民を私有し、中央より離れた。

③ **江戸幕府**　鎌倉の時は武家の初めて天下をとつた爲に家人は從順だつたが、室町では武士が不從順で自家の勢力を扶植しようとした。江戸時代になると、戰國下剋上の波瀾の中を苦闘した諸豪が、信長、秀吉に屈服させられ乍らも、千軍萬馬の英雄揃だから、中央集權の力が弱ければ忽ち反抗して勢力をとつて代られてしまふのであるが、家康の深謀遠慮は、諸大名の親疎によつて勢力の均衡を計り、其配置に留意し、財力と閑暇を減ずる方策をとり、又他方に諸大名を懷柔する方法をとつたので、大名はよく統御し得るやうになり、朝廷に對しては尊崇を捧げつゝ、禁中並公家諸法度を以て抑へ奉つたので、他の兩幕府より堅實にして永續したのであつた。(三六六頁8參照)

重要個別問題

1 德川家光（東商船）

（1）大名威服　三代將軍で秀忠の長子、性豪邁果斷、廿歳で將軍職に就くや諸侯を殿中に集めて之を威服せしめ、從來、家康と生立ちが同僚だつた諸侯も家光を將軍として主從關係となり、幕命に服せぬ者は嚴罰に處したので、一代の中、領地を奪はれた者は頗る多かつた。

（2）事蹟　（イ）日光東照宮の改築、（ロ）島原の亂の鎭定、（ハ）鎖國令の發布等。

（3）寛永の治　名臣土井利勝・酒井忠勝・松平信綱・阿部忠秋等、將軍を輔佐して政治に勵んだので天下よく治まり、寛永の治といはれた。

（4）慶安四年薨じ、日光に葬る。

2 後水尾天皇（東高師）

後陽成天皇の皇子。天皇英邁常に幕府の專横を惡み給うたが、將軍秀忠の女和子（東福門院）の入内あり、大德寺の僧澤庵其他に紫衣を授け給うた時、幕府は之を違法として紫衣を褫奪したので、天皇御憤りあり、突然位を皇女明正天皇に讓られた。天皇好學の御志深く和歌挿花を好まれた。

3 後光明天皇

後水尾天皇の皇子、明正天皇の次に即位あり、學問を好ませられ、又幕府の專横を憤り給ひ、政權回復の御志があつたけれども、不幸御年廿二歳で崩御あらせられた。

4 紫衣事件

皇室御系圖（其十三）

二四四頁より
三〇一頁に續く

後水尾天皇が京都の五山、大德・妙心二寺派の僧に紫の衣を授けられたのが、法度に反するといふので、所司代板倉重宗から差止を申請し、幕府は紫衣問題の抗辯書を出した澤庵等四名の僧を流し、紫衣を奪はれる者數十人。之が爲め朝廷の威嚴を損ずる事甚しく、後水尾天皇御怒りのあまり突然讓位せられた。

5 崇傳

南禪寺の長老で家康以下三代の將軍の内治外交の顧問となり、武家・公家諸法度、諸宗諸法度を起草し、外國に對する書簡の起草にも當つた。

第三　江戸時代初期の外國關係

一、江戸時代初期に於ける諸外國との關係（京城大・東外語・海機・廣高師・海經・東商大豫・山口高）

❶ 對朝鮮關係　對馬の宗氏修好の事に當り、慶長十年國交恢復、家光以後將軍の代替毎に慶賀使が來朝。

❷ 對琉球關係　朝貢の命に服しなかつたので、家康は島津家久に命じて討伐せしめ、之を島津氏に與へた。

❸ 對支關係　明との關係は恢復せず、清になつても公式の交通はなくて、唯兩國民の私の交通貿易だけが盛だつた。明朝滅亡の際鄭成功は我軍に援軍を求めたが、幕府は拒絶。

❹ 對歐米關係（高校・東外語）

（1）**葡・西兩國**　室町末期より引續き貿易に從事してゐた。

（2）**和蘭との通商**　慶長五年豐後に漂着した蘭船乘組員蘭人ヤン、ヨーステン Jan Josten 及び英人ウイリアム、アダムス William Adams 等を江戸に招いて外交の顧問とし、同十五年和蘭が國書を我に贈つたので、家康は貿易を許し、平戸に商館を設けた。

（3）**英吉利との通商**　英國は慶長十八年ジョン、セーリスが平戸に國王ゼームス一世の國書をもつて來り、アダムスの斡旋によつて家康及秀忠に見え、通商の許可を得、平戸を互市場として商館を立てたが、蘭・西兩國人との競爭に堪へず、九年後に歸國した。（幕末の對英關係三四九頁 3 を參照）

（4）**メキシコとの關係**　家康はスペイン領メキシコ（ノヴイスパン）と貿易を開かうとして田中勝助を遣はしたが、先方では貿易の事ははつきりと許可も禁止もせず、遂に果さなかつた。

二、江戸時代初期邦人の海外發展の狀況（四高・成蹊高・專檢）

❶ **御朱印船**　秀吉が、京都・大阪・堺・長崎等の商船に、朱印狀を與へて海外貿易を許可したのに倣ひ、家康も海外渡航船には朱印狀を與へて渡航の證明とした事から、之を有する船を御朱印船といひ、江戸時代初期の海外發展は何れも此御朱印船の活躍である。而して其航行範圍は、主として安南・カンボジヤ・暹羅・ジヤヴ・ゴア等南支那・印度・南洋方面だつた。

❷ **海外發展の主要人物及事業**

（1）**山田長政**（海兵・東商大）　暹羅に渡り、內亂を鎭めて王女と婚し、勢盛となつたが後に暗殺された。

（2）**田中勝助**　家康の命でメキシコに使ひした。

（3）**濱田彌兵衞**　臺灣で蘭人が己の船貨を押收したのを怒つて、和蘭總督を懲し、償金を出させ、其子を人質として歸つた。

（4）**支倉常長**（ハゼクラツネナガ）（七高・東高師・陸士・長崎高商）　伊達政宗の臣で、主の命によりメキシコをへてイスパニアに至り更にローマでローマ法王に謁した。メキシコとの通商を開かうとし、西班牙王の助言を乞うたが要領を得ず、前後八年を要して歸國した。

（5）**天竺德兵衞**　印度に渡航して、印度の地理・風俗等を調査して歸國した。

❸ **南洋に於ける發展**　南洋地方には、各地に我居留民の建てた日本町がある程で、京都の角倉了以（スミクラレウイ）、大阪の末吉孫左衞門、京都の茶屋四郎次郎、長崎の末次平藏、堺の納屋（ナヤ）助左衞門等の商人は此地方に活躍した最も著名な人々で、皆富貴を致した。

三、キリスト教に對する我國爲政者の政策の推移

❶ **信長の政策**　織田信長は佛教徒に對抗させる政策上天主教を保護し、安土に學校や會堂を設け、京都に南蠻寺を建てた。けれども信仰には無關心だつた。

❷ **秀吉の政策**　豐臣秀吉は天主教の宣教を斷然禁止し、唯貿易を行ふ事だけを許可した。

禁教の理由　（1）天主教の平等主義が我國の政治社會組織と相反してゐる事、（2）天主教徒中には熱心のあまり、我國固有の善良なる風俗を破壞し治安を亂すものがあつた事、（3）宣教師中には政治的野心をもち、我領土侵略の意圖を有するものがあるとの說があつた事。

❸ **家康・秀忠の政策**　秀吉の政策を大體承けついで天主教を嚴禁し、貿易を奬勵したが、貿易を通じて宣教をひそかに行ふ有樣だつたので、愈々禁教を嚴にし、信者を嚴罰に處した。

❹ **家光の政策**

（1）禁教令の斷行と嚴罰とで教徒に斷壓を加へ、又諸大名に嚴命して之が絕滅を期した。

（2）島原の亂で天主教徒が一揆を企てたのに對し、國家治安維持の立場から、一層之が禁壓策を徹底せしめた。

（3）**鎖國政策**　寬永十六年遂に鎖國令を發した。之は禁教の爲の最後の政策で、和蘭以外の西洋諸國と我

國人との交通貿易を禁絶せしめた。即我國人の海外渡航、異國居住邦人の歸國、西洋人の來航何れも禁止、支那和蘭兩國人だけに限り、長崎で貿易が許された。（本章五・鎖國參照）

（4）**島原の亂後**　一般に宗門改を行ひ、特に信徒多き九州地方では踏繪を行つて信者か否かを調べた。

（5）**禁書令**　外國から天主教及西洋に關する書物の輸入購讀を禁ずる法令を出して取締つた。（❸參照）（三〇四頁）

四、島原の亂（美術・東高師・東女高師・陸士）

❶ **原因**　江戸幕府の天主教に對する禁令が愈々嚴重になると、肥前島原及肥後天草の信徒は、不平を起し、寛永十四年天草四郎時貞といふ少年を首領として、島原の原（ラフジャウ）城址に據つて亂を起した。

❷ **戰況**

（1）幕府は初め板倉重昌をやつて、九州諸侯の軍を督して之を討たしめたが、賊の勢强盛で鎭定出來ず。

（2）幕府は更に老中松平信綱を遣はしたので重昌自分の立場を恥ぢ、信綱の到着前に奮戰して討死した。

（3）信綱は翌十五年九州諸大名を指揮して遂に城を陷れ、賊徒を平げた。

（4）此の役に和蘭人は軍艦を以て海上から賊軍を砲擊して幕軍に應援した。

❸ **結果**　これから幕府は一層禁令を嚴にし、遂に鎖國令を布くに至つた。

五、鎖國（東京高・八高・神戸高商・早大・昭四高等試驗司法科）

【**標題**】　德川幕府の鎖國政策の由來と影響（四高）鎖國の意義並に其の影響（靜岡高・二高）　德川幕府の鎖國政策（大正大）江戸幕府の鎖國政策の由來（東商大）鎖國は日本の發達を妨げたか助けたか（山口高商・專檢）我國に於ける鎖國政策の成立と其結果につきて述べよ（陸士）

❶ **鎖國の意義**　德川幕府が天主教根絶の爲、海外交通を斷ち、外來文化の輸入を嚴禁せる外交狀態をいふ。

❷ **由來**（本章第三參照）

❸ **鎖國の影響**（利害―日本の發達を妨げたか助けたか）（考察點―明治以後の日本が人口增加・國土狹小、しかも國運發展して滿洲・支那事變に至る經過を鎖國と關連して考察するのは必要にして又興味ある問題である。）

甲、弊害の方面

（1）邦人の海外發展、冒險の氣象を挫折せしめ、保守的引込思案に陷らしめ、島國根性を强めた事。

（2）海外の事情に疎く、世界の進運から落伍した上に、東洋南洋の廣い土地を大部分西洋人の跳梁に委せ且世界文化に遲れた事。

（3）貿易の利を失つた事。

乙、利益の方面

（1）外來思想の爲に日本固有文化の特質を傷けられなかつた事。

（2）之迄の外來文化と在來の日本文化とを此鎖國二百年間に融合せしめた事。

（3）天主教傳播の弊害から免れ、二百年の太平がつゞけられ、國內產業の發達を促した事。

❹ **鎖國の終末―開國**　鎖國後約二百年をへて、露・英・米の各國が發展して東洋に手を伸ばし、何れも我國の開國を促し、嘉永六年ペリーの率ゐる米艦來航より、國論紛爭の後、和親條約をへて安政條約により、米・英・佛・露・蘭諸國と通商條約を締結し、鎖國政策を捨てゝ國を開く事になつた。

考察問題

1 **江戸時代初期**（家康・秀忠・家光時代）**の對外關係に就て記せ**（山口高）

【**綜合力のテスト**】　本章の一だけでいゝやうな問題と考へ易いけれども、之は結局禁教鎖國の問題まで行か

ねばならないから、受驗者としては書くべき事項が多過ぎて、之を如何に取捨綜合して表現するかに苦心が要る。そこが又出題者の狙ひ所である。歴史を學ぶといふ事は史實の輕重なく凡てを記憶する事でなく、主要なる史實を首尾一貫、前後脈絡を保つて覺える所に價値がある。かゝる廣範圍の問題は餘程要領よく書かなくては時間も不足し、用紙の餘白も足りない事になる。

優良答案　①家康はキリスト教は禁止して國土の安全を計つたけれども、貿易に於ては矢張り利益を修める目的を以て外國との貿易を非常に奬勵した。そして國民の海外に發展する者も多く、山田長政・角倉了以・茶屋四郎次郎・末次平藏・末吉孫左衞門・原田孫七郎・濱田屋彌兵衞等は遠く安南・シヤム・ゴアの附近まで貿易に出て行つた。併し此樣な形勢にあれば、勢ひキリスト教は秘密に入つて來て、キリスト教徒を一掃する事は出來なかつた。當時ヤンヨーステンや三浦按針が我國に漂着したのを、家康は江戸に招んで外交の顧問としてゐた。そして支倉常長の如きは遠くメキシコを經てローマに使する程、國は開國的氣運に滿々としてゐた。そしてオランダ・フランス・イギリス・スペイン・ポルトガル等は、長崎に來て通商に從事した。此頃國内の金銀流失は甚しかつた。

②秀忠も又家康の政策を墨守して、只貿易を奬勵してゐたので、外國貿易は益々盛んになつて來た。その爲キリスト教の禁令は出してゐたけれども、内實では非常に弘布されてゐたし、外國の書物は盛んに輸入されてゐたのである。そして貿易による貨幣の海外流失も非常に甚しかつた。

③家光は此のやうにキリスト教が依然として弘まり、弊害が續出したので遂に意を決して、貿易の利は捨てゝもキリスト教の禁止を徹底せしめる事の必要を痛感し、其爲には鎖國政策をとらねばならぬと考へた。そこで彼は寛永十三年我國民の海外にあるものゝ歸國を禁止するに至つた。そして外國書籍の輸入を禁止したのは勿論である。次に寛永十六年には、外國人（清・蘭兩國人を除く）の我國に渡航するのを禁じ、國内の外國人をも海外に追放して、此處に名實共に鎖國は斷行されたのである。そして清蘭兩國人は長崎に來て貿易する事を許された。蘭人は長崎の出島に蘭館を貰つて、それ以外には住まれないやうにされた。斯くして海外との交通は遮斷されて、國民は退嬰的となり、世界の進運に遲れるやうになつたが、國民的觀念は旺盛になつた。又朝鮮は家康の時から將軍の變る毎に信使を遣はした。

【山口高校教授講評】　前掲の模範答案は若干修正はしたが殆ど原文通りである。此程度に歴史事實を記憶し知識を整理し、しかも自分の文章にして居れば結構である。唯若干直接問題の核心に觸れぬ餘談風な部分があるのは玉瑕であらう。しかも**此答案は文字も綺麗で、鉛筆を使用してゐたが濃淡の度も適當であり、文字の大さも亦實に感じがよかつた。**（下略）（此の講評を見ても、單に内容のみでなく、文字の美・大きさ・濃淡等、結局見易く、美しくの注意の要る事がわかるう）（文部時報五九四號ノ二による）

2　徳川期に於ける日本の南洋貿易（名古屋高商）

【考へ方】　よく頭にはいつてゐないと、これは！　と思ふ問題なのだが、徳川期の貿易なら、鎖國の前か後かはすぐわかる筈、前の貿易なら、南洋方面に發展してゐたのはどんな人、どんな方法かと考へると、御朱印船が頭にうかぶであらうし、御朱印船がわかれば、末吉船の末吉孫左衞門、末次平藏、茶屋四郎次郎等々の名が出て來ると思ふ。若し之が「南洋」貿易でなくて「外國」貿易だつたら、かなり引つかゝる。鎖國の前はいゝとして其後、それから安政假條約以後迄まとめなくてはならぬ。危い！

重要個別問題

1　ヤン、ヨーステン Jan Josten（海員）

和蘭船の航海士。其の乘船（リーフデ號）が慶長五年豐後に漂着したので、徳川家康は同乘のウイリアム、アダム

ス等と共に江戸に召し、海外の事情を問ひ、邸宅を賜うて永く日本に居らしめ、外交・造船・航海の顧問にした。其邸宅のあつた所を八重洲河岸（ヤンヨーステンをヤエスといつて）といひ、和田倉門から馬場先門に至る河岸だといふ。

2 ウイリアム、アダムス（William Adams）（醫士・神戸高商・海機）英國人で和蘭船（リーフデ號）の航海長、船が豐後に漂着し、同船のヤン、ヨーステンと共に慶長五年家康に召されて外交の顧問となり、邸宅を賜はつた上、采地を相模の三浦半島の逸見村（今の横須賀市逸見町）に賜はつた。歸化して三浦按針といふ。水先案内を按針といひ、采地三浦郡をとつた名である。元和六年に平戸に歿した。邸宅のあつた所は按針町といひ、東京市日本橋區の町名として近年まで殘つてゐた。

3 出島（海機・山口高商）長崎港内の埋立地で、扇形をなし、陸地との間に溝を隔ててゐる。寛永十一年之を築いて葡萄牙商人を置いたが、島原の亂後之に退去を命じ、慶長十八年和蘭人を平戸から此所に移したので、蘭人は商館をたてゝ我國と貿易した。今は長崎市出島町といふ。

4 宗門改（東高師・國學院・岩手醫專）江戸幕府が天主教を取締る爲に設けた制度で、其の機關として幕府及諸侯に宗門改（フラタメヤク）役を置き、教徒の有無を檢察し、信否を審判した。方法としては寺請證文、人別帳による、**宗旨人別改**、踏繪其の他の方法がある。**寺請證文**は寺院に其の檀那寺である事を證せしめる文書、**人別帳**は戸籍簿、宗旨人別改は人別帳につき一家一人毎に比較對照して捺印せしめ、更に僧侶に證明させるもので、かくして出來た人別帳を宗門人別帳といふ。

5 踏繪（大阪商大・北大・奈良女高師・甲南高）江戸時代に天主教徒か否かを確める爲に諸人に踏ませた耶蘇又は聖母の像である。之をふませる事を繪踏といふ。寛永五年（家光時代）長崎奉行が始めたもので、最初は像を紙に書いて用ひたが破損し易い爲、後には木版銅版に改めた。繪踏は九州と江戸の庶民だけに行ひ、武士には行はなかつた。

6 鄭成功（海機・陸士・美術・京城大・六高）明の遺臣鄭之龍の子。芝龍が肥前平戸に數年逗留中田川某の女を娶つて成功を生む。四代將軍家綱の頃明亡んで清興るや、成功は清と戰つて破れ、魯王を奉じて臺灣に渡り、當時此地を占領してゐた和蘭人を追うて之を占領し此地に歿した。成功は明からその國姓朱を賜はつたので朱成功といひ、明人彼を敬つて國姓爺（コクセンヤ）といつた。

第二期　江戸幕府守成時代

第二章　江戸幕政紀綱の弛張

一、江戸幕府に於ける幕政紀綱弛張の大要

❶ 幕府初期の精神と時代の變化　幕府當初の精神は質實剛健、尚武の風を存したが、時代が移り、鎖國となつて外患を絶ち、國内が太平となつたので、次第に幕府創設頃の精神から遊離して、奢侈文弱に流れるやうになつた。

❷ 紀綱弛緩期　江戸時代を通じて最も華やかに奢に長じたのは綱吉將軍の**元祿時代**、家治將軍の**田沼時代**及家齊將軍の**文化文政時代**である。此時代は文化は發達したが紀綱最も弛み、幕政の衰退を見た時代である。

❸ 紀綱振肅期　幕政弛緩期の後には英主名臣が出て紀綱振肅を計り、幕政改革を行つて、幕政當初の精神に復歸しようとしてゐる。

（1）元祿時代の後に享保の治　吉宗の改革（武藝奬勵・風俗匡正・人材登用・公事方定書・實學奬勵・產業奬勵等）

（2）田沼時代の後に寛政の治　松平定信の改革（綱紀肅正・質素儉約・備荒貯蓄・風俗匡正・文武奬勵等）

（3）文化文政時代の後に天保の改革　水野忠邦の改革（奢侈禁止・風俗矯正・士風作興に努力）

二、德川綱吉の政治

甲、善　政

❶ **政治上**　大老酒井忠清の惡政あるにより之を退けて堀田正俊を大老とし、弊政改革、忠孝尊皇を鼓吹し、山陵を修理した。

❷ **學問**　好學の精神に富み、湯島に聖堂を建て、林信篤を大學頭に任じ、諸藩士に講義をきかせ、自らも書を講じ、一般に好學の風を促し、國民教化に影響を與へた。

乙、弊　政

❶ **宴樂**　大老堀田正俊が苛酷な性格の爲に怨を買つて殺害されて後、綱吉は政治に倦み、側用人柳澤吉保に政治を委せ、日夜宴樂に耽り紀綱紊亂。

❷ **佛敎耽溺の弊**　（1）熱心に佛敎を信じ、護國寺、護持院等の建立で財政困難となり（2）**生類憐みの令**を出し、特に自分が戌年（イヌドシ）なので犬數萬頭を養ひ、犬を虐待する者は嚴罰に處した。世人きらつて犬公方。

【德川氏系圖】

- 一 家康
  - 二 秀忠 — 三 家光
    - 四 家綱
    - 五 綱重 — 六 家宣 — 七 家繼
    - 五 綱吉
  - 義直（尾張）
  - 頼宣（紀伊）— 光貞 — 八 吉宗
    - 九 家重 — 一〇 家治
      - 宗武（田安家）— 定信
      - 宗尹 — 治濟
  - 頼房（水戸）— 光圀
  - 一一 家齊
    - 一二 家慶 — 一三 家定
    - 齊順 — 一四 家茂 — 一五 慶喜（齊昭の子）

❸ **惡貨改鑄**　宴樂と寺院建築等に加へて、江戸の大火と諸處の地震等の災害があつて、財政愈困難となつたので、勘定奉行荻原重秀の議を用ひて、慶長時代の良貨幣に雜金を混じて惡貨幣を改鑄し、錢價を落した爲に物價騰貴し、人民を苦しませた。

三、新井白石の事蹟（山形高・五高・八高・廣高・廣師・東檢）【類題】

事蹟の要項　政治上の改革四項—家宣・家繼二代に亘る事—通じて文治的（宮家—改鑄—使節—貿易）晚年の著作中有名のもの六種。

❶ **白石の登用**　白石名は君美、上總久留里の人、木下順庵の門人、有名な朱子學者で甲府家の儒講だつたが、家宣六代將軍となるや、白石を任用して柳澤吉保を退け、前代の弊政を改めさせ、七代家繼將軍の代にかけて種々政治上の改革を行つた。學者だけに、通じて文治主義的であり、精神的であつたから、元祿時代の奢侈の風は改まらなかつた。

❷ **改治上の改革**

甲、家宣の時

（1）**閑院宮家の創立**　室町幕府以來、皇室は供御豐かならぬ爲、皇子皇女は多く佛門に入る例だつた。白石深く之を嘆き、御料を獻じ、出家の例をやめて皇子を親王とし、皇女は降嫁せられる樣に建議した。此の爲、中御門天皇は御弟直仁親王を立てゝ閑院宮と稱せられた。

（2）**朝鮮使節待遇改正**　從來朝鮮は將軍の代る毎に慶賀使を遣はしたが、幕府の待遇が鄭重にすぎて國家

皇室御系圖（其十四）　二九〇頁より

- 一二 靈元 — 一三 東山 — 一四 中御門 — 一五 櫻町
  - 一六 桃園
  - 一七 後櫻町 — 一八 後桃園
- 直仁親王（閑院宮）— 典仁親王 — 一九 光格 — 二〇 仁孝 — 二一 孝明 — 二二 明治 — 二三 大正 — 二四 今上

の體面を汚し、又財政上にも大きな負擔だつたから、白石は之を改め、過分な待遇を廢した。

乙、家繼の時

❶ **貨幣の改鑄**　荻原重秀の惡貨改鑄で物價騰貴を來したので、之を良貨に改鑄して其弊を防いだ。

❷ **貿易の制限―長崎新令**　支那・和蘭の貿易額を一定し、支那には船八十隻を三十隻に減じ、銀六千貫迄とし、和蘭には船五隻を二隻に減じ銀三千貫に限り、且密貿易を嚴禁して金貨の流出を防いだ。之を長崎新令といふ。

【註】**貿易制限の必要だつた理由**　元祿時代の奢侈が贅澤な舶來品の輸入を高め、其の上當時の貿易は外國に商品を賣るよりは、外國から物品を買つて、慶長金の良貨幣で拂ふのだ。其上、金の相場が、歐洲よりも安かつたので、銀をもつて來て金を輸出するのが支・蘭貿易者の利益だつた。從つて、金銀の海外流出が夥しかつたので、貿易制限の必要があつたわけである。

❸ **著作**　家繼薨じて吉宗將軍となるや、退職して專ら著作に耽る事九年。著書三百餘の中有名なものは藩翰譜・古史通・讀史餘論・折焚く柴の記・西洋紀聞・采覽異言等。

【註】**白石の名著六種の內容。**

(1) 藩翰譜　關ヶ原役後、凡八十年間の、一萬石以上の大名三百三十七家の傳記、沿革を記したもの。

(2) 古史通　神代から神武天皇の初に至る迄の歷史の大要を記したもの。

(3) 讀史餘論　白石の歷史哲學ともいふべきもの。中古より筆を起して武家政治の變遷を述べたもの。

(4) 折焚く柴の記　白石の自叙傳。有名な幼時の刻苦勉學の模樣を記す。

(5) 西洋紀聞　寶永年間種子ヶ島に漂着した羅馬人を取調べた時の記錄で、西洋諸國の地理歷史を記し、又羅馬人の回答を記せるもの。

(6) 采覽異言　白石が和蘭人に就て西洋諸國の事情をきいて記したもので、我國の萬國地理の嚆矢。

四、德川吉宗の政治改革―享保の治（浪速高・東高師・海兵・陸經・美術・海機・昭五高等試驗司法科）

❶ **改革の主義**　白石の政治改革は文治主義なる爲に、元祿以來の奢侈の風がやまなかつたので、吉宗は「權現樣（家康）御定の通り」を主義とし、幕府創立當時の質實剛健の精神を作興し、尙武の風を盛にし、產業開發に努力したので、綱紀伸張し、治績大いにあがつた爲に、世に之を享保の治といひ、吉宗を中興の英主と稱した。

❷ **士風の振作**

(1) **風俗矯正**　自ら節儉の範を垂れ、上下の奢侈遊惰を禁ずる爲儉約令を出した。

(2) **武藝奬勵**　武士に水練・相撲・鷹狩其他の武藝鍛錬により剛健なる精神を作興した。

❸ **人材登用**

(1) **新人の拔擢**　大岡忠相、室鳩巢、青木昆陽等の能吏を登用した。

(2) **足高（タシダカ）の制**　之は從來幕吏が、退職後も其役高を貰つてゐたのを、在職中だけに限つて與へるもので、今でいへば職務俸の如きもの。

❹ **裁判の匡正**

(1) **公事方定書（クジカタサダメガキ）**　御定書百ヶ條ともいひ、裁判の公平を期する爲、家康以來の法令に範を取つて刑の適用を明かにした。又名奉行大岡忠相を江戸南町奉行に拔擢、從來の苛酷な拷問を廢した。

(2) **目安箱**　評定所に目安箱をおき、人民に投書させて、下情上達の途を開いて民政に心を用ひた。

❺ **財政政策**

(1) **貨幣の改鑄**　良質な享保金を鑄造し、通貨を收縮したので物價が下つた。

(2) **財政整理**—上ゲ米　元祿以來財政困難だつたので、救濟の爲に上ゲ米の制を定め、大名の祿高一萬石に付百石の米を上納し、其期間參覲交替を免除したが、一年で廢止になつた。

(3) **殖産興業**　荒地の開墾、甘蔗・甘藷の栽培・養蠶の奬勵、煙草・藍・櫨等の栽培をすゝめたので諸國の産業が大いに發達した。

❻ **學問の奬勵**

(1) **實學奬勵**　室鳩巣に命じ六諭衍義大意を書かせ、之を刊行して兒童に敎へさせ、青木昆陽に蘭學を學ばしめて、天文・曆學・醫學等の科學研究の便を多からしめた。

(2) **洋書解禁**　島原の亂後如何なる洋書も輸入を禁ぜられた爲に、外國の大勢や文化に接せぬ有樣となつてゐたのを、吉宗は天主敎關係以外の洋書の輸入購讀を許した。

❼ **民衆の愛護**　奥醫師に民間の治療をさせ、小石川に養生所を作り、吹上苑の櫻を飛鳥山・隅田堤・小金井等に植ゑて庶民の遊覽に供し、江戸市民に瓦屋根を勸め、火除地の設定・消防組の常置等、民政に盡した。

五、田沼父子の專横

八代將軍吉宗の次に家重・家治將軍職についたが、家重は多病、家治は聰明、濶達だが癖癖强く、共に將軍の器でなかつたので、田沼意次、意知父子が用ひられて專横を極め、政治の腐敗は極度に達した。この時代を田沼時代といひ、又田沼の濁りともいつた。

❶ **賄賂政治**　意次は家重の時信任されて大名となり、家治の時老中に出世し、子の意知も若年寄になつた。家治には政治の事を聽かしめず、畫道に心を向けしめ、政權を握つたので、幕府出入者は善美な贈物を以て田沼父子に取入り、田沼父子も公然之を受けるのみか、重稅を課し、賞罰を亂し、驕奢に耽つたので、賄賂公行し、政治紊亂、士風頽廢に陷つた。

❷ **天災と暴動**　當時、明和・安永・天明の間、大火・暴風・洪水・噴火等頻々と起り、天明の飢饉で奥羽住民の大半が餓死し、惡疫が流行する有樣で、人民は天災地變も田沼の惡政の結果だといつて幕府を怨み、江戸・大阪・京都には打壞(ブッコワシ)といふ暴動が起つた。

❸ **財政々策**　意次は金銀を海外から輸入し、貸金會所を設けて大名に貸付け、印旛沼、手賀沼の開拓、奥羽の開拓等に手をつけたが、其中失脚したので實行を中止した。

❹ **末路**　天明四年、意知が城中で佐野政言(トキ)に斬られたのが端緒となつて、意次の惡事も露見して罷免され、家齊が將軍となつてから其領地を奪はれた。

六、松平定信の政治改革—寛政の改革（廣高師・東高師・東外語・海機・東女高師・昭五高等試驗外交科・七年司法科・九年行政科）

第十一代家齊將軍は一橋家より入り、田安家の出なる松平定信を白河城主より首席老中に登用した。定信賢明、學識あり、在職七年、祖父吉宗の政に倣ひ、田沼の弊政を革めて寛政の治といはれる程の實績をあげた。其の政治改革の要點は左の如くである。

❶ **勤儉尚武**　田沼時代の士風頽廢の弊を矯め、率先儉約して模範を示し、奢侈を戒め、風紀を取締り、孝子節婦を表彰し、尚武の氣象を起す爲に鹿狩、流鏑馬(ヤブサメ)・相撲等を奬勵した。

❷ **財政整理**

(1) **棄捐令**　旗本は窮乏して負債に苦しんだので、定信は札差に對する負債の中、六年前のものは棄捐(キエン)させ（帳消し）、六年以内の分は年賦償還とし、利子を六分以内にした。

(2) **備荒貯蓄**　寛政二年發令して其後五ヶ年、祿高一萬石毎に籾(モミ)五十石宛を貯蓄せしめ、飢饉の爲の用意

をさせ、幕府も倉庫を設けて籾を貯へた。

❸ **人足寄場**　無頼の徒、出獄人を江戸石川島に收容し、人足寄場と稱し、職業を與へて正業につかせた。

❶ **學制改革**

（1）**異學の禁**　諸學隆興の爲に多くの學派が互に爭つたので、定信は國民の思想統一の立場及治安維持の目的から、朱子學派を正學とし、之を修めぬものは官に仕へさせず、他の學派を異學として抑壓した。之を寛政異學の禁といふ。

（2）**學問奬勵**　聖堂の學問所を昌平黌と改め、柴野栗山（シバノリツザン）、尾藤二洲（ビトウジシウ）等の學者を教授として武士・平民に其講義をきかせた。又和學講談所を設け、塙保巳一の爲の學問所とした。

❺ **皇居の造營**　光格天皇の御代に京都に大火があつて皇居も炎上したので、定信は古典に則つた大規模な皇居を自ら監督して造營し奉り、尊皇の心を現はした。

❻ **海防留意**　當時露國船北邊に現はれるや、自ら伊豆相模の沿岸を巡視し、大いに海防に努力した。

❼ **引退後**　在職七年で引退し、樂翁と號して文筆に親しみ、花月草紙・集古十種等多くの著述をした。

七、水野忠邦の事蹟―天保の改革（陸士・東高師・東女高師・一高・昭五―六高等試驗法五二號判檢事）

❶ **當時の世相**　文化文政の治といはれる太平時代は、松平定信の退いた以後の家齊時代で、江戸文化の爛熟期になつて居る。幕府の財政窮乏、士民太平に狃れて奢侈安逸、士風頽廢の一方、尊皇思想勃興して最盛期の幕府は衰兆期に一歩を入りかけ、大阪では大鹽平八郎が亂を起すといふ時に、老中水野忠邦が天保の改革を行つたのである。

❷ **改革の事業**

（1）**綱紀振肅**　大老以下役人を陶汰して人心を新にし、政治を簡明にし、節儉を奬勵した。

（2）**文武奬勵**　武術は流派に拘はらず其精神を重んぜしめ、高島秋帆を長崎から招いて砲術の訓練を行はしめ、昌平坂學問所の講義を公開し、公家の爲に京都に學問所を設けた。

（3）**經濟施設**　商人の株仲間を廢して物價の人爲的引上を不可能にし、商人の納める冥加金を廢し、金銀山を調査して其産出を計り、大阪の商人に利息付御用金を課し、印旛沼干拓を再興した。

（4）**外交**―文政打拂令廢止　外國との衝突を避ける爲、天保十五年、文政の打拂令を廢し、外國船には薪水食糧を給して歸らせる事に改めた。

❸ **改革の成功せざりし理由**　忠邦の改革は理想も大きく、積極・消極兩方面の施設をやつて、其成果の見るべきものがあつたけれども、（1）時既に平民の勢力大にして武士の力弱く、衰兆期の幕政輓回には困難であつた。おまけに、（2）忠邦は六萬石の譜代大名で、有力な大名の味方もなく、（3）其改革が急激嚴酷の爲に、却て人心を失ひ、遂に職を退き、改革の事業を全うする事が出來なかつた。

八、江戸時代の大名の地位と藩治の方針（昭九高等試驗司法科）

❶ **中央集權と地方分權との融和**　幕府は各種の大名統御方策を以て、一方には法度に違ふ事あれば、容赦なく削封・國替・改易・斷絶の處分を行つて中央集權の達成を圖つたが、他方に於ては軍役お手傳を命じ、藩治に對しては一切干渉せず、各藩の自主・自治を認めたので、全國の諸侯は各々小幕府の觀を呈した。

❷ **大名の社會的地位**　江戸時代の社會は武家を本位として組織され、町人農民は之に隷屬してゐたから武家が國民生活の中堅だつた。其武家階級が征夷大將軍を中心として結合し、將軍直屬の旗本御家人の外は全國の二百六七十家の大名に分屬してゐた。故に大名からいへば全國の武家の大多數を二百六七十個の小さい群

團に分ち、其群團の中心になつて藩といふ結合體を作り、其土地に住む町人（商工業者）農民等凡べての人民を率ゐて、其地方文化の開發に努めたのである。從つて

❸ **大名と地方文化**　或特別の地方に於ける武家及町人農民の幸不幸は、其地方の大名の賢愚、其の政策の可否などによつて大いに影響を受けた。

❶ **藩治の方針**　自主獨立を旨とし、經濟的に國を富まし、敎化によつて士氣を振興し、醇風美俗を養ふ事に努める大名が少くなかつた。

（1）**經濟政策**

（イ）**重農政策**　新田開發、灌漑、農法の改良、農民の保護をなし、

（ロ）**諸産業奬勵**　工業を奬勵し、林業を奬め、鑛山業、漁業などの發達に留意し、

（ハ）**重商政策**　陸上海上の通信交通を開き、商業を保護奬勵し、領内の貨物を賣出し、貨幣を蓄積する事に力めた。

（ニ）**節儉備荒**　消極的には質素儉約を奬め、其剩餘を蓄へて非常時に備へた。「入るを計つて出づるを制する」の政策であつた。

（2）**敎化政策**　江戸時代の中頃から、各藩ともに競つて藩校を興し、概ね江戸の昌平黌に倣つて學制を定め、朱子學を以て子弟を敎育し、又武道を敎へ士氣を磨く事に努力した。又一方領内の私塾・寺小屋などを保護して一般の人民にも敎化を施した。

九、江戸時代の名藩

❶ **前期**

（1）**徳川義直**　家康の子で、尾州家の始祖。戰國殺伐の風の殘つてゐる間に學問を奬勵、江戸上野の弘文館に聖廟を建て、孔子を祀り、又敬神の念篤く、神祇寶典を著はして神名を正し神道を明らかにした。

（2）**保科正之**　秀忠の子で、會津藩主。租稅を輕くし、酷刑を廢し、社倉法を行つて米穀を蓄へ、凶年に備へた。又儒敎を尊び山崎闇齋を聘して藩士に聽講せしめ、領内の孝子貞女の表彰を行ひ、神道を奉じ、尊皇の念が篤かつた。

（3）**徳川光圀**　頼房の子。水戸家の始祖。夙に農政に心を用ひ、備荒貯蓄、林業、牧畜を奬勵し、儉約を旨とした。又學問を好み、尊皇心篤く、大日本史を編纂して大義名分を明かにし、正成の誠忠をたゝへた。幕末に水戸藩が尊皇運動の第一線に立つたのも、亦其の遺風に鼓舞されたからである。

（4）**池田光政**　岡山藩主、綱吉頃の人、熊澤蕃山を登用して善政を行ひ、孔子廟を建て、閑谷（シヅタニ）學校を興して藩士を敎育し、經濟上では林業を保護し、治水事業に於て立派な事蹟を殘した。

❷ **後期**

（1）**細川重賢（カタ）**　銀臺公。家重頃の人、身を持して儉素、養蠶・製糸・機織等の産業を興し、米穀を蓄へ、刑罰を輕くし、學校を興し、人民を愛撫した。

（2）**上杉治憲（ハルノリ）**　米澤藩主、鷹山（ヨウ）と稱した。家治頃の人、細井平洲を聘して顧問とし、備荒貯蓄の法を設け、養蠶、絹織物、茶・漆等の栽培、杉・松等の植林を奬勵し、農家の副業に留意した。又藩學を興し、興讓館を建てゝ子弟を敎育した。

（3）**松平定信**　吉宗の孫、白河藩主。殖産興業に努め、備荒貯蓄の法を設け、儉約を以て衆を率ゐた。定信敬神の念篤く、藩校立敎館には孔子廟を建てずに天照大神の神位を安置して祭典を行つた。（家齊將軍の初め老中となつて、寛政の改革を成して名相の名を謳はれた事は既述の通りである。）

この他幕末には德川齊昭（水戸）島津齊彬（薩摩）鍋島直正（佐賀）山内豐信（土佐）等の名君が出てよく一藩を率ゐて國事に奔走した。

總合問題

1 鎌倉・德川兩時代の士風（陸士）

（1）**鎌倉時代**　源頼朝は平氏の滅亡にかんがみ、質素儉約を守り、武勇を勵まし、以て質實剛健の風を養つたから、武士は皆名を惜しみ命を輕んじ、義を重んずる所謂武士道なるものが出來た。それが北條氏に至つて益々盛になつたが、元寇以後衰へて來た。

（2）**德川時代**の其の初期には戰國の餘風で士風一般に質實だつたが、太平が長く續いたのと文敎奬勵との爲に、元祿時代以後、士風漸く軟弱になり奢侈となつたので、度々改革も企てられたが、なか〳〵なほらなかつた。

（3）**比較**　鎌倉の武士はまだ其階級勃興の當時に近く、やつとの事で政權を得て中心勢力になつたばかりの時代、公武抗爭時代だつたのに、江戸時代のそれは、既に武家中心勢力の時期が爛熟し、次の町人階級の擡頭する所まで進んでゐた。兩時代は曰はゞ青年と老年だけの時代的差異があつたわけだ。次に鎌倉武士はまだ地方土着散在生活をなし、生產者としての時代の武士で、所謂いざ鎌倉といふ時に地方から鎌倉へ集る用意をしてゐたのであるが、江戸時代の武士は、もはや城中心の都市に在住する消費階級としての武士になりきつてゐた點も著しい差異である。

2 德川時代の備荒貯蓄につきて知る所を記せ（廣高師）

【注意】通常松平定信の備荒貯蓄のみを述べたがる。しかし、諸侯が以前からやつてゐたのを綜合して書かせる所に問題の狙ひ所がある。

交通の相當開けた德川時代でも、山國たる日本では飢饉などの時、米穀を輸送する事が困難であつたし、又地方の藩内では藩主が民政に努力して、萬一にそなへる爲に米穀を貯藏したものは、天明などの大飢饉の時も餓死者を出さなかつた。中でも水戸の德川光圀、會津の保科正之（社倉法）熊本の細川重賢、米澤の上杉治憲、白河の松平定信など皆備荒貯蓄の施設をなした。其中松平定信は老中となつてから寛政二年諸侯に令して備荒貯蓄法を行はしめ、五ヶ年間祿高一萬石に付粳五十石を貯へしめた上、幕府も倉庫を設けて米穀を貯藏した。

3 德川時代に於ける諸藩の經濟行政の特色を述べよ（名古屋高商）

【名古屋高商教授講評】本問の解釋について受驗生は困難を感じたらしく（1）德川幕府の財政政策を論ずるものがあり、（2）また經濟行政を廣く解して藩治政策の全般に及ぶものあり、（3）或は共通の特色のみを指摘するものあり、（4）各藩のそれを一々列擧するものもあつた。二、三、四の解釋については必ずしも咎むる必要はないが（1）の解釋に就ては正當と認める事が出來ない。要するに此問題は受驗者の問題解釋力を記憶力と共に考査せんとしたものである。それが爲一部受驗生は成績不良であつたが、一方極めて優秀なるものもあつた。（文部時報五九四號ノ二による）

優良答案　幕府は全國を大小の藩に分つた。其中には親藩譜代及外樣の三種があつて、夫々大名は封建政治を行つたのである。其の中關ヶ原以後に於て德川氏に屈從した外樣大名は勿論、夫以外のものも最後には自力を以て立つ必要があつたので、皆自主獨立を以て藩治の基調として來た。其爲には經濟力の充實が先づ必要であつたから、諸藩擧げて之に全力を盡したのである。次に其大要を記さう。

一、重農政策　各藩は先づ農民の保護、農法の改善を實行し、或は溝・池を掘つて灌漑の便を計り、以て米作其他の增産を得て之を貯藏した。薩摩の煙草・阿波の藍等特産の首たるものである。

二、各種生産の奬勵　林業・鑛山業・工業・水産業等も奬勵した。尾張の陶器等名高いものであつた。

三、重商政策　各藩は其財力增進の爲に重商政策をとり、交通通信の安全、道路の改良等に力を盡して、自藩物産の領外の流出を計り、貨幣の流入を計つた。貨幣として幕府の發行した金・銀・銅錢以外に各藩夫々自藩の貨幣殊に藩札を造つて交換の便を計つたが、後にはその數の增加甚しく、かへつて圓滿なる商業發展を妨げた事も少くなかつた。

四、對外貿易　其の重商政策の中に含まれるが、幕府の初期に於ては對外貿易が許されてゐたので、中國九州等西國の諸藩の中には自ら御朱印船貿易を營んでゐたものも相當あつた。殊に鍋島・松浦・加藤及島津家は寛永十六年の鎖國令の後に於ても、琉球の手を通じて對外貿易を營み、之に依つて得た財は莫大なもので、維新に於ける薩摩の活躍に見ても首肯される所である。

大體に於て以上の如き經濟行政の狀況であつた。之に盡力した大名は多いが、就中水戸の德川光圀會津の保科正之・米澤の上杉治憲・熊本の細川重賢・岡山の池田光政及び白河の松平定信等最も有名である。

重要個別問題

1 元祿時代

將軍綱吉の時、元祿の年號十六年間、此年號の前後を通じて天下太平、世は奢侈の風に流れ、特殊の風俗と文化を生んだので、之を元祿時代といふ。

其の特色　(1) 勸儉の風すたれて奢侈遊惰となる。(2) 衣服調度贅澤となり、「元祿模樣」などが流行。(3) 淨瑠璃・芝居・能樂を始め、一般に軟文學大いに興り、美術工藝も特殊な發達をなした。

2 慶安の變

家光の頃から江戸の浪人由井正雪が軍學を講じ、又丸橋忠彌は槍術の師範だつた。家光薨じて家綱が幼少で將軍になると、此機に乘じて正雪忠彌と謀つて亂を江戸に起し、正雪は駿府に走つて駿府城を略取しようとしたが、事成らず、忠彌は捕へられ、正雪は自殺した。慶安の年號をとつて慶安の變といふ。

3 河村瑞軒

家綱頃の江戸の豪商。家貧乍ら敏捷で商機を見るに長じ、明暦の大火に木曾材を買收して巨利を得、土木請負で巨萬の富を得た。江戸と奥羽間の航海を改善し、大阪安治川を浚(サラ)つて氾濫を防ぐ等産業交通方面に功績が多かつた。

4 室鳩巢

駿臺先生と號し、朱子學を奉じ、八代吉宗將軍の侍講となり、政治上の顧問でもあつた。吉宗の命により六藝衍義大意を刊行して兒童教育に資した。

5 青木昆陽（廣高師）

江戸の人、儒學を修めて吉宗に仕へ、蕃薯考を著はして天下に頒ち、甘藷の栽培を奬勵したので、人民の飢饉から免れた者が多く、歿後其德を稱して甘藷先生といつた。昆陽は幕命により長崎に行つて蘭學を研究し、和蘭文字略考などの著述を出した。

第三章　經濟の進展

一、江戸時代の産業發達の原因

(1) 鎖國の結果、二百餘年に亘つて國内の泰平が打續き、(2) 國民の必要品は自給自足を要し、(3) 且は幕府の大名統御策として大名の參覲交代や工事手傳等で大名の財政窮乏を加へた爲に、幕府及大名は各藩の産業を積極的に奬勵する必要を生じ、(4) 之を便ならしめるものとして交通も參覲交替によつて發達して居り、(5) 都市も人口集中によつて膨脹してゐたので、之等が全體として産業發達の原因となつた。

二、農業の發達

❶ 發達の原因

(1) **農業の輕重**　我國は古來農を以て國本とし、又武家は其發生の本源に於て土地と農業と村落とに依據して居り、江戸期に於ても依然農業は經濟の基礎をなし、武家の所得は米穀にあつたから、重農思想自ら發達し、農民は武士の次に位して一面に抑壓され乍ら他面に愛護されてゐた。その上、

(2) **人口・農民の增加**　國内の人口著しく增加し、食物の需要從つて多く、又農民の數も增加したので、自然荒地の開拓が進み、農産額が激增した。

❷ 農事改良家・農業學說の輩出　重農思想に基いて農業學說が輩出し、(1) 家光の頃野中兼山は土佐の山内侯に仕へて造林・水田開拓を行ひ、(2) 熊澤蕃山は岡山藩に仕へて農政、殖林を奬勵し、又此地方が後に製鹽業の中心となる基を作り、(3) 宮崎安貞は農業全書を著はして我國農業書著作の魁をなし、貝原益軒・稲生若水等は本草學（植物學藥物學）を研究して利用厚生に資した。

❸ 幕府の奬勵

(1) **吉宗**　諸國に檢地を行つて田制を正し、水利を興し、開墾を行つたので米産增加し、世人呼んで米將軍といつた位であつた。尙吉宗は豐年には米を貯蓄し、凶年に之を賣出して米價調節を計り、甘蔗の栽培・砂糖の製法を研究せしめ、甘藷の植附を奬め、藥草を小石川の藥園に植ゑて醫藥の業に資し、オランダより良馬を求めて馬匹の改良に資した。

(2) **定信**　備荒貯蓄をすゝめて凶作に備へた。

❹ 各藩の奬勵（三〇九頁參照）

三、工・鑛・商業の發達

❶ 工　業

(1) **織物**　秀吉の頃西陣織が、家康の頃羅紗が作られ、友禪染（家光の頃）羽二重（家綱の頃）も織初められ、木綿は棉花の栽培の普及と共に一般の常服となつた。

(2) **陶器・漆器**　慶長の役に朝鮮の陶工を伴ひ歸つて有田・薩摩・萩等から陶器の名産が出るやうになり、江戸中期には九谷・萬古・清水・粟田などから産出。漆器は綱吉頃特に發達し、精巧美麗なものが出た。

(3) **職人制度**　通じて工業は家内工業であり、手工業であつて、親方が仲間卽ち同業組合を作り、親方の下の徒弟は幼少より業務を練磨して、熟達した後獨立し、仲間に加入する慣習であつた。仲間の間の規約は嚴重で、粗製濫造を戒め、信用維持に力めた。所謂職人氣質（カタギ）といふ義理堅い風習は此間に養はれたもので、各地の工業特産品は大抵この良い組織の下で行はれたものである。

❷ **鑛業**　鑛山業は戰國時代から急に進歩したが、家康は地下の金屬は公儀の物であると見て、佐渡・生野・院内・足尾・大森（島根縣石見國）など多くの鑛山を直營し、盛に採鑛させ、金座、銀座を設けて金銀銅貨を鑄造させた。

❸ **商　業**

（1）**配分・金融**　室町時代に進歩した問丸は交通の發達につれて今日の問屋となり、座は變じて組合組織となり、兩替や爲替の制度も發達したので、物資の流通が圓滑となり、商業は一層盛になつた。

（2）**掛屋と札差**　江戸時代の租稅は米納が原則で、之を扶持米として武士に分與し、武士は之を金に替へる爲に町人に依託した。この商人を大阪では掛屋、江戸では札差（フダサシ）といつて、後には武家に金錢を融通するやうになり、諸侯旗本の經濟上の實權は之等の商人に握られるやうになつた。

四、交通の發達

❶ **陸上の交通**

（1）**發達の原因**　（イ）幕府が交通整理に意を用ひて居り、（ロ）參覲交替制度で全國大名が多勢を具して時を定めて江戸に來たので、道路廣くなり、旅籠屋（タゴヤ）、人足、馬が備はり、一般の旅行も便利になつた。

（2）**五街道**　家康は東海道・中仙道・奥州街道・日光街道・甲州街道の五街道を定め、道幅五間、兩側に松・杉の並木を植ゑ、一里を三十六町とし、一里塚を作つた。

（3）**宿驛**　各驛には傳馬所を設け、公用旅行の人馬の徵集を掌らしめた。（イ）助郷（スケゴウ）　之は宿驛近傍の村々から人馬を徵發して不足を補助させるもので、一里以内の村々に課するを常とし、之を定助郷といひ、尙不足ならび十里以内、之を加助郷といつた。

（4）**飛脚**　書狀・小荷物の類を運送する郵便事務を扱ふものを飛脚屋といひ、特に差立てて急行せしめるものを早飛脚といつた。

❷ **水上の交通**

（1）**河川交通**　淀川・江戸川・利根川が最も多く利用された。河川開鑿に功勞のあつた人では保津・高瀨・富士・天龍の諸川に於ける角倉了以、淀川・安治川に於ける河村瑞軒がある。

（2）**海上交通**　鎖國の爲に近海沿岸の航路のみは盛であつた。敦賀中心の北陸航路、九州大阪間の瀨戸内海航路、大阪江戸間の東海航路、東北・江戸間の航路は、河村瑞軒の開くところ。

五、都市の發達

❶ **城下町**　大名の居住地は藩士の外商工業者が集中するので、城下町が各地に發展して地方の政治・經濟・軍事・文化の中心をなした。武家町は政治・軍事の、町人町は經濟の中心になつてゐた。

❷ **產業都市**　交通・產業の隆盛に伴ひ、兵庫・堺・新潟・長崎など百貨集散の商工業の中心である。

❸ **交通都市・宗教都市**　街道筋の宿驛船舶寄港の港町の如き交通都市、宇治山田・日光・善光寺の如き、神社・佛寺に依て興つた宗教都市もあつた。

六、貨幣・信用經濟の進歩

—德川幕府貨幣政策の變遷（昭七高等試驗行政科）

❶ **幣制の統一**　戰國時代には諸國が各々其領内で貨幣を鑄造したので、其品質形狀が一定せず、經濟上頗る不便だつたので、豐臣秀吉は之が統制に手を着け、家康に至つて整理がついた。

❷ **貨幣の種類**　金貨（大判・小判・一步判）銀貨（丁銀（チヤウ）・豆板銀等）錢貨（永樂錢・慶長通寶—後に寛永通寶が用ひられた）。

❸ **貨幣制度**　元祿に至り金銀を惡貨に改鑄してから、幕府は屢々之を良貨に、又時には惡貨に改鑄し、出目の利によつて歳入の不足を補つた。（慶長金銀貨は綱吉の改鑄で粗惡なものとなり、新井白石之を改め、吉宗に至り一時慶長古金銀の舊に復したが、其晩年低質の貨幣が出た。其後幕府は屢々改鑄を繰返して諸種の金銀貨を出し、以て財政破綻を彌縫せんとして次第に行詰つた。）以上の三貨には現今の如き本位貨幣と補助貨幣の區別がなくて、相互の間に交換歩合を定め、之を規準として相場が立つたので、兩替商が必要であつた。

❹ **紙幣**　幕府は幕末に至る迄紙幣を發行しなかつたが、各藩では藩札といふ其の藩限りの紙幣を發行した。

❺ **爲替と手形**　爲替は諸大名が國許から江戸に送金し、或は幕府が大阪から江戸に官金を送る時、手數や危險を省く爲に行はれ、民間でも取引の便宜上之にならふものが增加し、全國の主なる都會に行き亘るに至つた。手形は正貨運輸の不便を避ける爲に起り、次第に盛に行はれた。（家綱の時（寛文）越前松平家に始る）正貨準備のない所謂不換紙幣が多かつたので、經濟界を紊す事が多かつた。

考察問題

1 德川期に於て産業の發達を助成したる諸種の原因について述べよ（東京高）江戸の産業發達の狀況（大分高商）

（1）**都市の發達**　昔は城が要害の地に築かれたが、鐵砲傳來して戰術が變化すると、築城も平地に行はれ、從つて城下町が發達する。一方外國貿易が盛となつた爲に、海岸の都市が發達して來る。都市の發達は人口の集中を來し、從つて物資の必要上産業は發達して來る。

（2）**交通の發達**　都市が發達すると都市間の交通も發達して來るが、戰國時代、戰爭目的に必要な交通が發達してゐた上に、德川氏天下を一統して參覲交替制度を實施するに及んで、全國の大名の江戸參覲による交通が整ふと、物資の取引も從つて便利となり、こゝに産業の發達を促進する。

（3）**將軍・諸侯の産業奬勵**　幕府の大名統御策の一は大名の財力消耗にあつたので、諸侯は財政窮乏を補ふ爲に積極的に産業を奬勵した。又將軍としては吉宗の如き、諸侯としては池田光政・保科正之・細川重賢・上杉治憲等の産業奬勵は發達上に貢獻多大だつた。そして之等諸原因は結局

（4）**資本の發達**となり、資本が又産業を發達させる動力になつて來たのである。

2 元祿・文化及文政の奢侈と德川幕府の政策との關係（弘前高）

（1）**元祿時代**は綱吉が奢侈の模範を示し、上下柔弱遊惰にふけつた時代だつた。殊に將軍の奢侈が財政困難を招き、救濟策としてとつた荻原重秀の惡貨改鑄の一時しのぎが、物價を暴騰せしめるもととなり、米を俸給とする武士の一時的收入增加となつて奢侈の風を助長したわけである。

（2）**文化文政時代**は定信去つて後の家齊が、永年の政治にあきて奢侈になつた時だつた。奢侈の爲の財乏を惡貨改鑄で補つたが、此時は既に町人が擡頭して實力をもち、奢侈の風は益々ひどかつた。

3 江戸幕府の鎖國以後に於ける我が外國貿易の狀況を記せ（大分高商）

〔大分高商教授講評〕　本問の答案中には、鎖國以後貿易が極度に限定せられた事についての記述を缺いたものが割合に多かつた。之は鎖國が本來天主教禁止といふ政治的原因に依つた當然の歸結として、禁教の勵行と監視の便の爲に、我が國に來つて貿易し得る人のみでなく、其の貿易の場所を制限するに至つたものだ、といふ事についての理解を缺いたが爲ではあるまいか。又鎖國當初から貿易額が制限せられたかの如く書き、或は鎖國以後開國まで貿易上何等變化が無かつたと見なしたものが多く、從つて正德長崎新令について記述したものは僅少であつた。之は幕府の鎖國政策も始めは政治的要求に出發した爲に、貿易の內容に觸るゝ所がなかつたのであるが、其の後實物教訓の然らしむる所として之に經濟的要求が加へられた爲に、遂に貿易の內容に觸れざるを得なくなつたといふ鎖國政策其ものゝ變遷、從つて外國貿易の變遷についての注意を疎かにした爲であらう。（下略）（文部時報五九四號ノ二による）

優良答案　寛永十六年鎖國令が發布されてより、キリスト教に關係ある外國船は渡航を禁ぜられたが、宗教に關係のない支那・和蘭人のみ渡航を許された。しかし、それも長崎にのみ限られて居た。そして和蘭人は出島に移し、支那人は唐人屋敷に移し貿易に從事せしめた。よつて長崎は唯一の開港場となるに至つた。當時の貿易は正貨貿易であつたので、金銀の流出が甚しかつた。然るに將軍家繼の時新井白石の建議によつて貿易額が制限された。即ち支那船は年三十隻銀六千貫、和蘭船は年二隻銀三千貫と制限されたが、此制限のあつた爲密貿易が多く行はれた。

第四章　江戸時代の文化

一、江戸時代の文化の特色

❶ 江戸時代の社會情勢と文化發達との關係

(1) **文運と太平**　(イ) 幕府の實力で諸大名を統制し、周密な中央集權政策をとり（内政上よりの平和）

(ロ) 外交上鎖國政策をとり（外部の抗爭防止よりの平和）依つて三百年の太平を致し、其上に（ハ）幕府が學問、教化を尊重奬勵したので、學問教育大いに進み、生活向上して文化の發達を見た。

(2) **産業交通都市の發達と平民階級の勃興——國民文化發達上前代にない特色**　一般に經濟が發達し、打續く平和で各種の産業伸張し、交通發達と相俟つて、多くの都市の發達を促し、商業が盛になつたので、平民階級の社會的勢力が增大した。此事は從來嘗て見ぬ特色である。

(3) **三階級文化の融合**　平民の擡頭により、平民文化は前の時代から傳承した公家文化及び武家文化を融合して目覺しい發達をなし、一大文化を形成した。

(4) **文化の一般化**　從來の文化は多く特別の階級に限られるの觀があつたけれども、此時代に至つて國民生活の向上は遂に學問藝術など凡べて國民大衆の關はる所となつた。之れ顯著なる文化上の現象である。

❷ 江戸時代の文化の特色

(1) **文化中心の移動**　江戸時代の文化の殷盛を極めたのは時代的には元祿時代と文化文政の時代で、地理的には、前者が京阪地方中心であり、後者が江戸中心であつた。即ち元祿文化は京阪地方に、文化文政時代の文化は江戸に榮え、前者の華麗な風が、幕府初期の粗野、剛健、豪放の江戸文化を漸次上方化（カミガタ）して、後者の時代には上方風に洗錬され、澁味、さびが出て來た。

(2) **純日本式文化の一般化**　鎖國以來外國文化としては和蘭支那以外は輸入されず、從つて從來の文化の日本化が行はれた。即ち藤原時代に學問藝術が、中世（鎌倉・室町）に佛教が日本化し、更に江戸時代に於て學問・宗教・藝術の日本化を見たのである。

(3) **平民文化の一般化**　平民勢力の擡頭により平民文化が上層に迄普及し、美術・文學・歌舞音曲が著しく發達して、上下を通じて好むものが多くなつて來た。

(4) **諸學の發達**　儒教が學問の中心をなし、後には國學の勃興によつて尊皇思想が發達し、蘭學は吉宗の洋書解禁によつて勃興し、之等の諸學は幕末に至つて政治外交上の種々なる方面にも大いに影響した。

二、江戸時代學問發達の原因及其結果

【題題】江戸幕府は學問に對し如何なる態度をとりしか、又それにより如何なる効果が表れしか（佐賀高）

（一）原因

❶ **政治的原因**　德川氏が三代將軍頃迄、强大な武力と巧妙な組織、政策により幕府の權力を確立すると共に內は四民の生活安定、外は鎖國を斷行して國內平和を圖つたので、文敎隆興に都合のよい時代性となつた。

❷ **文化的原因**—皇室・幕府・大名の學問奬勵

（1）**皇室の學問御奬勵**　後陽成天皇和漢の學に通じ給ひ、朝鮮から傳つた銅活字に倣つて木活字を作り、日本書紀・四書等和漢の書籍を刊行せられ、之を慶長勅版といひ、後水尾天皇は和歌和學に達せられ、後光明天皇も亦儒學を好ませられた。

（2）**幕府の學問奬勵**　**家康**　家康夙に學に志し、文敎を興して泰平にしようと、京都から藤原惺窩を招いて講義をきゝ、又其高弟林羅山（信勝）を聘して顧問とし、古書を集め、書籍を出版し、學校を建て、文庫を設けて頻に學問を奬勵したから、文敎は次第に復興した。

綱吉　湯島に聖堂をたて、林家の私塾を上野から其傍にうつして學問所とし、羅山の孫鳳岡を大學頭として校務を掌らせ、朱子學を幕府の官學にした。

吉宗　學問を奬勵し、六論衍義大意を室鳩巢に著はさせ、洋書の禁を弛め、天文・曆數を自ら研究した。

（3）**各藩の學問奬勵**　一般に學問を奬勵し、學校を建て、學者を優遇したが中でも水戸・米澤・熊本其他の諸藩は、藩學が盛であつた。

（二）**結　果**

❶ 儒臣の登用出世と種々の學派が發生した事から、學問研究上の競爭が起つた。

❷ 漢學が盛になり、之が反動として國學が勃興し、白石の采覽異言や吉宗の洋書解禁等により、西洋學術が傳來した。

❸ 漢學の中でも朱子學が官學となり、其大義名分の思想は尊皇論の基礎となり、漢學者の著はす國史の研究亦其歸趨を同じうし、漢學の反動として起つた國學は、古語古典の研究から國體の眞義を唱へるに至り、相集つて尊皇論の根柢となつた。

❹ 西洋學術は蘭學を通じて入り來り、海外の事情がわかるにつれて海防論が起り、開國說となり、國學蘭學が幕末に於ける思想界を支配するに至つた。

三、江戸時代儒學の代表的學者

❶ **朱子學派**

（1）**初期**（家康時代）

（イ）**藤原惺窩**　歌人藤原定家の末裔で朱子學に通じ、近世儒學の祖といはれ、屢々家康に經書を講義した。

（ロ）**林羅山**　惺窩の高弟で、本朝通鑑（フガン）を編纂し、又江戸の上野に家塾を設けて子弟を敎育した。

（2）**中期**（綱吉時代）

（イ）**林信篤**　羅山の孫、綱吉に仕へて大學頭となり、湯島に聖堂が造營されて其祭主となり、後私塾で子弟を敎養した。

（ロ）**木下順庵**　京都の人、加賀の前田侯に仕へ、後綱吉に用ひられた。門下には新井白石・室鳩巢等名士輩出。

（ハ）**山崎闇齋**　京都の人、朱子學を土佐の谷時中に學び、京都・江戸に相次で塾を開き門弟數千人。會津の保科正之に仕へ、藩の敎育を振興して會津武士の精神を作興し、京都に歸つて神道を研究し、垂加流神道を起した。

（二）**貝原益軒**　筑前の人、順庵・闇齋に學び、平易な文章で教育・道德・衞生に關する多くの著述をなし世を益した。

❷ **朱子學以外の學派**

（1）**陽明學**　中江藤樹が始めて主唱、實踐窮行を重んじ、門人に熊澤蕃山・大鹽平八郎等がある。

（2）**古學**　伊藤仁齋・其子東涯が京都に出で、朱子說は佛敎・道敎の思想を混ずるから、古に復つて儒學の本義を究めねばならぬと說いた。

❸ **古文辭學**　荻生徂徠は聖人の道を究めるには古書・古文辭を明かにするを要すと主張した。徂徠は江戸の儒者で政治經濟の學を專攻し、極端なる支那崇拜家で有名。綱吉に經書を講じ、柳澤吉保の寵を受けた。

四、江戸時代儒學の國風化及國民思想に及ぼした効果

❶ **儒學の國風化**　本來支那に發達した儒學は、日本に傳來して江戸時代になつてから非常に興隆したが、支那傳統の學說を墨守せるものでなく、夫々獨創の見を立て、國風化したものである。

（1）**神道・王道と儒學**　古學派・古文辭學派の如きは、神道と儒學とを連關せしめる說を立てた。始め京學派の藤原惺窩は神道と儒學とは各異なるも實一なりと稱し、林羅山は神道は王道、王道は儒道なりと說いたが、山崎闇齋に至つて我國民精神に基づいて垂加流神道を立て、其門流によつて日本魂の說が述べられ、大義名分が說かれた。

（2）**國史研究と儒學**　光圀の大日本史・賴山陽の日本外史・栗山潛峯の保建大記・山鹿素行の武家事紀・淺見綱齋の靖獻遺言等、儒學研究が國史研究に向つた事も、儒學者の國民的自覺を語る著しい事である。

❷ **國民思想に及ぼした効果**　儒學の興隆は、江戸時代の國民生活上に次の如き點に於て大きな影響を與へた。

（1）**武士道精神の完成**　主從關係や大義名分の如きものも、從來は實際の恩義によるものだつたが、漸次觀念的なものになり、主從は三世とか忠臣は二君に仕へず又忠孝一致などいふ思想が、儒敎の感化をうけて確立するに至り、本來固有の道德だつた大義名分の思想が倫理的基礎をもつやうになつた。

（2）**尊皇・皇政復古**　儒學の研究で大義名分が明かとなり、國民的自覺を生じて、尊皇論を喚起し、皇政復古の運動を興すに至つた。

（3）**武士道精神と町人階級**　武士道の主從關係は町人階級に波及して、主人と手代との關係に及び、又義理が社會生活上非常に重んぜられ、商人間には約束が重んぜられて來た。義理の柵（シガラミ）と人情との衝突からの悲劇を扱つた近松門左衞門の戲曲、瀧澤馬琴の小說などは此思想の表はれである。

五、江戸時代の學校—江戸時代に於ける武士敎育及庶民敎育の施設を記せ（新潟高）

❶ **昌平黌**（高檢・大阪高商・四高）　昌平坂學問所といひ、幕府の直轄學校である。もとは林家の塾だつたが、五代綱吉の時、湯島に聖堂を營むに及んでこゝに移され、松平定信の時幕府の學校とし昌平黌と改められた。此所では有名な學者に講義をさせ、武士はもとより平民にも講義をきかせた。明治に至つて昌平學校といひ後に大學校と改めた。

❷ **藩學**　各藩で藩士の敎育の爲に建てたもので、弘道館（水戸）明倫堂（名古屋）養賢堂（仙臺）興讓館（米澤）造士館（鹿兒島）日進館（金澤）明倫館（萩）時習館（熊本）などが最も有名である。

❸ **私塾**　學者の個人經營で、有志に對して敎育を施した。山崎闇齋・伊藤仁齋などが有名である。

❹ **寺子屋**　幕府や各藩の敎育は武士敎育が主で、庶民には殆ど及ばなかつたが、岡山藩池田光政が閑谷（シヅタニ）校を創めてから諸藩に藩民敎育を促し、又庶民の勢力擡頭と共に、寺子屋・手習師匠が到る所に出來て、極く初

歩の讀書・習字・算術を教へた。吉宗は六論衍義大意を江戸の寺子屋八百餘箇所に賜つて教科書にさせた。

附―庶民教育としての心學　享保の頃石田梅巖が京都に講席を開いたのが最初で、梅巖の孫弟子、中澤道二が江戸に道場を作り、柴田鳩翁に至り益々普及した。心學は神儒佛三教等を調和した通俗的道德講話で、面白くて爲になり、大いに庶民の歡迎を受けた。

六、江戸時代に於ける蘭學の發達（四高・浦和・姫路・山形・松江各高・陸士・海兵・神皇・高檢・專檢）

【類題】 明治維新前に於ける西洋文明輸入の概要（新潟高）江戸時代洋學の興隆及其輿論に及ぼしたる影響（六高）

❶ 禁書令下の洋學　鎖國時代の長崎出島は、歐洲唯一の通商國和蘭の貿易地として、商人學者文人が此地に集まつたが、洋書も漢譯洋書もよむ事が出來ぬ爲に、纔かに通事（通譯）のことばを通して、西洋事情を知るに過ぎなかつた。それでも、綱吉時代に通事西川如見は華夷通商考を著はし、安井算哲は天文・暦數の學を修めて、暦學を改め、天球儀・地球儀を作つた。

新井白石は伊大利人シローテが宣教の目的で渡來し、捕へられて江戸に送られた時紀問の任に當つた際、彼に聞き得た事柄を書き取つて西洋紀聞、采覽異言を著はした。白石が洋學の祖と謂はれるのも此事からである。

❷ 洋書解禁　吉宗洋學の必要をさとり、天主教以外の洋書輸入を解禁してから、青木昆陽を長崎にやつて蘭學を學ばせ、昆陽は通事に學んで刻苦數年、僅かに數百語を覺えて江戸に歸り、和蘭文字略考、和蘭語譯等を著はし、之より蘭學を學ぶ學者が多くなり、漸次勃興する事になつた。

❸ 蘭學の勃興

（1）前野良澤・杉田玄白が醫學研究上から刻苦して和蘭の解剖書を譯し、解體新書を著はした。

（2）大槻玄澤は和蘭文法書を飜譯して蘭學階梯を著し、學習上の便宜を與へた。

（3）ドーフがハルマ辭書を改譯してから蘭書の研究が非常に便利になつた。

（4）最初は醫書から出發し、次いで、地理・博物・天文・暦學・物理・化學・兵學等に至るまで、普く西洋の近世科學の研究に從ふ事となつた。

（5）蕃書調所（シラヤドコロ）　文化八年、幕府は飜譯局をおいて大槻玄澤を之に當らしめ、後洋學所と改稱して洋學教授の場所とし、更に蕃書調所と改稱。（後に大學南校となり東京帝國大學の前身になる）

❹ 蘭學の影響

（1）**兵學砲術の輸入と海防**　高島秋帆は洋式砲術を學び、門人江川坦庵は西洋の兵學砲術を研究し、菲山に反射爐を築いて大砲を鑄造し、品川に砲臺を築いた。

（2）**開國論―蘭學よりの輿論化**　蘭學の興隆により西洋の事情が明かとなるや、無謀な攘夷論の不可能をさとつた高野長英・渡邊崋山などは、迫害の裡に開國の必要をとき、開國進展の氣象を起させた。

七、江戸時代に於ける諸學（狹義）の發達

❶ 數學　綱吉時代の幕府の勘定吟味役關孝和はニュートンに比肩し得る世界的大數學者で、其發明にかゝる點竄術は現今の代數・幾何・三角・微分・積分等の諸術を兼ねたものである。

❷ 暦學　安井算哲（名は春海）も同時代の人で、天文を觀測し、支那暦の缺點を改めて新しい貞享暦を制定した。

❸ 地理學　家齊の頃、長久保赤水は經緯線を引いた日本地圖を作り、寛政の頃高橋作左衞門は世界地圖を世に送り、門人伊能忠敬は西洋人をも驚かす日本海沿海實測圖を作つた。

❹ 理學　平賀源内は本草學者であつたが、博物學・物理學を研究し、火浣布・電氣機械を製作した。

❺ **本草學**　野中兼山、熊澤蕃山、宮崎安貞、稻生若水、貝原益軒等（前出）

❻ **經濟學**　幕末の佐藤信淵は代々農學研究の家筋で、農政本論の外混同秘策、經濟要錄等を著はし、蘭學國學にも通じてゐた。同じ頃の二宮尊德は報德主義を提唱し各地の開發、水利殖産興業につくし、經濟の道を敎へ、諸家の窮乏、農民の疲弊を救つた。

八、江戸時代に於ける國學の發達と其影響（北大豫・早高・海護・神皇・陸經・大阪外語・東高師・昭一一高等試驗司法科）

國學とは我國の古典（古事記・日本書紀・萬葉集等）や古語を研究して、古代の思想や制度、歷史を明かにし、我國體の由來を知らうとするもので、江戸時代の漢學隆興の反動として勃興し、其結果は尊皇論の烽火（ノロシ）となつたものである。今其學者をあげれば次の如くである。

❶ **契沖**　元祿頃の大阪の僧、古語古典の研究により始めて國學を興し、皇政維新の思想的根柢をなした。水戸光圀の爲に萬葉集の註「萬葉代匠記」（二十卷）を著はした。

❷ **荷田春滿**（カダノアヅママロ）　吉宗頃の京都の神官。國史・國文を研究して、國學の勃興に多大な貢獻をした。當時の漢學者が支那崇拜に沒頭してゐるに對して「ふみわけよ、大和にはあらぬ唐鳥のあとを見るのみ人の道かは」と詠じた事は有名である。

❸ **賀茂眞淵**　春滿の門人、盛んに儒敎を攻擊し、我國獨特の古道を力說し、古典の外に萬葉集の研究をなし、國學の啓發に貢獻した。

❹ **本居宣長**　伊勢松坂の人で賀茂眞淵の門人、古典研究により古道を明かにし、佛敎儒敎を排擊して敬神尊皇の大義を說き、國學を大成した。多くの著作中有名なのは古事記傳である。

❺ **平田篤胤**　秋田の人、宣長の門人で神道を唱へ、儒佛を排し、敬神愛國の說を主張し神道を創始した。春滿・眞淵・宣長・篤胤の四人を國學の四大人といふ。

❻ **塙保己一**　武藏の人、盲人ながら博覽强記で古書を集めて群書類從を編纂し、家齊の保護を受け、江戸麹町に和學講談所を設け、國學の發達を助ける事が大きかつた。

❼ **伴信友**　若狹の人、博覽强記、考證に長じ、古史の研究を本領とした。

【東京高師敎授講評】　近世國學の發達が、聽て國體觀への反省、尊皇思想の勃興を促し、明治維新の重要なる伏線として意義多き事に言及したものが少くなく、一般には相當の考察的理解を示せる如くであるが、それも多くは比較的抽象化された常識概念を附言した程度で、具體的に相互の連關を認識せるものと思はれない點の見えるのは遺憾である。記叙の內容も抽象化された事項をただ羅列するといふ風が多く、恐らくそれは短時日の中に敎科書や表解式の受驗參考書類を單に記誦し來つた結果であり、平素の理解が一般に生硬不十分である事を思はしめるのは、歷史敎育上特に反省しなければならぬ點である。（文部時報六三一號ノ二による）

九、江戸時代の國史の研究と其影響（二高・成蹊高・海護・神皇）

【注意】　此問題で影響の方はわかる。國史の研究を單に國學者系統のみに考へず、漢學者のそれを落さぬやうに注意せねばならぬ。通常、漢學の勃興、國學の發達各が別項目で敎科書などに出てゐるのを、國史といふ事に限定した所に、出題の巧妙さもあるし、ひつかゝる點もある。面白味もあるといふもの。

家康の學問奬勵は主として漢學中の儒學にあつたが、儒學皇が尊賤覇の思想から、國史の研究に進み、漢學の反動で國學者が擡頭した。概觀すれば漢學者は多く國史を著はし、國學者は多く古書の注釋を事とした傾向がある。

❶ **漢學者の國史研究**

（1）**本朝通鑑**（ツガン）　幕府が林羅山、鵞峯父子に命じて神代から後陽成天皇迄の國史を、宋の資治通鑑に倣つて

漢文で編年體に編纂させたもの。廿數年を要し、三百十卷ある。

(2) **大日本史**　德川光圀が多くの學者を集め、神代から後小松天皇迄の國史を、支那の正史の體裁で編纂したもので、三百九十七卷。南朝を正統とした事、光圀の精神として大義名分を明かにする點が全卷を貫いてゐる。

(3) **讀史餘論・古史通**　新井白石の著で、前者は中古の中頃から筆を起し、武家政治の變遷を述べたものであり、後者は神代から神武天皇の初に至る迄の歷史の大要を記したもの。

(4) **中朝事實**　山鹿素行が我國の歷史を述べて國體の本義を宣揚したもの。

(5) **日本外史**（東京商大）**日本政紀**　賴山陽の著で、共に政權の推移を叙して武門の橫暴を憤り、尊皇抑幕の意を寓したもの。平易な美文で廣く愛讀され、勤皇の志氣を鼓舞する事が多かつた。

❷ **國學者の國史研究**

(1) **荷田春滿**　古事記、律令格式等を研究し國學を鼓吹した。

(2) **本居宣長**　古事記を研究して古事記傳を著はした。

(3) **平田篤胤**　古史成文・古史徵を著はして國體を闡（セン）明した。

(4) **塙保巳一**　古書を蒐集し、群書類從を編纂して、國史の研究に貢獻した。

❸ **國史研究の影響**　政權武門に移つて數百年、國民中には將軍あるを知つて天皇の尊嚴を知らぬものが多かつたのを、漢學者國學者の國史の著述、古史の解釋書が出て國體が明徵され、尊皇論勃興の由來をなしたものである。

參考　江戸時代に於ける國史、古典の研究に就いて記し且其尊皇思想の勃興を促せる理由を說明せよ（松本高）

松本高校受驗者の拙劣なる答案（多數の中）の二三の例。

第一例　江戸時代に於ける國史・古典の研究は本居宣長等の國文學者によつてはじめられた。古事記・日本外史等の國史が世に表はれるや國文學者は之が研究を進めて遂に我國體を明らかにし多くの尊王論者が出て幕府と爭ふやうになつた。

第二例　江戸時代に於ける國史・古典の研究は立派な多くの學者がいろ〳〵と研究した。その代表的なものとしては水戸光圀の大日本史が最も有名で中江藤樹貝原益ケン山鹿素行等の有名な大學者も出で賀茂眞淵本居宣長等の國學者も輩出した。

第三例　江戸時代に於ては實に國史及古典の研究が盛になつた。國史に於ては日本書紀の續篇及神皇正統記、古典では萬葉集、古事記傳等が著はされ、學者では本居宣長、北畠親房などが居つた。

題意から見て不足、誤り等諸君の檢討に資する。どの例を見ても如何にも筆答が苦しさうである。

一〇、江戸時代の國文及通俗文學

漢學は主として智識階級の間に弘まつたが、之と同時に國文・和歌も盛となり、特に町人階級の發達に伴ひ、通俗なる平民文學が目覺ましい發達をした。今此各方面の名高い人をあげて見る。

❶ **國文・和歌**　鎖國後外國文化の刺戟少く、退いて靜かに自國文化を顧みたので、國文國學が發達した。

(1) **僧契沖**　（三二八頁參照）

(2) **北村季吟**　和歌・國文を善くし、源氏物語・枕草紙などの古書の註釋を著はし、綱吉に用ひられて歌學方となつた。

(3) **賀茂眞淵**　（三二八頁參照）

(4) **上田秋成**　大阪の人、吉宗の頃、國學を修め、國文和歌に長じた。雨月（ウゲツ）物語が其傑作。

(5) **加藤千蔭**　家齊の頃、賀淵に國文を學び、和歌に長じ、萬葉集略解を著はす。書も巧み。

(6) **村田春海**　眞淵の門人、國文・和歌にすぐれてゐた。
(7) **香川景樹**　家齊時代の人で、和歌に長じ、其派を桂園派といふ。

❷ **戲曲**　始めは英雄物語や佛說を述べた歌詞を三味線に合せて謠うたもので、操芝居（アヤツリ）と結びついて次第に發達した。

(1) **近松門左衞門**　綱吉頃の人、歌舞伎の臺本及淨瑠璃の作者として有名、傑作が多い。
(2) **竹田出雲**　綱吉頃の人、大阪竹本座の主となり、近松に學び、淨瑠璃假名手本忠臣藏等の傑作がある。

❸ **小說**　歷史上の物語や佛教の因果應報、勸善懲惡の物語を述べたものや、輕妙な諷刺ものなどが多い。

(1) **井原西鶴**　將軍綱吉頃の大阪の人、其作浮世草紙の如き、人情風俗の表裏を露骨に書いた。
(2) **瀧澤馬琴**　家齊時代の江戸の人、山東京傳に師事し、小說の大家で、南總里見八大傳の大作がある。
(3) **山東京傳**　家齊時代の江戸の人、輕妙な滑稽を交へた文章で黃表紙・洒落（シャレ）本を書いた。
(4) **十返舍一九**（ジュッペンシャイック）　家齊頃の人、道中膝栗毛（彌次喜多）の著者として名高い。
(5) **式亭三馬**　家齊頃の人、名作は當世浮世風呂、描寫が精細で皮肉たつぷりである。

❹ **俳諧**

(1) **松尾芭蕉**　綱吉頃の人、伊賀に生れ、江戸に俳諧を學んで一新機軸を出し、其中興の祖といはれた。
(2) **與謝蕪村**　吉宗頃の人、丹後に生れ京都に出た。俳諧に長じ、畫も巧みだつた。

❺ **狂歌・川柳**

(1) **太田南畝**　家齊頃の人、蜀山人と號し、博覽多識で狂歌に長じ、文も巧みであつた。
(2) **柳井川柳**　俳諧から轉化した川柳といふものの名匠で、諷刺、諧謔が自由な爲に江戸の町人間に流行した。

二、江戸時代の佛教（海機）

❶ **鎖國前の幕府と佛教**

(1) 家康は佛教の勢力を認め、諸大寺に寺領を與へて保護した。一方寺院諸法度を設けて嚴重に監督し、本願寺を東・西に分けて其勢力を割いた。
(2) 家康は天台宗の天海・禪宗の崇傳を用ひて政治・學問の顧問とした。日光廟、上野寬永寺建立は天海の議によつたものである。
(3) 佛徒の唱へる因果應報・輪廻轉生（リンネテンジャウ）說は勸善懲惡の敎化上に効果が大きかつた。

❷ **鎖國後の佛敎**

(1) 家光は天主敎根絕の手段として、全國民を何れかの佛敎宗派に歸依せしめたので、恰も國敎の如くなり、寺院は宗門帳を作つて人民の生死婚姻まで記すやうになつた。爲に寺院と檀家の間が密接となり、初めの程は社會秩序維持の上に功があつた。しかし、一般信仰は漸く形式的のものとなつた。
(2) 中期以後は經濟上の地位、權力に安んじて心奢り、修養研學もせず、墮落萎微して振はなかつた。
(3) 家綱の時、明の僧隱元が歸化し、禪宗の一派黃檗宗を傳へ、宇治に萬福寺を建立した。

三、江戸時代の美術工藝（山形高）

【一般的特色】 江戸時代は打續く太平で美術工藝隆盛、殊に元祿及文化・文政の時代には上下華美に流れたので其の發達が著しかつた。其中でも建築・彫刻は前代の清新な特色を失ひ、形骸維持に止つたが、繪畫だけは最も特色を發揮した。浮世繪の如く外來美術の影響を受けず、純然たる日本的繪畫として發達した如き

は當代の特色である。

(一) 繪畫　當代に榮えた繪畫は前代からの狩野・土佐兩派及新興の浮世繪である。

❶ 家光時代

(1) **狩野探幽**　京都の人、永德の孫、幕府の繪師となり、當時盛に造營された廟舍、社寺に靈筆を振つた。

(2) **土佐光起**　京都の人、土佐派を再興、朝廷の繪所に仕へ、光長・光信と共に土佐の三筆といはれた。

(3) **岩佐又兵衛**　京都に出て土佐派を學んだが、遂に當時の平民風な風俗畫たる浮世繪を創始し、名聲を增した。

❷ 綱吉時代—元祿時代

(1) **英一蝶**　大阪の人、本名は多賀信香、江戸で狩野派を學んだが、舊來の諸派の傳統を破つて一派をなし、輕妙な筆致と奇警な意匠で當時の風俗を描き、人物花鳥が巧みだつた。綱吉の政事を諷した畫をかいた爲に三宅島に流され、配所で蝶の花に戯れるのを見てゐた時に、赦免の報が來たので英一蝶と改めたといふ。

(2) **尾形光琳**　畫を狩野・土佐兩派に學び、本阿彌光悅に蒔繪を習ひ、光琳蒔繪を創始し、又書も上手だつた。

(3) **菱川師宣**　初め土佐派を學び、元祿時代に浮世繪を習つて菱川派を開き、浮世繪を版畫としたので、益々廣く行はれた。

❸ 家治・家齊時代

(1) **與謝蕪村**　家治頃に、支那の明・清で全盛を極めた文人畫で一家をなした。俳人としては既述。

(2) **池野大雅**　文人畫の大家で蕪村と併び稱せられ、性質淡泊、奇行に富み、畫風も瀟洒で氣品があつた。大雅は亦書道の達人である。

(3) **圓山應擧**　丹波の人、京都で狩野派を學び、後一派を開いて宋明清の畫風から脫した我國特有の畫趣を發揮し、人物、花鳥蟲魚、皆堂に入つてゐた。

(4) **谷文晁**　文化文政頃の江戸の人、當時蘭學の發達に伴ひ、西洋畫が輸入され、文晁は從來の諸派に洋畫を配して一派をなし、山水畫をよくし、特に好んで富士を畫いた。

(5) **浮世繪諸家**　喜多川歌麿は美人畫に、安藤廣重は風景畫に、歌川豐國は俳優の似顏、錦繪に秀で、葛飾北齋は彫刻から浮世繪や狩野派を學んで北齋派の一派を立てた。何れも天保文化文政頃の浮世繪の大家である。

(6) **司馬江漢**　我國洋畫の率先者であり、油繪の元祖である。家治頃の江戸の人、初めは浮世繪をやり、長崎に蘭語と洋畫を學んで油繪の元祖となつたのである。

(二) 彫　刻　佛像彫刻は前代から引續いて振はず、寧ろ建築の裝飾及工藝方面で著しい發達を見たが、餘りにこみ入りすぎて、建築の裝飾が却つて其本來の美を害する位だつた。名匠としては左甚五郎、甲良宗弘。

(三) 建　築

❶ 寺院建築　從來通り各樣式を混用したものであつたが、黃檗宗の傳來に伴ひ、明(ミン)の建築が傳はつた。當時のもので有名なのは江戸の淺草寺・京都東寺の五重塔・信濃の善光寺など。

❷ 廟建築　當代全盛の樣式では之れ、佛寺と神社と墓との三つを兼ねてゐる。例へば家康の日光東照宮・家光の大猷院廟等各將軍の廟が作られた。

❸ 神社建築　權現造の樣式が發達した。

❶ **其の他**　城廓・住宅の建築は前代と變らない。

(四) 工藝

❶ **蒔繪**　室町時代から非常に衰へてゐたが、家光の頃から盛になつた。

(1) **本阿彌光悦**(名古屋高商)　家光頃の人で蒔繪を再興し、且之に新案を加へた。書道も上手だつた。

(2) **尾形光琳**　元祿時代の人で狩野派土佐派を學んで繪の名手となり、書畫蒔繪を習つて新意匠をこらし、其畫風は染織・陶磁器などに應用されて光琳蒔繪を起した。古今獨歩といはれた位である。

❷ **其他**　陶磁器には京都の仁清、乾山、九州の柿右衞門が殊に名高く、織物は西陣が愈精巧になり、京の宮崎友禪により友禪染も始められた。

考察問題

1 奈良平安兩朝と江戸時代とに於ける漢學の概況及相違點(論士)

① 概觀

(1) 奈良平安時代の漢文學　奈良時代は唐との交通頻繁で留學生・留學僧が漢文漢詩に巧みであつた。平安朝に至つては、桓武天皇以下數代の御奬勵と諸家の私立學校設立によつて、平安朝初期には非常に盛であつたが、遣唐使の廢止以後、次第に衰運に傾き、之によつて國文學が隆盛となつた。

(2) 江戸時代の漢文學　幕府の方針が文治主義で漢學中の儒學が幕府の官學となり、家康・綱吉などの奬勵と印刷術の發達により、早期からこの時代を通じて盛であつた。

② 相違點　甲―奈良平安時代　乙―江戸時代

(1) 甲乙兩時代共盛であつたが、甲の方は平安朝初期迄、乙の方は全時代を通じて隆盛。

(2) 甲に於ては詩文が中心、乙にあつては儒學。

(3) 甲の時代は支那文化模倣、乙の時代では獨創的研究、國風化的傾向を生じた。

(4) 甲にあつては主として上流貴族のみの關する所だつたから、下層民には影響がなかつたのに、乙の時代では大家の輩出と共に、一般的民衆の教化及思想の上に大なる影響を與へた。

2 江戸時代平民階級の擡頭が文化上に及ぼした影響(專攻)

【注意】　主眼點は文化上に及ぼした影響。平民の擡頭は簡略でいゝ。文化發達が生活上の餘裕から來る事を見逃してはならぬ。即ち、立論の筋は擡頭(太平―幕府中央集權・各藩產業開發―交通發達―商工業の殷盛―町人階級の勢力增大)**文化**(教育・文學・藝術・娛樂―平民階級以外にも喜ばれた。)

① **平民階級の擡頭**　(1) 戰亂の世は織田、豐臣二氏の統一をへて德川幕府の强力な中央集權組織と文治主義で太平となり、(2) 幕府と諸大名の產業開發及び參覲交替等により海陸の交通通信機關が著しく發達し、(3) 從つて商工業がめざましく隆盛となつて都市が發達した爲に、(4) 町人階級たる商人が物質的勢力をもつに至つた。(5) 然るに社會上の地位は低く、階級的地位が向上せぬ爲に勢ひ豪奢な生活となり、餘力で文化的教養を積むに至つて、平民文化が發達する事になる。

② **平民文化の發達**

(1) 教育　寺小屋・私塾等の發達、庶民の教養が進むにつれて武士との頭の差が少くなつた。

(2) 文學　俳諧・小說・戲曲・狂歌・川柳等の發達

(3) 藝術　浮世繪・錦繪などの發達

(4) 娛樂　淨瑠璃・義太夫・歌舞伎其他音曲が發達した。

而して之等のものが時代的にも普及し、階級的にも町人以外の上下にも亘つて喜ばれる事になつた。

総合問題

3　室町時代より江戸時代に至る我佛教と政治との關係（弘前高）

(1)　室町時代　吉野朝時代に尊氏は禪僧疎石（夢窓國師）を尊信し、疎石の勸めによつて後醍醐天皇の御冥福を祈る爲に天龍寺を建立すべく、明と貿易して天龍寺船と稱する船を用ひた如く、當時の禪僧は支那に往來して支那事情に明るいものが多かつたので、室町期に於て義滿・義敎も之を政治・外交の顧問としたが。禪宗の外に一向宗の蓮如上人が民衆傳道に力めたので此宗に歸依するもの多く、本願寺派は戰國時代に入つて近畿北陸に騷亂をなし、所謂一向一揆を起すほどの勢力をもつた。

(2)　本願寺光兼の勤皇　後柏原天皇の御大禮費を奉つて勤皇の實をあげた。

(3)　信長と佛敎　延曆寺の僧徒が横暴なので信長はかねゝ憎んでゐた所へ、姉川の戰に淺井朝倉の軍に加勢したので、信長は比叡山を圍んで滿山の堂塔をやき、多くの僧侶を殺した。

本願寺光兼が勤皇の事より准門跡の稱を賜はり、門徒は富强を恃んで各地の豪族と爭ひ、本願寺光佐の如きは大阪に石山城を築いて信長に反抗し、伊勢長島の一向一揆も之に加勢したので、信長は先づ長島を平らげ、後光佐と和して大和を收めた。信長が天主敎を弘布させたのも佛敎徒の横暴をおさへる爲であつた。

(4)　秀吉と佛敎　秀吉も僧侶の俗權を抑へ濫行を制する爲に寺領を沒收し、或は武器の所有を禁じて全く政權に反抗せしめぬやうにする一方、叡山、高野山の再興に助力し、本願寺光佐を優遇して、大阪天滿に寺院を造營し、京都に廣大な寺域を與へ、又方廣寺を營み、大佛を安置した。

(5)　江戸時代の佛敎と政治　幕府は寺院を保護する一方寺院諸法度を以て監督を嚴重にし、本願寺を東西

初世に松平定信が七年に亘つて鏡意改革、勞力して寶政の治をなし、定信引退後の家齊永く政治をとり、文化文政の繁昌期を見たが、晩年は紀綱みだれ、士民は奢侈遊惰、幕府の財政は窮乏、水野忠邦の改革も思ふにまかせなかつた。且學問の進歩は尊王思想を普及せしめ、流石の幕府も衰兆が甚しく見えて來た。

附表八　時代概觀（八）

近世史　第三期　江戸幕府衰亡時代の展望

三代家光が幕政の堅實の爲に大名統御法を充實する一方鎖國によつて外國の脅威から遠ざかつてゐる中に、國の內からは尊王論の研究が起り、外からは帝國主義の列國が通商を求めて來る。幕府のやり口は五代綱吉あたりから政と改革とが交互しつゝ次第に衰退に赴いて行き、其强い壓力が弱まるにつれて、尊皇論は攘夷論と合せて幕府をゆるがし、外からは固い鎖扉をペリー其他がドンドン叩く。遂に進退兩難の幕政に直面した大

重要考察
總合問題集　第八　近世史（江戸幕府衰亡時代）

一、德川時代に於ける尊皇論の發達（海兵・海經・福岡高・東京高・小樽高商・陸經）……三四〇
二、武家政治と皇政復古運動……三四一
三、織豐時代より文化・文政に至る尊皇思想の發達（海機）（注意）……三四三
四、江戸時代に於ける海防論に就て記せ（新潟高・經專）……三四四
五、鎖國（東京高・八高・神戸高商・早大等）……三九四
一〇、江戸時代初期（家康・秀忠・家光）の對外關係に就て記せ（山口高）（綜合力のテスト—答案・講評）……二九六
一一、江戸幕府に於ける幕政紀綱弛張の大要……二九九
一二、新井白石の事蹟……三〇一
一三、德川吉宗の政治改革（浪速高・東高師・海兵・經專・長崎・神戸・阪）……三〇三

附表七　時代概觀（七）

近世史　第一・二期　江戸幕府創業守成時代大觀

家康江戸に幕府を開き豊臣氏をヂワ〳〵片附け、老獪巧緻な制度政策で大名を金縛りにし、皇室公家を制し、自由の拘束によつて德川永遠の繁榮と國内の和平とを期したのだつた。此間に歐人の渡來以來の貿易と宗教は漸次我國を危殆に至らしめる狀況が見えたので禁教を嚴にし、遂に貿易の利・文化輸入の利を犧牲にし鎖國によつて迄用心を堅くした。

三つの幕府の中、一番基礎の堅い德川幕府も綱吉の頃から一弛一張波だち初めた。犬公方の弊政のあとを受けて家宣・家繼は白石登用で弊政を改め、吉宗は白石の後を尙武勤儉で模範的な政治に精勵して中興の英主と稱せられたが、家重・家治の頃には田沼父子の賄賂政治が白石吉宗の善政をかき亂し、家齊の初世に松平定信が七年に亘つて鉞意改革、努力して寛政の治をなし、定信引退後の家齊永く政治をとり、文化文政の繁昌期を見たが、晩年は紀綱みだれ、士民は奢侈遊惰、幕府の財政は窮乏、水野忠邦の改革も思ふにまかせなかつた。且學問の進歩は尊王思想を普及せしめ、流石の幕府も衰兆が甚しく見えて來た。併しさすが太平の世だけに、學問は漢學・國學・洋學に亘つて學者輩出し、教育も上下に及び文學も國文の外に平民文學の擡頭を見、美術工藝も大いに發達した。

近世史　第一・二期江戸幕府創業守成時代略年表

天皇	年號	紀元	重要事項
後陽成	慶長 五	二二六〇	關ヶ原の戰
	八	二二六三	家康征夷大將軍
一〇八 後水尾	一九	二二七四	大阪冬の陣
	元和 元	二二七五	夏の陣、豐臣氏滅亡
一〇九 明正	寛永 一二	二二九五	參覲交代の制定まる
	一三	二二九六	邦人海外渡航禁止
	一四	二二九七	島原の亂起る
	一五	二二九八	島原の亂平定、禁教
	一六	二二九九	支那、和蘭以外貿易嚴禁
二〇 後光明	慶安 四	二三一一	由井正雪の陰謀
二一 靈元	貞享 四	二三四七	綱吉生類憐みの令發布
二二 東山	元祿 一五	二三六二	赤穗義士の復仇
	寶永 六	二三六九	新井白石登庸
二四 中御門	享保 元	二三七六	吉宗將軍
	五	二三八〇	洋書解禁
	一〇	二三八五	享保金鑄造

參考綜合　問題集　第七　近世史（江戸幕府創業・守成時代）

一、織田・豊臣・德川三氏の天下一統の大業を比較して其異同を考察せよ……二七九
二、江戸幕府の初期に於ける重要問題と其解決……二八一
三、我國封建制度の由來……二八五
四、參覲交代と其影響（長崎高商・陸幼・小樽高商・靜岡高・三高・東府高）……二八八
五、鎌倉・室町・江戸三幕府の幕府を中心とせる中央集權的諸政策を比較考察せよ……二八九
六、江戸時代初期に於ける諸外國との關係（京城大・東外語・海機・廣高師・海經・東商大豫・山口高）……二九一
七、江戸時代初期邦人の海外發展の狀況（四高・成蹊高・專檢）……二九二
八、キリスト教に對する我國爲政者の政策の推移……二九三
九、鎖國（東京高・八高・神戸高商・早大等）……二九四
一〇、江戸時代初期（家康・秀忠・家光）の對外關係に就て記せ（山口高）（綜合力のテスト―答案・講評）……二九六
一一、江戸幕府に於ける幕政紀綱弛張の大要……二九九
一二、新井白石の事蹟……三〇一
一三、德川吉宗の政治改革（浪速高・東高師・海兵・醫經・美術・海機）……三〇三
一四、松平定信の政治改革（廣高師・東高師・東外語・海機）……三〇五
一五、鎌倉・德川兩時代の士風（陸士）……三一〇
一六、德川時代の備荒貯蓄につきて知る所を記せ（廣高師）（注意）……三一〇
一七、德川時代に於ける諸藩の經濟行政の特色を述べよ（名古屋高商―講評・答案）……三一一
一八、德川期に於て産業の發達を助成したる諸種の原因について述べよ（東府高）……三一八
一九、元祿文化及文政の奢侈と德川幕府の政策との關係（弘前高）……三一九
二〇、江戸幕府の鎖國以後に於ける我が外國貿易の狀況を記せ（大分高商―講評・答案）……三二一
二一、江戸時代の文化の特色……三二一
二二、江戸時代學問發達の原因及其結果……三二一
二三、江戸時代儒學の國風化及國民思想に及ぼした効果……三二四
二四、江戸時代に於ける蘭學の發達（四高・浦和・姫路・山形・松江各高・陸士・海兵・神皇・高檢・專檢）……三二六
二五、江戸時代に於ける國學の發達と其影響（北大豫・旱高・海機・神皇・陸經・大阪外語・東高師―講評）……三二八
二六、江戸時代の國史の研究と其影響（二高・成蹊高・海機・神皇）（注意）……三二九
二七、奈良平安兩朝と江戸時代とに於ける漢學の概況及相違點（陸士）……三二六
二八、江戸時代平民階級の擡頭が文化上に及ぼした影響（專檢）……三三七
二九、室町時代より江戸時代に至る我佛教と政治との關係（弘前高）……三三八
三〇、江戸時代宗教の變化……三三九

附表八　時代概觀（八）

近世史　第三期　江戸幕府衰亡時代の展望

三代家光が幕政の堅實の爲に大名統御法を充實する一方鎖國によつて外國の脅威から遠ざかつてゐる中に、國の内からは尊王論の研究が起り、外からは帝國主義の列國が通商を求めて來る。幕府のやり口は五代綱吉あたりから秕政と改革とが交互しつゝ次第に衰退に赴いて行き、其強い壓力が弱まるにつれて、尊皇論は攘夷論と合せて幕府をゆるがし、外からは固い鎖扉をペリー其他がドンドン叩く。遂に進退兩難の幕政に直面した大老井伊の英斷たる安政假條約は國論を沸騰させ、安政の大獄櫻田の變を起し、安藤老中公武合體策を講じても大勢の赴く所遂に挽回出來ず、尊皇攘夷は尊皇討幕に傾き、合體派の薩藩も討幕派に參加して遂に大政奉還となり、皇政古に復し、外國との通商條約は勅許によつて永い鎖國のドアを開き、明治以後大發展前の舊弊一掃がとげられたわけだ。

近世史　第三期　江戸幕府衰亡時代略年表

天皇	年號	紀元	重要事項
桃園	寶暦 九	二四一九	竹内式部處罰
後櫻町	明和 四	二四二七	山縣大貳藤井右門處刑
後桃園	安政 元	二四三二	田沼意次老中となる
	七	二四三八	ロシア人渡島來航
光格	天明 七	二四四七	家齊將軍、定信老中
	寛政 四	二四五二	林子平處罰、露船來航
	文化 元	二四六四	露使レザノフ長崎來朝
仁孝	文政 八	二四八五	外國船擊攘令發布
	天保 八	二四九七	大鹽平八郎の亂
孝明	嘉永 六	二五一三	ペリー及露使來朝
	安政 元	二五一四	ペリー再來、神奈川條約
	三	二五一六	ハリス來朝
	五	二五一八	井伊直弼假條約調印、安政の大獄
	萬延 元	二五二〇	櫻田門外の變
	文久 三	二五二三	長薩外艦砲擊、七卿落
	元治 元	二五二四	蛤門の變、長州征伐
	慶應 元	二五二五	假條約勅許
	二	二五二六	長州再征
	三	二五二七	明治天皇踐祚、大政奉還
明治	明治 元	二五二八	鳥羽伏見の戰、江戸開城
			上野奥羽の戰
	二	二五二九	函館戰爭

重要　考察　總合　問題集　第八　近世史（江戸幕府衰亡時代）

一、德川時代に於ける尊皇論の發達（海兵・海經・福岡高・東京高・小樽高商・陸經）……三四〇

二、武家政治と皇政復古運動……三四一

三、織豊時代より文化・文政に至る尊皇思想の發達（海機）（注意）……三四三

四、江戸時代に於ける海防論に就て記せ（新潟高―講評）……三四四

五、江戸幕府の開港に至る迄の顚末……三四六

六、安政假條約の國史上の意義……三四七

七、江戸時代に於ける日英關係（京城大・東商大）……三四九

八、江戸時代に於ける日露交渉（神皇・浦和高・山口高・八高・六高・專檢）……三五〇

九、江戸時代に於ける蝦夷地の開拓及同地を中心とせる外交につきて（長崎高商）……三五〇

一〇、江戸幕府の外國に對する方針は如何に變り行きしか、又それに伴ひて如何なる結果を生じたるか（佐賀高）（狙ひ所）……三五一

一一、櫻田の變以後大政奉還に至る迄の大勢の推移（浦和高）……三五四

一二、大政奉還から明治戊辰の役迄の經過（陸幼）……三五六

一三、江戸時代の朝幕關係の推移……三五七

一四、公武合體論（陸士・專檢・四高）（狙ひ所）……三五九

一五、江戸幕府衰亡の原因（大阪外語・東京高・海兵）（まとめ方）……三六二

一六、我國武家政治の國史上の意義を說明し特に左の條項を詳述せよ……三六三

(1) 武家政治は何故に成立せしや

(2) 武家政治崩壞の遠因・近因（弘前高）

一七、鎌倉幕府と江戸幕府が政權を失ひたる所以を比較記述せよ……三六四

一八、鎌倉・室町・江戸三幕府の特色をあげ、特に江戸幕府が最も永續したる所以を述べよ（まとめ方）……三六六

に對立せしめて勢力をさき、天海・崇傳を用ひて、政治・學問の顧問とした。又天主教禁壓の爲に全國民に必ず佛教の宗派に入らしめたが、僧侶の安逸遊惰に流れると共に勢力が衰へた。

(6) 以上を概觀すれば、 室町時代初期には、佛教は名僧が政治外交の顧問となつて指導的地位をなし、戰國時代に至つて、群雄の一部をなし、信長に至つて覇を爭うて遂に之と和する事になり、秀吉以後は保護を加へられつゝ政權を爭ふ事が出來ず、天主教抑壓の手段になつて行つたわけである。即ち天主教との關係からいへば、信長は、佛教を抑へる爲に天主教を迎へ、江戸時代には其の逆になつたのである。

4 信長・秀吉・家康の對宗教政策 (永戸高)二三九頁三及前問最後の3から6迄を參照。

5 江戸時代宗教の變化

① 佛教 (イ) 佛教は從來文化の中心勢力であつたが、江戸時代に學問が盛となるや、中心勢力を學問に讓る事になつた。(ロ) 天主教禁制策としての寺請(テラウケ)制度は全國民を寺院の檀徒とした爲に表面的には最も普及したが、一般の信仰は次第に形式的となり僧侶も安逸墮落。(ハ) 新宗派として家綱の時歸化した明僧隱元の黃檗宗も廣くは行はれなかつた。(ニ) 而して儒者の中には佛教の排斥を論ずるものが多く其說を率じて領内の寺院を壓迫する大名さへ出た。

② 神道 神道は儒者の尊むもの多く、山崎闇齋の如きは神儒一致を唱へて垂加神道を開いた。之と共に神道家の中にも從來の神佛一致を棄てゝ儒學によつて神道を說くものが次第に多くなつた。(佛教信仰が形式化し、僧侶が墮落する反面に儒學が隆盛になつた。神道が神佛一致から神儒一致に轉じた事に注意すべきである。)

③ 天主教 戰國時代の末から江戸初期にかけて潑剌たる勢力を示してゐた天主教は、島原の亂以來全く禁制されたが、其根强き信仰は、秘密の中に傳へられて明治時代に迄及んでゐた。

第三期　江戸幕府衰亡時代

第五章　皇政復古の由來

第一　尊皇思想の勃興

一、德川時代に於ける尊皇論の發達（海兵・海經・福岡高・東京高・山口高商・小樽高商・陸經）

❶ **尊皇論勃興の原因**　我國は萬世一系の天皇の親ら統治し給ふ國柄なのに、源頼朝が幕府を開いて以來、久しく世人は將軍の尊きを知つて、天皇の絶對尊嚴なる所以を辨へぬ有樣となつた。然るに德川家康が治世の目的で學問を奬勵した結果は、有識者をして却つて大義名分を明かならしめるに至つた。

❷ **尊皇論者の系統**

（1）**漢學者**　抑々王を尊び覇を卑しむのが朱子の儒學に於ける大義名分の思想である。此尊王抑覇の思想は國體に對する自覺を起すに至つた。其論者の中でも山崎闇齋・山鹿素行最も顯はれ、我國體を論じて尊皇論を唱へ、又淺見絅齋は靖獻遺言を著はして支那の忠臣義士の傳を述べ、忠君尊皇の說を主張した。

（2）**國史研究者**　我國史を研究した結果、古今を比較し、國體を知り、尊皇の大義を鼓吹する事に力めた。例へば德川光圀は大日本史を、頼山陽は日本外史・日本政記を著はした如き是である。

（3）**國學者**　國學者は古典國史の研究によつて、我國體を知り、武家政治が變態にして、天皇の最も尊ぶべき事を說いた。本居宣長・平田篤胤の如きは其代表的人物である。

❸ **尊皇論の具體化及實行運動**

（1）**竹内式部**　越後の人で闇齋の門人、垂加神道を奉じ、公家の間に出入してゐた。桃園天皇が朝臣中の學者を召し、漢學や日本古典の講義を聞召された時、進講者が式部の門人だつたので、式部は畿内關東の住居を禁ぜられ、後に八丈島に流されて途中に歿した。（之が大政奉還の丁度百年前である事に注意）

（2）**山縣大貳**　田沼時代江戸に私塾を開いて數百の門人があり、田沼の濁政と皇室の御衰微を憤慨し、會ふ人毎に尊皇の大義を吹込んだ。後其說の爲に藤井右門と共に捕へられて死刑に處せられた。

（3）**藤井右門**　大貳の說を信じ、幕府の專横を譏り、甲府江戸の攻擊法を說いてゐた。山縣、藤井兩人の說が過激であり、右門を惡く思ふ者が、兩名の說及其交友を記して謀叛者として訴へたので、捕へられて死刑に處せられた。

（4）**高山彦九郎**　十三歳にして太平記を讀み、正成・義貞の忠節に感奮して尊皇心鼓吹を以て終生の事業とし、四方を歷遊して尊皇の宣傳に力め、又ロシアが北海道近海に出沒し始めたので、東北地方を巡歷したが、志を得ずして自殺した。

（5）**蒲生君平**　林子平、高山彦九郎と共に寛政の三奇人といはれた人。國史を研究し、歷代山陵の荒廢を歎いて自ら修理し、山陵志を著はした。

❹ **尊皇思想の影響**　學者の研究が實行運動となつて、具體化の歩を進め、幕府の抑壓に屈せぬ熱意は漸次民間にも普及し、外船の渡來漸く頻繁となるに及んで開港攘夷の說と結び、更に分れて公武合體論と尊皇倒幕論に發展し、益々幕府の基礎を危くし、遂に皇政古に復するに至つたのである。

總合問題

1　武家政治と皇政復古運動

【注意】　問題が非常に廣い時代に亘つて居るが、日本精神究明上重要なものである。先づ武家政治の如何なるものかを考へ、鎌倉時代から、德川幕末迄の大略を時代を追うて述べて行く必要がある。

① 武家政治の性質　源頼朝が鎌倉幕府を開いて武家政治を創始するや、平安時代の奢侈遊惰の氣風は、質實剛健となり、紊亂の極に達した政治は革新されて施政よく時勢に適し、人民は塗炭の苦を逃れて生活の安定を得たが、萬世一系の天皇が國家統治の大權を握り給ふ我國に於ては、一種の變態政治たるを免れなかつた。

② 德川時代以前に於ける皇政復古運動

(1) 第一回　源氏が三代で絶えたに不拘、陪臣たる北條氏政權を擅にし、然も剛毅英邁なる後鳥羽上皇の御意に違ふ事が屢々あつたので、之を討伐して政權を恢復せん事を圖り給ひ、遂に承久の變となつた。之卽ち第一回の皇政復古運動であつたが、時至らずして不幸失敗に終られた。

(2) 第二回　その後鎌倉幕府は北條氏執權の下によく民政に心を用ひ、朝廷に對しては皇位繼承の事に迄干渉し奉つてその威權を抑へ、只管幕威の確立に努めてゐたが、元寇以來漸く其權威を殺ぎ、民心を失ふに至つたので、後鳥羽上皇の御志をつぎ給ふ後醍醐天皇の第二回皇政復古運動となつた。此御企は正中の變・元弘の亂と相次いで一時失敗に終らせられたが、護良親王以下勤皇の諸氏の忠節により、遂に建武の中興の業を成就する事が出來た。

(3) 吉野朝と織豐時代　建武中興の大業も足利尊氏の謀叛によつて間もなく瓦壞し、吉野朝五十餘年間の勤皇軍の活動も遂に効なく、再び室町幕府による武家政治の再興となり、やがて戰國時代の紛亂を經て織田・豐臣兩氏の天下統一となつたが、未だ天皇御親政の古の制には至らず、三度德川氏による武家政治の復興となつた。

(4) 國體觀念の缺乏　かくて變態なる武家政治が數百年の永きに亘つて繼續し、此間學問も一般に衰へてゐたから、國民の間に大義名分を辨へるもの少く、我國體の尊嚴を知らずして武家が天下の政權を掌握するのが常態の如く思はれるやうになつた。

③ 德川期の尊皇思想の發達（以下本章一參照）

2 織豐時代より文化・文政に至る尊皇思想の發達（海藏）

【注意】　織豐時代の勤皇の事蹟は大抵思ひ付くと思ふが、文化・文政といふ時代が何時頃かといふ事、其頃に勤皇思想家にどんな人がゐたか、その頃の一般傾向はどうか、といふ事になると、時代を區切られたのが窮屈に感ぜられるかと思ふ。しかし、そこが狙ひ所の一つかとも思はれる。

① 信長の勤皇　戰國の亂世に式微の極に達した皇室は、織田信長の入京と其勤皇の心深きとによつて儀式、御料所の恢復、皇居の修理が行はれた。

② 秀吉の勤皇　秀吉の時代には續いて御料所の增收、皇居の修理等が行はれて面目を一新し、聚樂第への後陽成天皇行幸の折、秀吉は諸將と共に皇室に忠誠なるべきを誓つた。

③ 德川初期　德川幕府の初期には家康が學問を奬勵して文治主義をとり、やがて朱子學系統の儒學を官學とした所、朱子學の大義名分、尊王抑覇の思想は尊皇論を生み、闇齋・素行・蕃山等の主唱する所となり、一方契沖以來の國史古典の研究からも尊皇思想が一部の國學者間に勃興し、研究も次第に進歩したけれども、未だ、幕政に障害とならず、又此學說に妨害を加へる事もなかつた。

④ 德川中期　八代吉宗將軍の頃以後になると、竹內式部、山縣大貳、藤井右門等の尊皇運動の實行者が出現し、幕府の忌避にふれ、明和事件で死刑に處せられた。愈運動が表面化し、幕府の抑壓がやう〳〵强化する。之が大政奉還前百年の頃である。

⑤ 寛政の頃　幕府の制止が嚴重になると比例して勤皇思想は普及し、高山彦九郎、蒲生君平等は全國を行脚

し或は山陵を巡つて、皇室の式微を慨し、勤皇思想愈々弘まる。

⑥ **文化文政の頃**　所謂尊皇論者の中、此時代に殘つてゐる者は頼山陽、平田篤胤、蒲生君平などであるが、時しも露國が北邊を侵し、やがて外國船打拂令（文政八年）が出、尊皇論が攘夷論に發展する事になり、遂に倒幕論に向ふ事になる。（註―文政十三年は大政奉還より三十八年前。安政の大獄より三十年前）

第二　西力東漸と開國

一、江戸時代末期に於ける海防策の發達（海兵・海經）　江戸時代に於ける海防論に就て記せ（新潟高）

幕末開國以前の諸外國との交渉（昭一二高等試驗外交科）

❶ **鎖國時代の世界の大勢**（鎖國時代に東洋南洋方面の大部分が西洋諸國の占領する所となり、それから凡そ三百年後に於て今や日本が東亞の盟主にならうとする點を注意すべきである。）

（1）**强國時代**　三代將軍家光の寛永十六年に鎖國した直前、我國と通商してゐたのは西・葡・蘭・英の諸國で、就中英國の如きは和蘭に壓倒される程だつたのに、鎖國後百五十年、我國が太平の夢を結んでゐる間に、西班牙・葡萄牙は衰へ、和蘭も英國に壓倒され、英佛露三國が勢盛となり、米國も家治將軍の頃（皇紀二四三六）獨立して國力を擴張した。（英國の勃興―西班牙は英國の盛になる前の歐洲に於ける强國だつたが、一五八八年―秀吉の聚樂第へ後陽成天皇御幸の年―西班牙の無敵艦隊なるドーヴァー海峽に破つてから漸く勃興し、次で佛・露兩國も盛になつた。）

（2）**西力東漸**　英國は印度を領有、佛國は印度支那を手に入れて共に南方より我國に迫り、露國は西伯利亞を經略して綱吉頃にはカムチヤツカ半島を占め、北方から我國に近づき、米國は獨立後、支那貿易を開いて東の方から我國に接近する狀勢となつた。

（3）**汽船の發達**　西洋では近代科學が著しく發達し、家齊時代に汽船が發明され、航海の安全と共に東洋貿易に從事する者が次第に多くなつた。

❷ **英露兩國人の侵寇**

（1）**露國**　（a）寛政四年ラックスマン（Laxmann）根室に來つて通商を乞ひ、幕府は長崎で交渉する旨を諭して去らしめた。（b）爾後十二年にして文化元年レザノフ（Rezanov）長崎に來航して通商を乞うたが、鎖國の故を說いて拒絕されるや、歸途樺太千島の沿岸を劫掠し、後にも屢々北邊を侵した。

（2）**英國**　文化五年無斷で長崎に侵入し、薪水糧食を强奪し、和蘭人を捕へる等の暴行をして逃歸つた。

❸ **海防の論策起る**

（1）**林子平の卓見**　夙に蘭學の知識で內外の狀勢を知り、海國兵談・三國通覽圖說を著はし、海防を嚴重にすべき事を說いたが、幕府の忌む所となり、仙臺藩に禁錮され、著書の版木を燒かれた。（併し、其禁錮後數ヶ月にして前記露國人ラックスマンの北邊侵寇があつたのである。）

（2）**北邊警備**

（イ）**近藤重藏**　幕命によつて蝦夷地を探險し、擇捉（ヒトロフ）島に渡り、露人の標柱を取拂つて我國標をたてた。

（ロ）**伊能忠敬**　幕命で蝦夷地及全國沿岸を測量し、精密なる日本輿地實測圖を作つた。

（ハ）**間宮林藏**　幕命により蝦夷地から樺太及露領沿海州を探險した。

（ニ）**松前泰行**　文化四年蝦夷地を直轄地として松前奉行とし、其警備に當らしめた。

（3）**海防策の實施**

（イ）**高島秋帆**　蘭人に洋式兵學を學び、幕府の砲術・兵學教練を教授した。

（ロ）**江川坦庵**（太郎左衛門　秋帆の門弟）　砲術研究をなし、伊豆韮山に反射爐を、品川灣にお臺場を築く。

（ハ）**諸侯の海防**　德川齊昭・島津齊彬（ナリアキラ）・鍋島齊正等諸藩主は、軍艦銃砲を作り、教練・砲術を練習して海防策を講じた。

❶ **海防策と國論分裂**　海防論に對して鎖國攘夷論が齊昭等によつて起される一方、蘭學者渡邊華山、高野長英等によつて開國論が起され、兩々對立した。

【新潟高校教授講評】　德川家光より約百五十年に亘り幕府のとつて來た鎖國政策が家齊の頃から愈々西歐諸國の勢力が南北より迫つて來ることゝなり、こゝに起つたのが海防論である。海防論は直接幕府を倒した譯ではないが、かゝる問題の起つた事がやがて攘夷論、開港論の爭となり、更に尊皇論、佐幕論の對立となつて遂に幕府を倒壞する事になる。林子平や伊能忠敬やその他海防先覺者の業績を述べるのも勿論であるが、單にそれだけでは十分でない。如何にして海防論は起り如何なる影響を及ぼしたか前後關係についてもつと考慮して欲しいと思ふ。（文部時報五九四號ノ二による）

二、江戸幕府の開港に至る迄の顚末

❶ **外國船艦の渡來**　北方よりは露國が、南方よりは英國が、其船艦を以て屢々我に迫つて沿岸を劫掠し、其國々の要求が開港通商にあつたけれども、幕府は鎖國政策を固持し、沿岸に接近した外國船艦には、先づ國策を十分に說明して歸らしめてゐた。所が英船フェートン號が文化五年八月、和蘭國旗を揭げて長崎に入港してから政策が硬化し又軟化した。卽ち、

❷ **外國船打拂令**　英船の暴行が其後にも續いたので、之に對し海防攘夷の論が上下の間に猛然と興り、文政八年には幕府も意を決して、爾來外國船が沿岸に近づいたら直ちに打拂ふべき事を命ずるに至つた。

❸ **打拂令の緩和**　打拂令により一時は外國船の渡來が激減したけれども、この形勢を見た渡邊崋山・高野長英は、打拂令が却つて由々しき大事を起すべきを唱へ、又幕府も淸國が阿片問題の爲に英國に戰敗した事に鑑み、天保十三年に打拂令を緩和し、外船漂流して薪水食糧を失つたものには之を支給し、諭告しても去らぬものは打拂ふべしと命ずるに至つた。

❹ **米露使節の來朝**　嘉永六年ペリー（Perry）が浦賀に來航し、幕府に對して一大決意を以て修好を申出て之に回答を要求したが、從來の外船の渡來と違つて、我國の中樞たる江戸に近い場所であり、手强いので、回答は來年を期して歸らしめたが、幕府は狼狽して朝廷に奏上し、諸侯に相談し、中々幕議一決せず。時しも又露國使節プーチャチン（Poutiatine）もペリー來朝の翌月長崎に來て和親條約と樺太境界決定を求めたが、速答の出來ぬといふ幕府の返答により、暫く滯在して去つた。

❺ **和親條約―神奈川條約の締結**　ペリーは前年の約に從ひ翌安政元年正月再來、幕府はやむなく其要求を容れて和親條約を結び、下田・函館二港を開き、外國船に薪水食糧を給する事を約したが、通商は許さなかつた。之を神奈川條約といふ。次で英・露・蘭とも略同樣な修好條約を締結した。

❻ **通商條約―安政假條約締結**

（1）**ハリス來朝**　安政五年米國總領事ハリス（Harris）來朝して通商の利益を說き、老中堀田正睦（マサヨシ）と條約案を議定、上奏勅許を乞うたが、朝廷には攘夷論盛にして御裁可が得られなかつた。

（2）**通商條約案の內容**　①下田・函館の外に神奈川・長崎・新潟・兵庫の四港及び江戸・大阪の兩市を開く事（神奈川開港後は下田港を閉鎖）②信教の自由と治外法權　③輸入品の稅率の決定等で、概して屈辱的な條約であつた。之で明治時代條約改正に骨の折れた所以。

（3）**勅許がないのに**　ハリスは英佛が淸國に勝つて我國に迫る形勢を說いて條約調印を迫つたので、時の大老井伊直弼、遂に勅許をまたずして米國との假條約に調印し、事情を具して奏上した。安政假條約は、英・露・佛・蘭等の諸各國とも大體同樣な條約を結んだ。

考察問題

1 安政假條約の國史上の意義　ペルリの渡來に就て（昭七高等試驗外交科）

① 安政假條約の經過　安政五年德川幕府の大老井伊直弼が、勅許をまたずして米國と通商條約を結んだのが此條約である。

（嘉永六年ペリー來朝、一旦引上げて幕府の言明通り翌安政元年再來、神奈川條約を結んでから、米國總領事ハリス下田に來つて、開國貿易の利を說き、遂に老中堀田正睦と通商條約の議定書を作つたが、堀田正睦の上京御裁可を仰がうとした努力も、鬱々たる鎖國攘夷論の爲に御許を得る事が出來ず、一方ハリスは英佛露の我國に迫るに先だつて調印を促したので、時に選ばれて大老となつた井伊直弼は內外の狀勢を察し、やむなく勅許をまたずして假條約に調印し、事情を具して奏上したのである。）

② 違勅問題と其影響　井伊大老は勅許を經ずに此重大な條約を結んだ上、將軍家定の繼嗣家茂を定める問題と合せて、其專斷が京都に集つた諸藩の志士の尊皇攘夷論をあふり、水戸家への密勅となり、遂に直弼の反對派一掃の擧、所謂安政の大獄となり、之が因となつて櫻田門外の變に、直弼の死となつた。井伊大老の死は幕府の中心人物の喪失となり、大政奉還を早める結果となつた。

③ 鎖國から開國へ　此條約は違勅問題で幕府倒壞の重大原因をなしたけれども、二百年の鎖國の間に激變した世界の狀勢の中に、扉を排して打つて出た新日本の誕生であつた。此條約の勅許は慶應元年であるが、既に此條約によつて、開國進取の大勢となり、舊日本は玆に世界に於ける諸國の中の新日本となり、やがて明治新政となつて、着々歐米の文化を取入れ、遂に世界の最大列强となる端緒をなしたものである。

此二つの點より考へると、此條約は、一面には多年の武家政治を皇政に復せしめる大原因、いひかへると、國本に基く政治にかへらしめて、消極的に日本を更生せしめ、他面には世界に雄飛する第一歩として、我國を積極的に興隆せしめる基となつたものである。

總合問題

2 江戸時代に於ける日英關係（京城大・東商大）

【狙ひ所】鎖國前から、維新迄の兩國關係を系統的に漏れなく叙述する點にあると思ふ。鎖國の前と後、條約後の三段にわけて考へる事がいゝ。

① 鎖國前の關係　英國との通商　慶長五年我國に漂着したウイリアム・アダムスが家康の外交顧問となり、後慶長十八年國王ゼームス一世の通商を請ふ國書をアダムスが斡旋して通商を許され、平戸が互市場になつた。しかし當時盛であつた和蘭との競爭に勝てず、九ケ年にして日本を去つた。

② 鎖國から安政假條約迄の關係

（1）英國は鎖國後程なく（寛永十一年）來朝したが、上陸貿易共に拒絕された。寛政年間に各所に出沒したが大事を起さなかつた。

（2）英船狼藉　文化五年、英船が和蘭旗を飜して長崎に突如入港、薪炭食糧を强請して、我國禁を侵し、和蘭人を捕へ、暴行を恣にして逃歸つたので、長崎奉行松平康英は責を負うて自殺した。

（3）和親條約　安政元年米國と大體同樣な和親條約を結んで、長崎函館の二港を開いた。

（4）通商條約　安政假條約完成の後、之と似た通商條約を結んだ。

③ 通商條約後

（1）長州藩に對して　元治元年、米佛蘭と共に聯合艦隊を以て下關砲臺を攻擊し之を陷れ、幕府より償金

を出させた。

（2）生麥事件が起つた時　その解決の爲鹿兒島を攻擊し幕府から償金をとつて和約を結んだ。

3 江戸時代に於ける日露交渉（紗島・浦和高・山口高・八高・六高・專攻）

（1）**ラックスマン**　寛政四年我漂流民を送つて根室に來り通商を求めたが、幕府は許さず、海防に努めた。

（2）**レザノフ**　ラックスマン來つてより十二年後、長崎に來り通商を乞うて又許されず、露人之を怨み屢我北邊に寇した。

（3）**ブーチヤチン**　嘉永六年長崎に來つて和親通商及樺太の境界決定を求めたが幕府から拒絕された。

（4）**條約締結**　米國と和親條約を結ぶに方つて、露國とも略同樣な條約を許し、後米國と安政假條約を締結するや、露國とも同樣の條約を結ぶ事となつた。

4 江戸時代に於ける蝦夷地の開拓及同地を中心とせる外交につきて（長崎高商）

① **蝦夷地の開拓**　德川時代の蝦夷といふのは北海道樺太の總稱であつて、北海道は松前氏の領地だつたが、僅かに渡島附近を治めるのみで他の大部分は放棄してゐた。

（1）ラックスマンの來寇　寛政四年ラックスマン根室に來つて互市通商を求める以前から、幕府は警備の必要を覺り、最上德内に此地方を視察せしめたが、ラックスマン來寇と共に、北邊に對して次の處置をとつた。

（2）蝦夷地の探險　寛政十年近藤重藏は命を受けて千島のエトロフ島に渡り、露人のたてた標柱をぬき、「大日本惠土呂府」の標柱をたてゝ歸つた。

（3）函館奉行　幕府は寛政十一年蝦夷の東半を收めて直轄地とし、函館に奉行をおいて其開拓防備に當らしめた。

（4）蝦夷地の測量　更に翌十二年伊能忠敬をして蝦夷地を測量して其地圖を作らしめた。

（5）松前奉行　文化四年蝦夷地全部を幕府の直轄地とし、松前奉行をおいて警備開拓に當らせた。

（6）樺太探險　文化五年間宮林藏に命じて樺太を探險せしめ、この地が島である事を確めた。

（7）松前奉行の廢止　文化十年高田屋嘉兵衞は、先に露人來寇の爲に捕へられてゐたが、彼の斡旋によつて、露國との紛爭が解決したので、松前奉行を廢し、蝦夷地を松前氏に與へた。

② **外交問題**　露國は米國のペリーについで、嘉永六年七月プーチヤチンを長崎に遣はして通商を乞ひ、且千島樺太に關し、日露の國境を定めん事を要求したが、幕府は確答を與へずして歸し、翌安政元年和親條約を結び、千島は我領地なる事を主張し、樺太は後日檢分の上決定すべき事を約した。樺太問題は文久二年に北緯五十度を以て國境と定めたが、露國は之を守らずして明治時代に及んだ。

5 江戸幕府の外國に對する方針は如何に變り行きしか、又それに伴ひて如何なる結果を生じたるか（佐賀高）

【狙ひ所】佐賀高校では變化の過程と其の結果に關する出題が從來よく出た。之などもいゝ問題だと思ふ。

「江戸幕府」をボンヤリ考へると、開國の所へ視點が集中する。それから「外國」も亦西洋諸國のみに傾き易い。萬辨なき考察が必要。そこで、幕府の初期から鎖國へ、鎖國から開國への變轉をずつと見て行けば材料豐富、むづかしくはない問題である。

① **積極的通商方針時代**—家康から家光の前迄

（1）家康は貿易を保護奬勵し、先づ朝鮮との國交を回復して釜山を開かせ、明とは國交成立せずとも通商は許可し、新たに英・蘭兩國の互市場を許可した。

（2）所が室町末期以來通商してゐた蘭・西兩國人の天主敎布敎に弊害が認められ、蘭・英兩國人競爭して英人敗れ去り、蘭人が貿易の利を占めた。

(3) 當時の我商人は朱印船で支那南洋に活躍、海外に武功をあげる山田長政、遠くローマに遣はされる支倉常長などがあつた。之等外交貿易は德川幕府の富强を致し、邦人の進取の氣象を促進し、西洋文化の影響も大きかつた。

② **鎖國時代**

(1) 天主教の弊害次第に明かとなるや、家康の禁教に次で家光の其禁壓徹底策は、邦人の海外渡航禁止となり、島原の亂を起し、亂後、鎖國令の發布となつて、貿易の巨利を犧牲にし、國民の海外發展頓挫し、西洋文化の輸入殆どたえる事になつた。

(2) 通商國も支那和蘭二國だけが長崎で貿易を許され、白石の時には貿易も一定額の制限さへうけるやうになつた。和蘭の一國が殘された事が、蘭學の勃興の因をなし、蘭學を通して海外事情の變化が少しづゝでも明かにされ、海防論や開國論を起した。

③ **攘夷時代**　幕末になると、露人屢々北邊を侵し、英船又西海を騷がしたので、幕府は海防を嚴にし、遂に文政年中外國船打拂令を出す事になつた。

④ **開國主張時代**　然るに米國のペリーが嘉永六年來朝して通商を求めるに及び、之と和親條約を結んで英・佛・露・蘭に及ぼし、次で米國總領事ハリスの通商條約を請ふ事急なるや、幕府は勅許をまたずして調印し、各國とも略同じ條約を結んだが、外國の條約實行督促により、大政奉還の直前(慶應元年)に至つて條約の勅許を見、遂に開國の實現となつた。併し、開國主張は尊皇攘夷討幕にからんで國論の反對をうけ、幕府の滅亡を早める結果となつた。

第三　大政奉還と皇政復古

一、安政の大獄 (神戸高商・海護・美術・東女高師・高師高商)

❶ **原因**

(1) **違勅問題**　外國からは開國の爲の條約の督促が頻りで、國內では攘夷の論喧しく、進退兩難の際に處した井伊大老の、勅許をまたずして安政假條約に調印した事は、違勅問題として囂々(がう〳〵)たる非難を受けた。

(2) **將軍の繼嗣問題**　十三代家定將軍、病弱で子のない爲に、繼嗣を定める事になつたが、時に水戸齊昭の子一橋慶喜、賢明で、朝廷でも年長賢明の者を選ぶ聖旨があり、有力藩主の支持もあつた所が、反水戸派の方では家定の從弟紀州の家茂を候補とし、茲に人物本位派と血統本位派が相爭つた所、井伊直弼は家定の甍ずるに及び、慶喜を排して家茂を十四代將軍とした。違勅と繼嗣の兩問題で直弼は茲に四方から論難攻擊をあびる事になつた。

(3) **水戸への密勅**　當時諸藩の志士多く京都に集り、幕府の專斷や尊皇攘夷を唱へて公家と共に朝廷を動かしたので、朝廷は勅書を幕府に下して失政を責め、幕府の當局者や諸大名が會議をして決定する樣に仰せられ、同文の勅諚を水戸藩にも密に下して諸藩に廻達を命ぜられた。そこで直弼は一擧に此反對の徒を抑へ、幕政の統制を志した。

❷ **處分**　直弼は幕府の政策に反抗するあらゆる反對者を鎭壓し、專制政治による國論の統一、擧國一致の政策實現を期した。今其鎭壓處分を受けた狀況を述べると、

(1) 諸侯　德川齊昭・一橋慶喜・松平慶永……蟄居又は謹愼　(2) 公卿　近衞忠熙・三條實萬(フム)等……免

官（3）志士　橋本左内・吉田松陰・頼三樹三郎等の志士は斬られ、梅田雲濱は獄死し、其他の處罰五十餘人。時は安政六年で、之を安政の大獄といふ。（大獄とは多人數の犯罪者の逮捕される事件）

❸ **結果―櫻田門外の變**　大獄の結果、直弼は却つて志士の憤激を招き、衆怨悉く其身に集り、萬延元年三月三日、遂に水戸浪士佐野竹之助等十七人及薩摩の浪士有村治左衛門等、直弼の登城を擁し、櫻田門外に要擊して之を殺した。かくて直弼の死によつて幕威地に墜ち、尊皇攘夷の論は愈々盛となつた。

二、江戸幕府滅亡の過程（昭一二高等試驗行政科）

櫻田の變以後大政奉還に至る迄の大勢の推移（浦和高）

❶ **公武合體論**　井伊直弼の死後老中安藤信正は、公武合體説をとつて時局を取りまとめようとした。即ち此の考は、朝廷を戴いて諸大名を統制し、公（朝廷）武（幕府）一致して攘夷に當り、國家非常時を打開しようといふにある。そこで將軍家茂の爲に、孝明天皇の御妹和宮親子内親王の御降嫁を奏請した。公卿の中には頗る異議もあつたが、遂に勅許を得て文久元年十月内親王の御東下があつた。併し信正の此策が尊皇攘夷論者の怨を買ひ、信正は坂下門外に要擊されて傷つき、幕威一層地に墜ち、漸次尊・攘論は討幕論に向つてきた。

❷ **四藩の京都守護**　國情は不安であり、幕威無力の爲、朝廷は京都守護に當らしむべく薩長土三藩に之を命じた。一方幕府も會津藩主松平容保（カタモリ）を京都守護職とした。

❸ **勅使の東下二度び**

（1）大原重德の東下　島津久光は公武合體論を支持してゐたので、朝廷に建議し大原重德を勅使とし、島津久光を護衛として東下、（文久二年五月）幕政改革を命ぜられた。そこで家茂は命を奉じて種々の改革を行つた。（即ち將軍上洛の期を定め、慶喜を家茂の後見に、松平慶永を政事總裁職に任じ、參覲交替制を緩めて大名の妻子を歸國せしめ、兵制を改めた。）

（2）三條實美の東下　合體論者島津久光が大原勅使と使命を果して歸國した留守に、攘夷派では長州藩が中心となつて攘夷論を唱へ、文久二年十月三條實美を勅使として東下、攘夷の決行、將軍の上洛を促された。

❶ **將軍の上洛と攘夷決行の失敗**　促された將軍は文久三年上洛し、やむなく攘夷決行の日を五月十日と決定。其日に至り、長州藩は下關海峽通過の米・佛・蘭の船艦を砲擊。翌年英・佛・米・蘭の聯合艦隊の下關砲擊に敗れ、幕府より償金を出して和した。一方薩藩では、曩に大原勅使の東下の歸途生麥で英人を殺した償金十萬磅を支拂つたに不拘、文久三年、英國は軍艦を鹿兒島に送り、加害者の引渡、慰藉料を要求したので、之に從はず、砲火を交へて之を擊退。幕府は英國の復讐をおそれて償金を支拂つてやつた。

❷ **攘夷派長州藩の失脚**　鹿兒島に於ける英艦擊退に勢を得た攘夷派は、三條實美及長州藩の奏請で朝廷を動かし、天皇大和に行幸、神武陵に參拜、攘夷親征の軍議を開かうとせられたが、京都守護職及薩藩の反對で朝議一變して過激攘夷派は抑へられ、長州藩は宮門守衛を免ぜられ、所謂七卿落となり、又此派の志士、天誅組の大和五條の擧兵、生野・筑波山の亂となり、再轉して長州藩と幕府・會津・薩摩・越前・桑名の對戰たる蛤御門の變となつた。長州は遂に朝敵の汚名を被つた。（三七〇頁8・9參照）

❸ **長州征伐**　（1）**第一回**　幕府は朝敵長州藩を征伐して幕威恢復を志し、勅許を得て征途についたが長州藩は恰も英佛米蘭の艦隊の來襲をうけてゐたので戰はずして和した。（2）**第二回**　長藩の恭順を喜ばぬ長州藩士再擧兵の爲、再征となつたが、薩藩が長州藩と合流して、幕軍に參加せず、時に將軍家茂が大阪で急に薨去し、ついで孝明天皇崩御遊ばされ、明治天皇御年十六歲で御踐祚あり、御即位と共に征長軍をとかしめられた。幕府の無力は此の征伐で暴露された。

❼ **討幕運動**　幕府の無力で薩藩も遂に長藩と提携、岩倉・三條と合體、薩長に討幕の密勅が下つた。

❽ **大政奉還**　山内豐信（シゲノブ）の勸告により、時の將軍慶喜は内外の情勢を察し、慶應三年十月大政を奉還。（密勅下賜と同）